

桜魏転生録(加執訂正中)

響歌

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある時平行世界の同一存在5人がそれぞれの世界で同時に死んだ

そしてそれぞれが別々の世界に転生を果たした

そして今から紡がれるのはその内の一人の話である

目次

プロローグ	
終わりの始まり	1
転生の準備・その1	6
転生の準備・その2	10
転生完了!!そして黒猫との邂逅	19
旧校舎のディアボロス	
動き出す運命の歯車	28
過去と接触と迫る選択の時 その1	34
過去と接触と迫る選択の時 その2	40
過去と接触と迫る選択の時 その3	54
はぐれ悪魔と伝説の傭兵その1	62
はぐれ悪魔と伝説の傭兵その2	69
スタンドとは?	76
聖女と真実と復讐者その1	81
聖女と真実と復讐者その2	86
聖女と真実と復讐者その3	93
聖女と真実と復讐者その4	98
再会と激怒	104
決意と騒霊降臨その1	110

決意と騷霊降臨その2	115	恋沙汰と焼き鳥男	202
決意と騷霊降臨その3	119	修業だー！！	207
決着!!そしてライダーとは!?	124	新たな力と覚醒の兆しその1	214
番外編1			
騷霊vs赤き強者 前編	133	新たな力と覚醒の兆しその2	221
騷霊vs赤き強者 後編	146	新たな力と覚醒の兆しその3	227
怒血暴流と使い魔探し 前編	154	新たな力と覚醒の兆しその4	233
怒血暴流と使い魔探し 中編	163	一誠の覚悟	240
怒血暴流と使い魔探し 後編	173	赤龍皇帝の鎧	248
戦闘校舎のフェニックス		第2ゲームスタート	252
復活!!最高のコンビ	186		
合流と遭遇	191		
幻想郷とは?この世界とは?	198		

プロローグ

終わりの始まり

一人の少年が血を流して立っていたその流れている量からして彼はもう助からないだろう……

それを自覚している彼は後ろの仲間たちに一言

「ありがとよ楽しかったぜ」

こうしてこの世界で後に英雄と言われる少年桜魏真九（さくらぎしんく）は死んだ……

はずだった!!!

「……………」

「……何処だよ?」

真九 side

何故俺は生きている？

あの出血量で助かるのはおかしい……

だが事実俺は生きている

まあ良い何故生きてるのかは分からんがその前にここは何処だ？

真つ白な空間何処からが壁で何処からが天井なのか？

いやそもそも壁と天井はあるのか？

駄目だ全く分からん……

「誰か説明してくれる奴はいないのか？」

そんな愚痴が口から出たときのことだ

「私が説明しましょう」

どつからともなくひとりの男が現れた

コイツは何者だ？

まあ良い説明してくれるなら分かるだろう

「ここは何処だ？」

「ここは世界の狭間のような世界です」

「ような？ つてことは狭間とは違うのか？ まあ世界の狭間を見たこともないからなにも
言えんが」

「その通りですここは我ら神々が作り出した空間ですので狭間とはまた違う世界です」
「我ら神々？ てつことはあんたは神様なのか？」

「ええその通りです」

「・・・オーケー大体状況は分かった俺は死んでここに来ちまったんだな？」

「正確には私が貴方をここに導いたんですが大体あつてます」

「なるほど・・・でも何故俺をここに導いたんだ？ 普通は天国か地獄に行くはずなんだろ
？」

「その通りです普通は天国か地獄に行きますですがあなたの場合は少し事情が違いま
す」

「と言うと？」

「貴方の他に平行世界の貴方と同一の存在が5人同時に死んでしまったのです」

「普通では考えられないことなのか？」

「はいその通りです普通それぞれ平行世界の同一人物が同じ年の同じ日同じ時間に同時に死んでしまうなんてことは普通はありません」

「原因は分かったのか？」

「それが全く分からないのです不自然なまでに」

「不自然どういうことだ？」

「普通は何かの手違いや世界の管理システムのバグ等が見つかるのですがそれが一つもなかったのです」

「なるほどね」

「分かったことと言えばその内の一つの平行世界は存在事態が消え去ったということだけですよ」

「マジ？（ ; 〇 〇 ）」

「マジですよ」

「ワオ」

「そしてこれからが本題ですよ」

「？」

「貴方には転生して別世界で生きてもらいます」

「これまたスゲーことになりそうだな」

「なりますよ転生する世界が世界ですから」

「と言いますと？」

「ハイスクールD×D の世界です」

「神様これだけは言わせてくれ」

「？」

「やれやれだぜ」

つづく

転生の準備・その1

心の底から思ったやれやれだのだが面白い何故か？

だが面白い何故か？

理由は簡単だ

おとぎ話での存在でしかなかった生物たちがいる世界だサイコー以外の何者でも無いじゃないか

真「WRYYYY!!」

神「人間をやめたやつみたいな奇声あげながら興奮してるところすまないんだけどもそろそろ準備をしようか」

真「おう!!心の準備は万端だ!!いつでも転生させてくれ!!」

神「いやいやその前にやることあるでしょ?」

真「そうだったな忘れるところだったぜ」

神「本当にすっかりしてくれよじゃあ始め」

真「準備体操を」

神「えー!?何故に!?何故に!?そっちになった!?!」

真「違うの？」

神「違うわ一ミリたりとも当たつたらんわ!!特典だよ特典特典無いと最悪即お陀仏だよね?」

真「確かに能力が無いと大変かも知れないな」

神「どうやって悪魔倒そうとか思ったの!?!」

真「そりゃ十字架をヌンチャクにしたり高圧洗浄機を聖水出せるように改造したりとか」

神「キミ以外とワイルドだね(汗)」

真「イヤーそれほどもく」

神「誉めてねーよ!!?」

神「まあ良いじゃあ早速特典を決めていこうか」

真「はい!!!」

真「神様特典の数に限度とかはあるんですか?」

神「基本は無いけど能力が多いとリミッターをかけるものが出てくるよ」

真「分かりましたでは少し考えるので待ってください」

十分経過

真「神様決まりました!!」

神「それでは教えてくれ」

真「はい!!!一つ目はスタンドを作り操ることができる能力」

真「これにはリミッターとして所持できるスタンドは10体までスタンドを作れるのは一日3回までとしました」

神「うんそれなら問題ないね次は？」

真「はい二つ目はレーヴァテインください」

神「なるほど本物は無理だけどキミ専用新しくレーヴァテインを作ることが出来るんだけどそれで良いかな？」

真「そんなことができるんですか!?!ならば是非お願いし

ます!!!」

神「分かったよなら作るのに時間が結構必要だから転生したあとに届けるねじゃあ三つ目はなにかな？」

真「はい!!!三つ目はゴーストドライバーとオリジナルのアイコンをください」

神「なるほどアイコンはどんなのか決めているのかい？」

真「はい決めているのですが頭のなかにしか無いのでどう表そうかと」

神「それなら問題ないよ少し頭のなか覗かせてもらおうね」

神「あーねなるほどなるほど」

真「神様どうですか？」

神「全然問題ないよ（＾＾）b」

神「とか言ってるうちに完成したよ（＾＾）v」

真「おー俺達に出来ないことを平然とやってのけるそこにシビるあこがれるウ」

神「それほどでもないよそれとおまけでブランクのゴーストアイコンをいくつか付け

といたから」

真「はい!!!ありがとうございます!!」

神「じゃあ次に願うのは？」

真「四つ目は・・・・・・・・」

つづく

転生の準備・その2

俺は答えた

真「四つ目は・・・オリジナルの神器（セイクリッド・ギア）を俺に宿してください」

神「分かったそれでどんな神器を望むのかな？」

真「それがいくつか考えていたんですがどれもピント来ないのでまだ決まってるん」

神「なるほどならナイスタイミングかもしれないな」

真「俺にぴったりの神器があるんですか？」

神「いやまだ神器じゃないけど前からキミに興味を持っていたやつがいてね少し待っててくれるかな？読んでくるから」

真「はい!!!よろしくお願いします!!」

神様はこの空間から一度出ていった

神様
s i d e

イヤー面白くなってきたねー

彼女が神器になるかもしれないなんて長生きはするもんだねー

神「お？噂をすれば!!」

神「オーイー(^ o ^) /」

???
「ん？」

神様 side out

真九 side

神様はいつたい誰を連れて来るつもりなんだろう？

というか出ていくときのあのスゲー嬉しそうな顔・・・本当にいつたい誰を連れて来るつもりなんだ？

まあ良いそれは会ってからのお楽しみにしとくとして最後の望みはどうだろう今までの望みは結構簡単に了承してもらえたが・・・次のは神様だけじゃ決められないからな・・・

真「この後が最大の難関になるだろう・・・」

そんなことを自分に言い聞かせるように口にしたとき

神「オーイー連れてきたよー♪」

神様が帰ってきた

ヤマタノオロチを連れて

真九 side out

真「・・・・・・・・・・」

神「あれダメだった？」

真「いいえ逆ですサイコーじゃないですか!!」

真「ヤマタノオロチが俺の神器になつてくれるなんて夢にも思いませんよ!!感動です

!!!

神「そんなに喜んでくれるなんて予想以上だよ」

オロチ「ええ私もこんなに喜んでもらえて嬉しいですよ♪」

オロチ「これからよろしくお願いしますね♪」

真「おう!!こちらこそだよ!!」

神「なら早速神器に変化させてキミに宿そうか」

真・オロチ『はい!!!』

・・・・・・・・数分後

神「よしこれで終了だ!!この神器名付けて」

神「八頭龍の装甲（ヤマタアーマー）だ!!」

真「ありがとうございます!!」

真「そして改めてよろしくな!!オロチ!!」

オロチ「はい!!!マスター!!」

神「それじゃあ次はあるかな?」

真「はい次は最後の望みです五つ目の望みは・・・天羽奏と紺野木綿季を俺と同じ世界に転生させて欲しいんです!!」

神「なるほど・・・願いとしては大丈夫だけどこれは僕一人では決められないことだね」

真「はい分かってますだから彼女達に俺が話をします」

神「そうかじゃあ二人を探してくるから待っててくれ」

真「はいよろしくお願いします」

こうしてまた神様はこの空間から出たのであった

真九 side

さあ運命の時は近いな彼女達がこれを望むか望まないかは分からない・・・やっぱり

分らないって怖いな

そんなことを思っているとオロチが聞いてきた

オロチ「マスターは何故二人を転生させて欲しいと望んだのですか？」

真「それは俺が生きてた頃に彼女達が死んでしまうシーンを見て思ったんだ彼女達が死ぬ必要はあったのか？救われる道は無かったのかってなそれに俺が言えたことじゃないが彼女達は死ぬには若すぎたんだ・・・」

真「それに友人との約束でもあるんだ自分の信じた道を真っ直ぐ進むってな」

オロチ「そうだったんですか」

真「俺は馬鹿だろ？自分のために二人もの女の子を道連れにしようとしてるんだからな」

オロチ「そんなことありませんよ？」

真「オロチ？」

オロチ「貴方は今まで自分の信じて進んでそして未来を切り開いたじゃありませんか
今もそうですそしてきつとこれからも貴方はそうするでしょう」

オロチ「これは簡単に言ってますが実は凄く難しいことですでも貴方はそれをしているしそれで事実多くの人の笑顔を守ったんですだから私は馬鹿だとは思いませんよ。」

真「そうか・・・ありがとなオロチ」

オロチ「どういたしまして♪あっ!!帰ってきましたよ頑張ってくださいね!!」

真「おう」

真九 side out

さあここからは俺の戦いだ

真「桜魏真九だよろしくな」

奏「知ってると思うけど天羽奏だよろしくな」

ユウキ「知ってると思うけどボクは紺野木綿季気軽にユウキで良いよよろしくね♪」

真「あらためてよろしく」

神「じゃあボクは少し席をはずすとするよ」

真「はい神様ありがとうございます」

そう言つて神様は何処かへ行つてしまった

真「それじゃあ本題に入ろう」

真「二人とも話を聞いているかもしれないが俺と一緒に他の世界に転生させたいと思う自分がやることが偽善なのは分かっているだから断られることも覚悟しているその上で二人に答えを聞きたい」

そう言って真九は深々と頭を下げた

奏「カー！真面目が過ぎるねーそんなにガチガチだとしまいにやポツキリいつちまい
そうだもつと気楽にいかねえか？」

真「いや流石にそれは不味いだろ!?!だって俺はお前達の人生に干渉しようとしてるん
だぞ!?!」

ユウキ「あつ少し本音出た感じだね」

真「え？」

ユウキ「だって最初のガチガチの顔だったのからさっきの奏さんの言葉で結構リラッ
クスした顔になったんだもん」

真「え？マジ？俺そんな顔なつてたの？」

奏・ユウキ『それはもう岩みたいだったよ（ぞ）』

真「ウワーなんか凄まじいなそれ」

真・奏・ユウキ『・・・・・・・・・・』

真・奏・ユウキ『フフ・・・・アハハハ』

真「本当に俺は考えすぎてたみたいだな」

奏「良い顔になったじゃねーか」

ユウキ「その顔の方が良いよ」

真「そうかありがとう」

真「じゃああらためてお願いするるとしよう」

真「俺と一緒に他の世界に転生してみないか？」

奏「私達にはどんなメリットがある？」

真「今まで知らなかった世界を見ることができるもちろん二人とも身体は健康体を頼

むだから俺と一緒に世界の見たことない光景を見てみようぜ〇(≡▽≡)〇」

奏・ユウキ《凄く可愛い笑顔なんだけど》

真「どうした？」

奏・ユウキ『いやなんでもないなんでもない』

真「そうか？じゃあ答えを聞こう転生するしない？」

奏・ユウキ『もちろん答えはする!!』

真「そうか!!じゃあこれからよろしくな奏・ユウキ!!」

奏「こちらこそよろしく頼むぜ」

ユウキ「凄く楽しみだね♪」

そう言つて三人は握手を交わした

神「決まったらしいねじゃあ早速転生しようか」

真「よろしくお願いします」

奏「でもどうやって転生するんだ？」

真「転生で結構典型的なのは落とし穴だけど」

ユウキ「もしかしたら上に吸い込まれたりして」

奏「案外普通にドア通るだけだったりしてな」

オロチ「私も転生させるところを見たことがないので楽しみです」

神「それじゃあ行くよー」

そう言うのと神様は何処からかバットを取り出して

神「いつらしゃーい（カキーン）」

真・奏・オロチ・ユウキ『えー！?!まさかのバットー！?!（ ; 。 ∩。 ）』

こうして彼らは転生していった

神「さてこれからどうなるのか楽しみだな」

つづく

転生完了!!そして黒猫との邂逅

転生できたのか？

真九は回りを見回しただがよく見えないしかし理解はできた赤ん坊として転生したことに

声は出せないただオギャーオギャーと泣くだけである

しかし次の看護師の一言で固まってしまった・・・

看護師「良かったですね元気な女の子ですよ」

そして真九は心のなかで叫んだ

真（ウソだーーーー!!!）

・・・と
言う夢を見た

まさか転生前に夢を見るとは思いもしなかった……

そんなことを思っているとどうとう転生できた

赤ん坊と言うことと泣いていることは変わらないだが

看護師「良かったですね元気な男の子ですよ」

この一言の重要性は真九にとつて相当なものだった女性に転生してしまうと元々男なので悲劇が起きてしまうそれこそ何処かの眼鏡と蝶ネクタイの死神より悲惨なことになりかねない

これで一安心であるだが一安心でしかなかった……

十年後

真「転生で赤ん坊はもう嫌だ……(涙)」

奏「同感だ」

ユウキ「まああれはねーアハハ……」

真九・奏・ユウキは転生してからの2年間ほどを思いだしていた見た目は赤ん坊でも精神や記憶は元々のものを持って転生しているのだそんな状態でミルク飲んだりオムツ交換をしてみる普通の人なら恥ずかしくて死にたくなる

余談ではあるがユウキと奏は家が隣であるので真九との合流は簡単だった

ちなみに年齢も同じである

オロチ「あのーそろそろ修行しに行きませんか？」

真「それもそうだなそれじゃあ行こうぜ奏・ユウキ」

そう言うのと真九達は近くの山のなかに入っていた

そしてこれが新たな出会いへの引き金だとは今は誰も知らない

???
side

ザツザツザツ

??? A 「クソ!! 見失ったか!? ここら辺りにまだ隠れているはずだ探し出すぞ!!」

ここまでももしれないにや三日三晩なにも食わずに逃げ回ってたから流石に限界にや

??? C 「見つけたぞ!!」

見つけたた!! だけでももう逃げる力も残ってないにや・・・

??? B 「苦勞させやがってまあ良いその分樂しませてもらうからなフフフ」

結構あつけなかつたにやここで終わってしまうなんて・・・最後に白音にもう一度会いたかつたにや・・・

??? C 「さあ存分に楽しませてもら・・・」

能力確認だ

今喋ってる奴に狙いを定め俺はスタンドに命令を出して攻撃した

真「殺れ「memoriesドラゴン」・・・」

そうするとスタンドはその巨大な手で喋っていた奴の頭を吹き飛ばした

スゲー威力だな予想以上だ

そんなことを思っていると残りの悪魔達が

悪魔A「何者だ!?出てきやがれ!!」

悪魔B「ぶっ殺してやる!!」

などとほざき出した

コイツら馬鹿だな目の前で突然仲間の一人が殺されたんだしかも的確に頭を吹っ飛ばされてなのにくっ殺すなんてよく言えたもんだよし!!これをネタに煽りに煽ってやろう!!

真「ハハハハぶっ殺してやるだ?ぶっ殺されるの間違いじゃねーの? w w w w w w w w
w w w w w w」

そう言いながら俺は姿を現した

悪魔B「人間!?それもガキ!」

悪魔A「それよりなんなんだそのドラゴンは!」

なるほどねー3人の驚きからするにスタンドが見えるんだへースタンドはスタンド使いにしか見えないはずだけどこの世界では少し理が違うのか

そんなことを考えていると

悪魔A「ガキは後だあのドラゴンさえ殺っちまえばあんなガキ簡単に殺せる!!」

悪魔B「そうだなじゃあさつきと殺してやらー!!」

そう言つて悪魔の一人がスタンドに攻撃を仕掛けてきただが攻撃はすり抜け逆に仕掛けてきた悪魔はスタンドの巨大な手につかまり握り潰された・・・

なるほど見えはするがスタンド使い以外の攻撃が当たらないのは同じとまた良いデータが取れたねー♪

じゃあそろそろ

真「データは十分集まったからお前死んで良いよ♪」

そう言つて俺はスタンドの爪でバラバラに切り裂いた

よしこれで終わりあとは

真「オーイ大丈夫か?」

???「おっお前は何者にや!?!」

真「俺?俺は桜魏真九そんなに警戒しなくてもお前には手なんてだしやしねーよ」

???「そんなの信じられないにや!?!」

「よ」

真「わーったよなら俺をお前の好きないようにすれば良い煮るなり焼くなりすれば良い

??? 「なら・・・お腹すいたにや」

真「え？」

??? 「お腹すいたからなにか食べたいんだにや!!」

真「予想外の注文だなまあ良い今持つてるのはこれだけだがそれで良いか？」

そう言つて俺は持つていたバックからおにぎりを三個出した

??? 「・・・・・・・・」

真「毒なんか入つてねーよホラ」

そう言つて俺はおにぎりを一口食べた

そうすると安心したのか彼女はおにぎりを頬張つた

??? 「ありがとうだにや」

真「そう言えばお前の名前聞いてねえな何て言うんだ」

黒「黒歌だにや!!よろしくにや♪」

真「なるほどあの他者の弱味握つてもてあそんでたクス悪魔を殺した黒歌か？」

黒「え!?!アイツの本性を知つてたのかにや!?!」

真「まあな少し前から調べてたんだがここに至る前にお前がアレを殺したからまあ

知ってるよ」

真「よし決めた!!」

黒「？」

真「黒歌家に来い!!これは決定事項だ異論は認めないよ♪」

黒「親にはどうやって説明するんだにや!?!」

真「それなら大丈夫親も裏のことに関わってる人だから」

黒「でも私を匿ったりしたら悪魔達が何してくるかわからな」

真「それも大丈夫悪魔達が家関係に手を出したり異論唱えてきたりしたら冥界崩壊待ったなしだもん♪」

黒「真九達何者にや!?!」

真「それに」

黒「!!」

真「黒歌お前はもう俺の大事な家族だよだから絶体見捨てねえーよだから安心しろ」

そう言いながら俺は黒歌を抱きしめた

そして黒歌は思いつきり泣いた多分今まで多くの辛いことを我慢してきたのだろう

俺はそう思いながら黒歌をやさしく撫でた

数分後

黒「真九ありがとうにや」

真「別に良いよ家族なんだから」

黒「そつかじやあよろしくにや真九♪」

真「おう!!こちらこそ」

真「それじゃあ行こうぜ!!俺の仲間を紹介してやるよ!!」

そう言つて俺は黒歌の手を引いて走つていった

その後色々大変だったがそれはまた別の機会に

つづく

旧校舎のディアボロス

動き出す運命の歯車

黒歌が家族になって早いもので7年の時が流れた

真「行つてきます!!」

黒「いつてらつしやいにや!!」

黒歌も家に落ち着いている

それどころかも無くしてはならない存在である

まあ毎朝俺のベットに潜り込んで来るのは困るけど・・・

そんなことを考えていると

ユウキ「おはよー真九♪」

真「おう!!おはよう」

奏「朝からよく元気でいられるなあたしは眠くてしょうがないよ」

真「そりや奏は朝に弱いからねーまあ授業中ぐらいは起きとけよ」

真「それより二人ともこの前神様からレーヴァテインと一緒に届いた武器の調子はど
うだ?」

奏「ああバッチリだ!!」

ユウキ「うんボクのも奏と同じでバッチリだよ♪」

真「そうかそりや良かった」

神様に頼んでいたレーヴァテインがこの前とうとう届けられたのだがそれと共に2つの物が手紙と共に入っていた手紙の内容は奏とユウキ用にも特別に武器を作ったので二人に渡しておいてほしいと言うものだった確かに二人ともなにも持たずに転生していたの二人のための武器は本当にありがたかった

二人用の武器は奏はガングニールとほぼ同じ物で衣装もシンフォギアを纏った時とほぼ同じだった違いと言えば槍の形を何種類かに変形させれるところだ

ユウキの場合はユウキの元々使っていた剣と同じで衣装も変化はなかっただが絶剣の時の能力値がそのまま+されるようになっていたので俺たちとの修行で鍛えたのもあって絶剣の比じゃないほどのスピードと反射能力になってしまった

ちなみに俺のレーヴァテインも含めてどれもいつもはアクセサリーの姿になっている

そんな話をしながら俺らが学校へ向かっていると

???「お前ら三人本当仲良いよな」

真「俺はその中にお前も入って四人だと思っぞイッサー」

イツセー「確かにそれもそうだなw おはよう」

ユウキ「おはよーイツセー♪」

奏「おはよーそれと真九・イツセーいつものが来たぞ」

奏がそう言うその後ろから

???・???『死ねー!!真九・イツセー!!』

と言つて飛びかかってくる奴等が二人

真・イツセー『朝からうるせえ!!』

そう言つてイツセーはラリアットを俺は回し蹴りを地面から足が離れている二人に放った

勿論ぶつ飛んだ

真「お前ら毎回返り討ちにされてるのによく飽きないな」

イツセー「本当そうだな松田・元浜そろそろ諦めたらどうだ?」

松田「うるせーリア充め馬に蹴られて死んでしまえ」

元浜「その通りだついでに象に踏み潰されちまえ!!」

この二人は松田と元浜学校でも有名な変態二人組である

松田はその俊足を盗撮などに使う通称変態パラッチ

元浜はその眼鏡を通した女性のスリーサイズを的確に当ててしまうと言うある意味

間違った方向に人知を越えた能力から通称スリーサイズスカウターと呼ばれている

ちなみにイツセーは小学生の頃から俺らの遊びと言う名の修行に付き合わされたのが原因か変態ではあるが時と場所はわきまえているので女子からの評価は普通に良い

真「それじゃ行こうぜ」

そう言つて俺とイツセーが後ろを向いたとき

松田・元浜『隙ありー!!』

真・イツセー『くどい!!』

そう言つて俺とイツセーの右ストレートが顔面にクリーンヒットして二人は伸びてしまった

この後二人が遅刻したのは言うまでもない

そして学校に着いた俺らの通う学校は駒王学園元々女子高だったので女子の数が圧倒的に多い

ユウキと奏は俺ら二人とは違うクラスなので途中で別れた自分達のクラスに入りいつものようにクラスメイトとたわいもない話をしてしていると横から

????「イヤーさつき奏さんにあつたら凄く眠そうだったんだよね昨日はお楽しみにだったのかな」

真「桐生お前はそつちにしか頭が回らんのか・・・」

俺に横から話しかけてきた彼女は桐生藍華（きりゆうあいか）噂では男の尊厳に関わるものを数値化できる能力があるらしく《匠》何て言う二つ名がついている

勿論爆発はしませんよ？

そんなことを話しているとチャイムが鳴りいつも通り授業を受けて昼休みになる俺とイツセーは屋上で奏とユウキの四人で昼食を食べているときだった俺はふと食べるのを止めた何故なら

真「この近くに堕天使が来てるな・・・」

イツセー「お前本当そういうのに敏感だな」

イツセーはちよくちよく俺達の道連れの感じで悪魔や堕天使関係の事件に巻き込まれてるので三勢力のことは既に知っている

勿論自分に宿っている神器についても知ってはいるが発動できてはいない

ユウキ「真九どうするの？」

真「まだ泳がせとくよ目的が分からんし」

奏「下手に行動すれば痛い目を見るのはこっちだしな」

こうして俺達はまた昼食を食べ始めた

そして昼休みが終わり残りの授業も終わり放課後このとき堕天使が動き出した・・・

そしてそれと同時に止まっていた運命の歯車も動き出したのであった

つづく

過去と接触と迫る選択の時 その1

放課後ユウキと奏は先に帰り俺は学校で少しやることがあったのでそれを済ませて帰っているところだイツセーはまだ学校に残っている

真「さあ堕天使たちはどう動くかねー」

そんなことを呟いていると道の端で回りを見回している女性が一人だがあれは……

真「堕天使……」

真「何をやっているんだ？まあちーとぼかし聞き出してみるか」

そんな独り言の後に俺はその堕天使の女性に声をかけた勿論気とかは全て隠してますよ？

真「どうしたんですか？人探しですか？」

???「(なんだガキかまあ良いコイツに聞くか)ああ人探しではないんだがある場所に行きたくてなここだ分かるか？」

真「そこですか？ここからだともあまあの距離ですな案内しますよ♪」

???「ちよつと!!」

真九は堕天使の手を引いて走り出した

真「そう言えば名前聞いてませんね？俺は真九って言います貴女は？」

カラワーナ「カラワーナだ」

真「そうですかならよろしくです♪」

そんな感じで走っていると途中目的地とは違う人目が見つからない空き地があった

真「あそこちようど良いですね少し休みましょうか」

カラワーナ（この少年の手暖かいな何故か私まで・・・）

真「カラワーナさん？」

カラワーナ「あつああそうしようか!!」

そう言つて近くで飲み物を買ひ空き地に入つて行つた

真「そう言えばカラワーナさんは何故駒王町に？」

カラワーナ「少しこつちに仕事でな」

真「へーそんなんですかじゃあ墮天使としてはどおしてここに來たんですか？」

カラワーナ「?!」

真「ハハハ大丈夫ですよ殺したりは絶体しませんから」

真「事実今まで何回も殺せるタイミングがあつたのに殺してないでしょ？」

カラワーナ「まあ今のところは信じてやろう」

真「おうありがとよ（〇〇）」

カラワーナ（かつ可愛い!!）

真「んで墮天使が独断で何しようとしてるの？」

カラワーナ「何故独断だと思った？」

真「その理由はこれ」

そう言つて俺はバックからあるものを取り出した画面付きの通信機である

俺はそれにスイッチを入れたするとある画面に一人の男が写つた

真「オーイお前の部下一人捕まえたぞ」

???「おうそりや恩に着るぜ」

カラワーナ「!?アザゼル様!!」

アザゼル「お前たちなに勝手に行動してるんだ？お前たちの行動は最悪墮天使滅ぼすことになりかねねーぞ!!」

カラワーナ「でつですが・・・アザゼル様は神器を集めているのですよね？なら!!」

アザゼル「確かに神器の研究をやつてはいるがお前たちはどうせ神器を抜き取ろうとしてるんだろ？俺は神器元々持ってたやつも研究対象にしてんだ」

カラワーナ「なつなら!!」

アザゼル「それにさつきも言ったがそこはグレモリーが管理してる土地だ下手すれば殺されるぞ？」

カラワーナ「はっはいすみませんでした」

アザゼル「分かれば良い」

真「カラワーナ代わってくれるか？」

カラワーナ「はっはい……」

真「ありがとよ」

俺はそう言いながらカラワーナの頭を撫でた

カラワーナ「はっはい♪」

アザゼル「んでどおした？」

真「どおしたじゃねーよ独断で行動したカラワーナも確かに悪いが研究に没頭してトップとしての仕事をサボってるお前もお前だお前がもつとしっかり仕事もしてればこんなことは事前に止められたと思うんですがねえ？」

アザゼル「ゴモットモデゴザイマス」

真「分かればよろしい♪」

真「んでカラワーナ含めた他の奴等の処罰はどうするの？」

アザゼル「あーそれならそつちで決めてもらって構わないぜ」

真「オケーじゃあねー仕事サボンなよー」

カラワーナ「貴方は一体アザゼル様にあそこまで言える人間なんて見たことないです

よ!？」

真「あーそう言えばまだ名字名乗ってなかったな俺の名字は桜魏これで分かった?」

カラワーナ「桜魏!?!あの三大勢力の争いが終わる前に出てきてそれぞれの勢力に争いを止めるよう持ち掛けただけじゃなくその後悪魔・墮天使・天使から仕事を受けながら階級としては魔王などと同等かそれ以上の権力を持っていると言われている!?!」

真「まあ間違っていないけれどもそんな大したことじゃねーよ俺ら桜魏は悪魔・墮天使・天使を繋ぐ架け橋的な存在でしか無いんやから」

真「それで話変わるけどカラワーナ俺と一緒に働いてみないか?」

カラワーナ「え!?!そんなことをよろしいんですか!?!」

真「うん当たり前それに俺が処罰は決めて良いって言われてたからね♪」

真「改めて聞くぞ俺と一緒に働いてみないか?」

カラワーナ「はい!!喜んでこのカラワーナの全て貴方に捧げましょう!!」

真「うんありがとう♪」

真九はカラワーナを抱きしめた

カラワーナ（凄いい嬉しくて少し恥ずかしい・・・そっか私真九のことを・・・）

数分後

真「では早速だがカラワーナお前に最初の仕事を与える!!」

カラワーナ「分かりました!!では私は何をすれば?」

真「それは・・・」

つづく

過去と接触と迫る選択の時 その2

気がつけば俺はどこか見覚えのある荒野に立っていた横と後ろには共に戦場を進む仲間達がある仲間はアメリカからある仲間はアフリカからある仲間はブラジルから国境も言葉にも共通性がないそんな仲間たちだがたった一つ同じことを心に思っていたそれは人々に笑顔を日常を希望を絶体に取り戻すこと

十年前俺たちの日常は全て壊れたたった一体の人工知能によって……
世界は破れ壊れ千切れ全てが過去になった

多くの場所で草木が枯れ多くの生物が死んでいき

光・希望・未来全てが絶望へ書き変わってしまった

だがそれでも諦めなかった人達が今ここに集まった最後の希望を信じてここに集まった世界をたつた一体から取り戻すために

そして火蓋が切られた相手の兵隊は全員ブリキそして数々の砲台目の前の仲間が死んだ後ろでも死んだ右のやつも左のやつも死んでた……

人工知能のいる場所に着いたときには俺も含めたったの17人勝利は絶望的だと全員が思ったそう俺以外の全員が俺は残りの仲間をあるラインまで下げたそれは爆発が

届かないラインそれはアイツらの命が助かるラインそして俺は最後の命令を二つ……

一つ目は絶体にラインを越えないこと

二つ目は俺を抜いた16人は絶体に死なずに家族の仲間の所に自分の居場所に帰る
こと

最後爆風に巻き込まれたあとの虫の息の状態一言

「ありがとよ楽しかったぜ」

そして目を覚ましたまだ5時にすらなっていない横では案の定黒歌が寝ている

真「またあの夢か……」

自分の元々の世界での桜魏真九の最後転生したあとでもたまに見る

真「アイツらどうしてるんかねー」

死んでしまったんだらうか？

いいやアイツらは絶体大切な人達の待つてる場所へ帰っているはずだ!!

真「俺のサイコーの仲間だったんだから!!」

そう一言呟いたすると

黒「にや？真九起きてたのかにや？おはよー」

真「おはよう」

そう言つて黒歌の方を向くと黒歌が驚いてその後直ぐに抱き締めてきた

真「どおしたんだよ黒歌？お前らしくねーぞ？」

黒「それはこつちのセリフにや!!なんでそんなに泣いてるのかにや!!」

黒歌に言われて気づいた自分が泣いていたことに

黒「真九はたまに寂しそうな顔をするにや友達のことを話してる時や聞いてるときは特に!!」

黒「なんでにや!?!なんでなにも教えてくれないのかにや!?!なんで一人で背負うのにや!?!」

真「そんなことは・・・」

黒「あるにや!!真九はなにか誤魔化したり隠してたりする時はいつも両手を握ったり閉じたりを繰り返してるにや!!」

俺は驚いた黒歌が自分でも知らない癖に気づいたからだ

黒「教えてほしいにや真九のことを」

俺は黒歌の目を見たときに思い出した一人じゃないことにそして決心が着いた

真「うん分かった」

俺は自分のことを全て話した転生者であること能力は神様から貰ったことユウキと奏も転生者であることそして自分の過去について黒歌は静かに聞いてくれたそして

そして俺は最後に泣いた

黒「怖かったね辛かったね寂しかったね」

真「真九また皆に会いたいよ・・・」

黒「そうだね会いたいよねよく頑張ったね一人でこんなに重いもの背負ってたんだね
本当に頑張ったね」

黒「だけでもう一人で背負う必要は無いんだよ？」

真「うんありがとう黒歌」

黒「当然のことにや家族なんだから」

黒「それと黒歌私も話したいことがあるにや？」

真「？」

黒「私は真九のことが大好きにや!!」

そう言つて黒歌は俺のファーストキスを奪つた

イツセーside

この間は衝撃的だっただって放課後一人で帰っていると告白されたんだぜ？

告白してきたのは天野夕麻（あまのゆうま）ちゃんそして今日はデートの日この日のために真九に相談して作ったデートの予定・・・俺の何かを狙ってる感じだけど・・・

その時はその時だ!!

夕「お待たせ待った？

イツセー「いいやそんなことないよそれより行こうぜ」

夕「うん」

イツセー side out

真九 side

俺は今黒歌・奏・ユウキの三人でイツセーのデートを見張っている理由は簡単だあの

墮天使がイツセーを殺すかもしれないからだ

真「あの墮天使明らかにイツセー殺す気だな・・・」

真「さあどうしようか・・・ククククク」

黒「真九が凄く悪い顔してるにや!!」

奏「んでこれからどうするんだ？」

真「一応選択肢は二つ作ってある」

ユウキ「二つ？一つは倒すでしょ？じゃもう一つは？」

真「イツセーとくっ付ける」

黒「にやっにゃんと!？」

奏「確かにそりゃ面白そうだな♪」

ユウキ「ボクもそれ賛成♪」

黒「でっでもどうやってくっ付けるのかにや??」

真「フフフフそれについては心配ご無用!!」

黒「まっまさかもう作戦は完成してるのかにや!？」

真「勿の論よ昨日から考えに考えた作戦その名も!!」

ユウキ「その名も!？」

真「ハプニングは恋を運ぶ大作戦!!」

奏「一体どんな作戦なんだよ?」

真「まあ見ておきなさい」

黒「その前に見失ったにや!!」

真「いいや大丈夫そもそもイツセーのデートプランを考えたのは誰だと思ってるの?」

真「先回りして仕掛けるぞ!!」

黒・奏・ユウキ『オーオー!!』

十分後

真「よし!!到着!!」

ユウキ「到着したは良いけどここに何を仕掛けるの?」

真「まあ見ときなよ」

真「昨日作成した新たなスタンド!!現れる!!《リキッド・アルケミスト》!!」

奏「見た目は魔術師みたいだな」

ユウキ「それで能力は?」

真「能力は液体を他の液体に変化させる能力さ♪」

真九side out

真九達が仕掛け終わって数分後

イツセー「この公園結構良いところだろ?」

夕「そうね」

夕（もう少し後少してコイツを殺せるそうすればフフフフ）

イツセー「夕麻ちゃんどうかした?」

夕「ううん!!なんでもないそれよりは今度はあっち見に行こう!!」

イツセー「あつちよつちよつと!!」

夕麻がイツセーのを引つ張つて走り出したそして……水溜まりいや元は水溜まりだったらローション溜まりに足をとられた

イツセー「夕麻ちゃん!!」

イツセーが慌てて夕麻を支えようとしたがやはりローション溜まりに足をとられ二人とも転んでしまった

真「作戦成功♪」

真九のこの一言の意味それは……倒れた二人の唇と唇は合わさっている

これこそが《ハプニングは恋を運ぶ大作戦》の目的!!

足を滑らせてその時の不可抗力で二人にキスをさせてしまおうと言うものだったのだこれで作戦は大成功!!

真「さあここからどうなることやら(ニヤニヤ)」

奏「面白いことになりそうだな(ktkkt)」

奏(キス……かあたしもそろそろ覚悟決めて真九に思いを伝えないいけないかな……)

夕麻side

足を滑らせて倒れたのが原因で彼とキスを・・・

アレ私コイツのことどう思ってるの？

殺す相手？邪魔なやつ？あれ？あれ？

まさか私コイツのこと・・・

そつか・・・心の何処かで私イツセー君のこと好きになってたんだ・・・

じゃあ私は正直になってみよう!!

天野夕麻としてじゃなくレイナーレと言う一人の墮天使として!!

レイナーレ side out

イツセー side

ヤバイ!!ヤバイ!!ヤバイ!!不可抗力でも夕麻ちゃんとキスしちゃった!!

あれから凄く喋りにくい!!

そんな感じで気がつけば最後の公園どうしよう!!

夕「ねえ？イツセー君」

イツセー「なっなに？」

夕「まず謝りたいことがあるの？」

イツセー「謝りたいこと？」

夕「私本当は墮天使で実は最初はイツセー君を殺そうと思ってたの・・・」

イツセー「そっか」

夕「気づいてたんだ」

イツセー「確証はなかったけどな」

何となく分かっていたけどそれを認めたくはなかった

夕麻「だけどねさっきのキスをしたときに気づいちやったんだ」

イツセー「え？」

レアナーレ「私墮天使レイナーレは兵藤一誠君のことが大好きです♪」

イツセー「俺もだよレイナー!!危ない!!」

俺はレイナーレをかばって光の槍に刺された・・・

イツセーside out

レイナーレ「ウソ!?嫌!?死なないで!!ねえ!!イツセー!!」

???「自分を一度は殺そうとしたヤツを守るなんてバカなやつめ」

レイナーレ「その声は!!!!!!」

??? 「ふん殺すつもりが殺せなくなるなんてな見損なつたぞレイナーレ!!」

レイナーレ 「ドーナシーク・・・」

ドーナシーク 「お前などもう必要無い!! 死ね!!」

真 「貴様が死ねー！！！！」

真九がドーナシークに斬りかかった

ドーナシーク 「ふつ人間ごときが俺様墮天使に逆らおうだと？ 笑えてくるわ!!!」

奏 「ならその笑うための口切り裂いてやるよ!!!」

奏も攻撃を加えたが避けられる

ドーナシーク 「面白い二人まとめて相手してやるよ」

黒 「二人じゃなくて!!」

ユウキ 「四人なんだよね!!!」

ドーナシークの背後にユウキと黒歌が現れ挟み撃ちにする

ドーナシーク 「ふつ一人は悪魔か全員相手をしたところだがここは引いた方が得策

のようだ」

そう言つてドーナシークは空を飛び退却した

その後真九達が後ろを向くと魔方陣が現れた

黒 「グレモリーの紋章にや!!」

黒歌がそう言うのと魔方陣から二人の女性が現れた

一人は駒王学園三年生リアス・グレモリー

一人は同じく三年生姫島朱乃

リアス「貴方ね？この子を殺したのは？」

リアスは出てくるとレイナーレに敵意を向けた

真「ちげーよそもそもそれだったらそこでイツセーの名前呼びながら泣いてるわけ無
かろうがアホ」

朱乃「あらあら部長をアホ呼ばわりなんてうふふふ……」

真「あ？こちとら親友殺られてイラついてんだよ」

ユウキ「ごめんなさい真九大切な人傷つけられると凄く怒るんだあつでもいつもは優
しい人だから勘違いしないでね!？」

リアス「ええ分かってるわけけどさすがにその殺気を消してくれない？」

奏「ほんとだよ真九一度深呼吸して落ち着け」

奏でに言われて真九は深呼吸して落ち着いた

真「さつきはすまんな気が立ってた」

リアス「いいのよだけどあなたたちは何者なの？」

真「話しても良いが今ここにはオカルト研究部の全員がいるわけじゃないだろ？それ

だったら明日の放課後兵藤含めて全員集めて話した方が良いと思うんだが？」

リアス「それもそうねでは明日聞くことにするわ」

真「そうだな兵藤を悪魔の駒（イーヴィルピース）で転生させるんだろ？」

リアス「悪魔のことに詳しいのね」

真「まあなそれも明日話すが今は良いこと教えてやる」

リアス「？」

真「イツセーには神器が宿ってるそれはイツセー自信自覚してるが問題はここからだ」

真「そいつの神器は《赤龍帝の籠手》ブーステッドギアだ」

リアス・朱乃『!!』

リアス「また凄い神器を持っているわね」

真「確かななそれじゃイツセーのこと頼んだわ」

真「それとレイナーレお前には少し聞きたいことがあるからイツセーの近くに居たいのは分かるがすまないけどうちに止まってくれねえか？安全は確保させてもらうからよ」

レイナーレ「分かったわ」

真「それじゃあな」

こうして今夜は解散になった

つづく

過去と接触と迫る選択の時 その3

リアス・グレモリーにイツセーを任せて俺と黒歌はレイナーレと一緒に家に帰った

真「ただいまー」

??? 「お帰りなさい遅かったわね何かあったの？」

真「うん墮天使が独断で何かしようとしているからそれについて少し調べてた」

出迎えてくれたのは俺の母さん桜魏雪野（せつの）

悪魔も恐れる情報網の数でありとあらゆる情報を収集するスペシャリスト料理の腕も凄まじい

雪「それなら調度良い情報があるわよ」

真「調度良い情報？」

雪「ええもうすぐこっちにシスターがやって来るらしいわ」

真「それがどうして調度良い情報なの？」

雪「フフフそれがねーそのシスター実はあのアーシアなのよ」

真「!?」

真「マジかよ・・・こりやいよいよきな臭くなってきたな・・・」

雪「そういえばそっち墮天使の子は？」

真「ああこの子はレイナーレ俺たちの協力者だよレイナーレも今仲間にも命狙われてるから今日はこの家に泊めるけど大丈夫？」

雪「ええ全く問題ないわよ♪」

真「まあ後の話のご飯食べた後にしよう」

雪「それもそうね」

そうして俺たちはリビングへ行くと

???「おっ!!また可愛い子連れてきやがって黒歌が焼きもちやくだろうw」

真「違うよ父さんてかレイナーレに手出したら彼氏のイツセーに殺されるよ」

???「ー誠君の彼女ねー」

いきなりからかってきたこの人は父親の桜魏龍都(りゆうと)今は俺が桜魏の任を引き継いだが大盛期は生身でドラゴンを殴り飛ばしたことから《龍飛拳の龍都》と言う二つ名を持つほどの規格外である

黒「真九の方が数倍規格外にや・・・」

真「人の心を読むなよ・・・」

そんな感じでご飯食べ現在は二階の自室でレイナーレに質問をしている質問とはいつてもカラワナーナの時と変化はないので・・・

キングクリムゾン!!!

そして夜中え？行き過ぎ？知らんな

真「・・・黒歌にキスをされたときの感覚がまだ・・・（／／／▽／／／）」

真「ダメだ眠れん!!」

真「一度くらいなら良いよね？」

真九は部屋から出て廊下に出たすると人影が一つ

真「こんな時間にどうした？レイナーレ」

レイナーレ「眠れなくて・・・」

真「一誠のこと心配か？」

レイナーレ「いいえそれは大丈夫なんです・・・」

レイナーレ「イツセー君が私を恨むかもしれないと思うと少し不安で・・・」

真「そうかだが大丈夫だよあれはお前の責任じゃねーよアイツ自信が動いた結果だ後悔しない道を選んだ結果だからレイナーレお前は明日アイツに会うときはサイコーの笑顔で向かってやりなそれが一番だよ♪」

レイナーレ「はい!!それではお休みなさい!!」

真「ああお休み」

オロチ「毎回思いますが大マスター貴方は本当にお人好しですね」

真「そうかもな……ってかお前二日ぐらい黙ってたけど何してたの？」

オロチ「神器の最終調整をしていましたこれでマスターが戦闘を行うときより戦いやすい筈です」

真「そうかご苦労様」

オロチ「それでは私も疲れましたので寝ますね……」

真「そうかお休み」

真「なら俺も行くか……」

そう言つて真九は隣の黒歌の部屋に入る

そして次の日いつも通り学校へ行き授業を受けて放課後

イツセー「真九俺が悪魔になつてゐることは……」

真「うん知つてるよお前の殺された現場にいたもん」

イツセー「だよなー」

真「まあもうすぐ案内人が来るから話はその時やね」

そんな話をしてしていると

真「噂をすれば……」

??? 「一誠君と真九君はいるかな？」

女子A 「キヤー木場くんよ!!」

女子B 「一誠×木場よ!!」

女子C 「いいや真九×木場ね!!」

桐生 「甘いわねこれは3Pよ!!」

女子ABC 「なっなんだってー!!?」

真 「木場・一誠早急に離脱するぞ!!」

イツセー・木 「イエッサーー!!」

こうして俺達三人はクロックアップさながらのスピードで離脱した

そして旧校舎前

真 「あつやっぱりここなのね」

木 「気づいてたのかい？」

真 「そりや結界張られてんだから分かるわ」

真 「まあなかに入ろうぜ」

そう言って旧校舎に入っていった

そしてオカルト研究部の看板がある部屋へ入った

真 「・・・悪魔がオカルト研究ってスゲーカオスだな」

木「そこはあんまり触れないでくれるかな？」

真「まあ考えとくわ」

そう言つて部屋へ入つてゐると

奏「二人とも遅かつたじゃねーか」

ユウキ「何か用事でもあつたの？」

真「いやトラブルに巻き込まれかけてた」

木場とイツセーも頷く

リアス「一応全員揃つたようね？なら始めましょうか？」

真「いやまだ二人来てないまあもうすぐ来ると思うよ」

そういつた矢先に

黒歌「真九お待ちせー♪」

レイナーレ「イツセー君お待ちせ」

小猫「黒歌お姉さま!!」

イツセー「レイナーレ大丈夫だったか!？」

真九「まあ言いたいことは色々ありますよがまずは本題へ入りましょう」

イツセー「それもそうだな俺を悪魔に転生させたのはグレモリー先輩つすよね？」

グレモリー「ええ良く気づいたわね？」

イツセー「前に真九から悪魔の特長とかを教えられたので」

グレモリー「なら説明は不要ねそしたら真九貴方に質問よ」

真「ある程度のこととは答えましょう」

グレモリー「貴方は何故悪魔の駒のことを知っているのかしら？」

真「あーそれはこう言うこと」

そう言うとき真九はバックから一つのケースを出して中を見せたそしたらそこには悪魔の駒がまだ一つも使われてない状態で残っていた

リアス「!!何故あなたがそれを持っているの!？」

真「それはな一年ほど前の話だお前の兄でもある魔王サーゼクス・ルシファーにあるはぐれ悪魔討伐を任されたときに報酬として貰ったんだ」

リアス「お兄様からの依頼!? 貴方一体何者なの?」

真「すまねえがそれはまだ話せないだが近いうちに分かる筈だよ」

リアス「そうなら分かったわそれでは貴方はそれを使うの?」

真「まだ考えてる途中だがこの場で決断をしようと思う」

そう言うとき真九は奏・ユウキ・黒歌の方を向くそして

真「奏・ユウキ・黒歌三人は俺の眷族になって欲しいんだがなってくれるか?」

奏「ああ!!面白そうだからなってるじゃねーか!!」

ユウキ「ボクも良いよ!!」

黒歌「勿論私もにや!!」

真「そうかありがとな!!」

そう言うのと真九は悪魔の駒から女王・騎士・戦車を取りだし黒歌に女王をユウキに騎士を奏に戦車を使つた

真「じゃあ俺も・・・」

そう言つて真九自信も特別な転生駒を使い悪魔に転生した

その後はそれぞれが思い思いの時間を過ごして解散となつた

こうして運命の歯車は新たなる歯車を加え回るのであつた・・・

つづく

はぐれ悪魔と伝説の傭兵その1

駒王町の廃工場ここで一人の男が倒れていた頭にはバンダナを右目には眼帯を着けその服装は戦闘服を身に付けており明らか不自然な姿であった・・・

男は突如目を覚ましたそして同時に数々の謎が頭に浮かぶ

自分はあの時あの墓の前で死んだはずなのに何故生きているのか？

そして自分の手を見てそして水溜まりに写る顔を見て更に驚くこととなる何故なら自分が若返っていたからだ

その見た目は自分がMSF《国境なき軍隊》を組織していたときの若さになっていた
そして男の片手にはアサルトライフル腰のホルスターには拳銃がこれは一体誰が自分に渡したもののなのか？

そしてここは一体何処なのか？

謎は増えるばかりであるそうこう考えてると何処からか何かがぶつかる音や複数人の話し声が聞こえてきた男は警戒しながらゆっくりとゆっくりとそちらへ向かっていくのであったそれが自分の新たな出会いと始まりへと近づく一歩一歩だとは思っても
せずに・・・

真九 side

俺達が悪魔になって一週間が経過しようとしていたある日のことであるオカルト研究部に集まっていた俺達に二つの依頼状が届いた一通はリアス先輩達に向けてはぐれ悪魔バイザーの討伐をもう一通は俺たち宛で内容はこちらもはぐれ悪魔の討伐はぐれ悪魔の名はジーヴァはぐれ悪魔のいる場所はどちらも同じ駒王町のとある廃工場俺達は一度夜になるまで解散をして現地での集合をすることになった

しかしこの時の俺は思いもなかったあの伝説の傭兵が俺たちの目の前に現れるなんて……

真九 side out

イツセー「部長お待たせしました!!!」

真「よし!!これで全員揃ったなじやあ突入するとしましょうか」

そう言つて真九は工場のドアを開ける

リアス「イツセー貴方にはそれぞれの駒の特性について覚えてもらおうわ」

イツセー「特性ですか？」

真「ああチエスの駒に役割があるように悪魔の駒にもそれぞれで違った能力が付与されるんだ奏とユウキは特にしっかり聞いた方がいいかもな」

奏「あたし的には実際に動いてみないとなんともねー」

ユウキ「まあまあそう言わずに聞く前と聞いた後では案外違ってくるものだよ♪」

真「そんなこと言ってるうちに来なすったぞ」

バイザー「不味そうな臭いがするなだけど美味そうな臭いも近くからするどんな味がするのかな？」

下半身が化け物に変わり果てた悪魔が現れた

リアス「はぐれ悪魔バイザーグレモリーの名において貴方を討伐するわ!!」

真「ハッハー大人しく円環の理にでも導かれてな!!」

ユウキ「それ悪魔じゃなくて魔法少女だよね!？」

小猫「・・・珍しいユウキ先輩のツツコミ」

黒「私も初めて見たにや!!」

バイザー「その女の紅い髪のようにお前たちを真っ赤に染め上げてくれる!!」

リアス「舐められたものね祐斗!!」

木「はい!!」

木場がそのスピードを生かしてバイザーを翻弄しながら戦う

リアス「まずは騎士（ナイト）ね騎士はスピードに特化しているわ」

真「ユウキの場合は元々のスピードにその武器に付与されていた能力の加算そして騎士のスピードが追加されるもんだから凄まじいスピードになってるはずだぞ？」

木「それ凄いなんで言葉じゃ収まらと思うよ!？」

黒「いつの間に!？」

リアス「次は戦車（ルーク）ね戦車は防御力と攻撃に特化しているわ」

そう言っていると小猫の一撃がバイザーを吹っ飛ばすその体格とは不釣り合いとも言えるパワーの高さが戦車の特性の凄まじさを物語っている

真「奏の場合元々防御が薄いからこれで防御力も十分ついて更には元々のスピードと柔軟性の高い戦闘にパワーが加わったことから一撃一撃が致命傷になりうる攻撃になってるはずだぞ？」

リアス「なるほど真九はあえて弱点を補えるように奏を戦車に選んだのね？」

真「そういうこと☆」

リアス「最後に女王（クイーン）よ女王は騎士・戦車・僧侶全ての特性を持っている強力な駒よ」

そう説明している目の前ではバイザーに雷を落とすに落とすまくって快樂を得ている朱乃の姿があった

イツセー「部長もしかしくなくても先輩って……」

リアス「ええ朱乃は《究極のS》よ」

真「あれが凄まじき戦士なのか……」

黒「真九そのSはシャドーのSじゃないにや!! サデイストのSにや!! それにシャドー
だつたら究極の影になるにや!!」

そんな漫才を繰り広げているともう一体の討伐対象が現れた

ジーヴァ「面白そうなことになってんな? 俺も混ぜるよ?」

真「こつちのターゲットも現れたは良いが面倒なことになりそうだな」

真九の予想は的中したバイザーとジーヴァはその一寸狂わぬコンビネーションで苦
しめてきた

リアス「なんとかこのコンビネーションを崩さない」と

真「ちつ崩せはするんだが下手すりやこの工場まで破壊しかねないから使えないんだ
よねー」

黒「結構ヤバイにや!!」

そんなときだった突如バイザーとジーヴァが背後から撃たれた

そしてその背後には一人の蛇が立っていた……

真九 side

真（あのバンダナ!!あの眼帯!!まさか!?)

俺はあの男を知っている間違える筈もないしかし何故彼はここにいる!?

そんなことを考えているとバイザーとジーヴァが

バイザー「人間ごときが背後から攻撃だど!?!ふざけるな!!」

ジーヴァ「バラバラにしてくれるわ!!」

そう言つて最初にジーヴァが男に向かっていく

リアス「貴方逃げなさい!!貴方ではそいつらには敵わないわ!!」

真「いいやリアス先輩そうとも限りませんよ?」

リアス「え?真九彼のことを知っているの!?!」

真「ええ!!彼は俺が知るなかでも最強とも言つて良い蛇ですよ!!」

俺達がそう言つてると男に向かっていったジーヴァは一瞬のうちに地面に叩きつけられていたやられたジーヴァですら何が起こったのか理解できていないらしく驚愕の顔に変化していた

真「今だ!!今なら行ける!!奏!!」

奏「任せろ!!」

そう言う奏は自分の持つ槍でバイザーを貫いた

真 「よし!!これで大丈夫なはずだ!!」

真 「貴方も協力に感謝するよあんたがいなけりやもつと苦戦してただろうからな
??? 「別に大したことじゃないそれよりここは何処なんだ?」

真 「少なくともあんたの生きていた世界じゃない筈だぜスネーク」
スネーク 「!!何故俺の名前を!?!」

真 「話すと長くなりそうだから少し待ってくれまずはコイツらだ」

リアス・真九 『何か言い残すことは?』

バイザー・ジーヴァ 『殺せ』

リアス 「そうなら消えなさい」

真 「それじゃあな」

こうして二体のはぐれ悪魔はこの世から消えた

真 「それじゃあ場所を変えて話をしようかBIGBOOS」

つづく

はぐれ悪魔と伝説の傭兵その2

はぐれ悪魔のバイザーもジューヴァを討伐したあとと真九達とスネークはオカルト研究部の部屋に戻った

真「それじゃあさっきの話の続きをしようまず貴方は何から聞きたい？」

スネーク「ここは何処だ？」

真「ここは駒王町日本だだが貴方がいた世界の日本じゃないこの世界にはメタルギアは存在しないしA I兵器も発展していない勿論クローン等も存在していないだけではなく貴方や貴方の師匠のザ・ボスも存在していない完全に異世界だ」

スネーク「なら何故お前は俺のことを知っている？」

真「理由は簡単俺も元々はこの世界の住人じゃないからだ」

真「まあ貴方の世界の住人でもないんだがな」

スネーク「俺と違う世界の住人なのに俺を知ってるとはどういうことだ？」

真「まあそういうなるわな簡単に説明すれば俺達の世界では貴方は作り話の中の主人公だった存在なんだ」

スネーク「にわかには信じられんな……」

真「だが貴方はその信じられないことをその目で見たろ？」

スネーク「なら何故俺は若返っている？お前の世界で俺は作り話の中の存在であるなら俺の最後を知っているはずだ」

真「ああ知っているだが貴方がその姿で蘇った理由はすまないが分からない俺がこの世に産まれたときは赤ん坊としてだったからな」

スネーク「そうか・・・」

真「一応聞いとくが貴方は何故あの場所にいたんだ？」

スネーク「気がついたらあの場所にいた」

真「なるほど・・・」

二人は真剣に話しているが奏・ユウキ・黒歌以外のオカルト研究部メンバーは全く話についていけていなかった

そんな時遂にリアスは痺れを切らして質問してきた

リアス「真九さつきから別の世界だとか元々の世界だとかどういうことなの!？」

真「そうだなそろそろ話す必要もあるかもしれない俺と奏そしてユウキがどういう存在なのかを」

真「俺と奏とユウキは転生者なんだ」

オカルト研究部メンバー『!?!』

リアス「その転生って言うのは」

真「ああリアス先輩が思っている通り悪魔とかへの転生とはまた違うものだ」

リアス「つてことは貴方は一度他の世界では死んでると言うこと？」

真「はいその通りです一度死んだ後にこの世界の神とは別の世界の神がある理由から俺を転生させたんですその時に奏とユウキも一緒に転生してもらえるように頼んだんです」

リアス「そうだったの」

真「話を戻しますねこのスネークさんも多分俺達と同じ感じなんだと思います」

真「ですが彼の場合は俺達のように赤ん坊からではないので何がどうなっているのか分からないんです」

イツセー「真九達を転生させたって言う神様からはなにか聞かされてないのか？」

真「ああ全くだそれこそ連絡そのものが滅多に来ないからな」

そんな話をしていると真九の携帯に着信が

真「噂をすればつてやつだな・・・もしもし？」

神「久しぶりだね実は話しておかなきゃならないことがあるんだ」

真「俺の他に別の世界から転生したヤツがいることだろ？」

神「あれ？もしかして遭遇しちゃった？」

真「ああついさっき」

真「なぜこうなっちゃんだ？」

神「それが色んな世界場所に世界の歪みが出現してしまったんだ」

真「なるほどそれが分かったそれじゃあ」

神「何かあつたらまた電話するねー」

この後真九はさっきの電話の内容を伝えた

リアス「大変なことになっているのね・・・」

真「らしいなそれじゃあ話が変わるかスネーク」

スネーク「なんだ？」

真「貴方は悪魔になってみないか？」

スネーク「そんなことができるのか？」

真九頷く

真「実際に俺も元々は人間だしな」

スネーク「そうかだがそれは俺にメリットがあるのか？」

真「メリットあるよまず仕事が入る貴方は突如転生したんだから金なんてないだろ

？」

スネーク「・・・」

真「そしてこれはあんたにとって一番旨い話のはずだ」

スネーク「それは？」

真「ダンボール……」

スネーク「ダンボール？」

真「ああ悪魔の技術を使えば今までになかったダンボールが作れるはずだ!!」

イツセー「さすがにそれじゃあダメだろ？」

リアス「私も同感よイツセー」

スネーク「交渉成立だ!!」

この一言に真九以外の全員は驚いたまさかのダンボール一つでここまで動くとは思っても見なかったからだ

黒「いいのにかにゃ!？」

小猫「予想外です……」

その後真九は転生や悪魔の駒についての説明をした後スネークを転生させ始めた

真「それじゃ始めるぞ」

真九は一つ兵士を取り出し転生させようとした

だが反応が無かった

真「マジかよ兵士一つじゃねえってことは《オロチ》スネークの神器の有無を調べて

くれ」

オロチ「はいマスター分かりました」

リアス「真九貴方神器持ちだったのね？」

真「まあなコイツは《オロチ》名前で分かると思うが日本神話に出てくるヤマタノオロチが神器となつた姿だ」

オロチ「マスターやはり彼は神器を宿しています」

真「やはりかならどの駒で転生させようか・・・」

真九がそう言ったその時さつきスネークに使おうとしていた兵士の駒が変化した形こそ変化は無いのだが駒の色が蒼だったのがまだら模様に変化していたそうスネークの着ている戦闘服のように

リアス「これは!？」

真「変異の駒か・・・面白い」

そう言って真九はその変異の駒をスネークに使用したそうするとさつきまで無理だった兵士一つの転生が何事もなく終わった

真「それでは、スネークこれであんたも俺の眷族だよろしくな!!」

スネーク「よろしく」

二人が握手を交わそうとしたその時、突然スネークは背後から矢で貫かれた。

真九以外「!？」

真「スネーク!？」

つづく

スタンドとは？

何処からともなく現れた矢に背後から貫かれたスネーク。

結論から言えば無事だったもつと言えば無傷だった。それこそ矢で貫かれたのが幻であつたとも言うかの如く。

そして、貫かれたスネークの横にはダンボールが現れた。それは理解できたしかし何故ダンボールが現れたのか、そして何故スネークはそれに入り先程から部屋のなかを駆け回っているのか……真九以外の全員は理解ができなかった。いや彼がどんな存在であるか知らない者には絶対理解ができる筈もないそんな微妙な空気の沈黙はこの一言から打ち破られる

スネーク「凄すぎる!!」

スネーク「なんだこれは!?見た目は何の変哲もないダンボールの筈だが、普通のダンボールより圧倒的に軽い!!それこそ紙を被っているかのよう!!しかし触った感触だけでも分かる頑丈さ真九これは一体なんなんだ!」

リアス「そうよ!!それは一体なんなの!?!そして何故彼はさつきからダンボールに入っ

て駆け回ったり、ダンボールを熱く語ったりしてるの!？」

真九「まああまりアス先輩落ち着いてください。順に説明しますから」

リアス「じゃあまず、あのダンボールは何かしら？ さつき矢で貫かれたのが原因なのは何となくわかるわ。だけど何故ダンボールなの？」

真九「そうですねまずそこからですね。そのダンボールはスタンドと呼ばれる存在です。」

イツセー「映画とかでアクション担当する？」

真九「そりやスタントだアホ。俺が言ってるのはスタンド。どんな存在かと言われると、最も分かりやすく言えば自分の分身ですね。」

リアス「分身にしては、形も見た目も全く違うのだけど。」

真九「そうですね。スタンドつてのは、自分の分身ではありますが形や色は千差万別・十人十色・三者三様です。しかし、どのスタンドにも共通していることがあります。」

木場「共通していること？」

真九「一つは、どのスタンドも何かしらの能力を持っていること。」

リアス「能力と言うのは、具体的にどういう能力があるの？」

真九「それもまた多すぎて能力の部類分けなんて簡単にはできません。まあ例を出すなら、ありとあらゆる物を直す能力や、一種の未来予知能力また特殊な能力こそ無いが

スピードやパワー等の能力が異常に高い事が能力なんてスタンドも存在します。それこそ、そのスピードは騎士の何倍も早くパワーも戦車なんて足元にも及ばないスタンドだって存在します。」

リアス「にわかには信じられないわね。特に目の前のそのダンボールが最初に目にしたスタンドってだけあって……」

小猫「リアス部長に同感です……」

真九「それもそうだななら…… memoriesドラゴン!!」

リアス達グレモリー眷族「!!」

リアス「ドツドラゴン!」

真九「コイツもスタンドです」

朱乃「あらあら大きさも全く違うのですね。」

真九「はい。ちなみにコイツはまだ大きいスタンドの部類では、小さい方です。もつとでかいのになると、建物や乗り物そのものがスタンドだったり、体を霧のように変化させて町一つ覆うことのできるスタンドも存在します。」

イツセー「いやいやでかすぎるだろ!」

真九「ちなみに小さいスタンドだと、耳程度の穴でも簡単に体内に侵入できるスタンドもいるぞ?」

小猫「それはそれで小さすぎるので捕まったら力が弱いので大変だと思えます……」

真九「良いとこ気づいたね小猫ちゃん。記念に御菓子一袋プレゼント♪」

小猫「先輩……ありがとうございます……♪」

真九「どういたしまして。でもねーそれがそうでもないのよ」

リアス「どういふことかしら？」

真九「実はなー、スタンドには他にも大きな共通点が2つほど存在してんだ。」

真九「その一つがスタンドは基本スタンド使い以外には見えない。だがこれに関しては、悪魔等には普通に見えてる。理由は不明ですがね」

真九「だが問題は次の特徴だ。スタンドはスタンド使い以外には基本触れることすらできない。正確に言えばスタンドの方はこつちを攻撃できるが、相手はスタンドに攻撃を当てる事ができないですね。」

リアス「!?ならスタンド戦う術なんて無いのと同じじゃない!!」

真九「たしかにそうですね……おっともうこんな時間に時間が!」

真九「もつと説明が必要ではあるが今日はみんな疲れてるだろうからこの話は次の機会なそれとスネークあんたには一時俺の家で過ごしてもらおうわ」

スネーク「ああよろしく頼む」

こうしてそれぞれが自分達の家に帰宅して一日が終わった……

そして次の日とある空港

??? 「ここが日本なのですね!!」

一人の聖女がこの日本に降り立った

つづく

聖女と真実と復讐者その1

スネークが仲間に加わった次の日イツセーと真九は二人で街中を歩いていた特に何か目的があるわけでもないが暇だった真九は散歩していると偶然イツセーと出会ってそのまま特に理由もなくイツセーと行動を共にしているのである

真九「あー・・・暇だ・・・槍の雨でも降ってこないもんかねー」

イツセー「そんなもん降ってきたら迷惑なんてもんじゃーねーよ!!」

真九「だが暇だからしょうがない俺を暇にしたヤツが悪いよく言うだろ? お前の命は俺の命俺の命は俺の命って」

イツセー「なにそのジャイアニズム!？」

イツセー「まあいいやそういえばレイナーレはどうしてるんだ? お前の家にいるんだろ?」

真九「ああ、だが会うにはもうちよつと時間が必要かもねまだ墮天使がこちら辺に潜伏してるしあの時のこと責任感じてんのかまだ引きずっている感じやもん」

レイナーレはあの日から安全性も考えて真九の家で過ごしているのだがイツセーが一度殺された時のことに責任を感じて一週間ほどたっても未だにイツセーと会うこと

ができずにいる現状にあった

真九「まあ今度お前から会ってみれば？顔見て話さねえ限りあれは解決しねえだろうし」

イツセー「ああ、そうするよ動かなけりや解決できるものも解決しないもんな!!」

人との関係は時としてヒビが入ったり壊れたりしてしまふものだが互いがまだ関係を修復したいと思っているならきつと修復できるきつと……

???「はう!!」

そんなことを思っていると可愛らしい声が聞こえてきたので声をする方を見てみるとシスター服の少女がコケていた

イツセー「大丈夫か？」

???「はい！大丈夫です！」

イツセー「そうかそりや良かった」

???「!!私の言葉分かるんですか!？」

そうだったそう言えば悪魔には全言語翻訳能力とかいう凄まじい能力があったんだな悪魔相手にしてるだけだと分からないが実際に悪魔になるとその凄まじさが良く分かるな

真九「まあね俺の名前は真九んで最初に君に声をかけたのが兵藤一誠だ君の名前は

「？」

アーシア「アーシア・アルジエントと申しますアーシアとお呼びください」

イツセー「よろしくな!!アーシア」

真九「俺もよろしくし(この子があのアーシア・アルジエントか……)」

イツセー「そういえばどうしてこんなところに？」

アーシア「実は道に迷ってしまいました」

イツセー「それなら俺が道案内するよ」

アーシア「本当ですか!?!ありがとうございます!!」

イツセー「それで何処に行こうとしてたんだ？」

アーシア「はい、教会を探してるのですが」

イツセー「分かったなら行こうぜ」

真九(教会?確かに教会はあっただがあれは二年前に……)

イツセー「真九どうかしたのか？」

真九「いやなんでもない行こうぜ」

道案内をしていると公園で男の子が膝を怪我をして泣いていたしかしその傷をに

アーシアが手を当てると傷がな消え怪我が治っていた

真九「!!」

イツセー「真九あれは・・・」

真九「ああ、神器だしかも相当上位の」

男の子「ありがとうお姉ちゃん!!!」

男の子はそう言いながら手をふる

アーシア「あの子はなんと言ったのですか?」

真九「そういう分からねえんだったなあの子はありがとうと言ったんだ」

イツセー「スゲー力だな!」

アーシア「はい、治癒の力です・・・神様から頂いた大切な・・・」

そう言っているアーシアの顔は何処か寂しそうだつた

真九（こりや完全に訳ありだな・・・）

イツセー「多分あそこだろ?アーシア」

アーシア「一誠さん真九さんありがとうございますそれでは」

そう言つてアーシアは行つてしまった

真九（あの教会は!!間違いないあそこは二年前俺が・・・）

その日の夜部室で一誠は部長に怒られた

リアス「二度と教会に近づいちゃダメよ」

リアス「真九貴方もよ貴方は悪魔と元々関係を持つてるのだから知らないわけは無い

はずよ？」

真九「……………」

リアス「真九聞ってるの？」

真九「ああ、それは分かっているそもそも問題ないと思わなけりや基本近づかねーよ」

リアス「それはまるで貴方があそこの教会は安全だと確認しているように見えるのだから？」

真九「その通りだ」

リアス「!!理由を教えてもらえる？」

真九「分かった」

真九「二年前確かにあそこは教会だったよなにせあの教会を破壊して神父達を追い出したの紛れもなく俺だからな」

オカ研メンバー『!!?』

つづく

聖女と真実と復讐者その2

真九は教会を破壊した時のことを話し出した

真九「あれはあの教会の連中が俺に喧嘩をふっかけてきたのが原因で崩壊したんだ」
リアス「その時のことを教えてくれないかしら？」

真九「元からそのつもりだよあれはあの教会に新しく悪魔祓い（エクソシスト）が来た日のことだったよあの悪魔祓い達何を思ったのか家に奇襲かけてきやがったんだ」

黒歌「その時前日のはぐれ悪魔討伐で疲れて真九は寝てただけど寝てたのを無理矢理起こされるはめになって激怒して全員再起不能にしたのにや」

ユウキ「真九は黒歌や両親・奏・僕以外に家で寝てるところを無理矢理おこされると機嫌が悪くなるどころじゃすまないからねーあはははははは・・・」

リアス「・・・・・・」

イツセー「ぶつ部長？」

リアス「!!ごめんなさい驚きのあまり反応ができなかつたわ」

黒歌「ちなみにその後家に奇襲かけてきた悪魔祓い達を引きずって教会まで行ったの
にや」

奏「あの時の真九の機嫌の悪さは異常だったな」

黒歌「それで教会で暴れまわってたにやあれはそれこそ途中でガブリエルが止めにはいるほど盛大に」

リアス「熾天子（セラフ）の一人が止めに来るほどなんて貴方本当に何者なのよ!？」

真九「前にも言ったが近いうちに分かるよw」

真九「んで話を戻すけどその後あそこの教会は手放して俺が新しい場所を提供することで落ち着いたよ」

こうして話は終わりリアス眷属は契約集めを黒歌・奏・ユウキは帰り真九も別の用があるので黒歌達と帰った

真九 side

俺は黒歌達と途中で別れとあるカフェに来た

俺は店に入るとカウンターの向こうにいるマスターに

真九「コーヒーミルク有りでいつものを」

マスター「・・・それでは奥でお待ちください・・・」

そう言われ俺は一枚の紙を渡された

真九 side out

真九「赤……」

真九はそう一言呟き店の奥へ行く

するとそこには左手前から順に赤・紫・青の扉があり反対側は手前から順に白・灰色・黒の扉があつた

真九はその中の手前の赤の扉を開けて中へ入る

その部屋にはカラワーナがいた

真九「どうだ？ドーナシークの動きは？」

カラワーナ「はい、彼はアーシア・アルジエントの神器を自分に移植しようとしています」

真九「やつぱりアーシアが関わっていたか……」

カラワーナ「真九様はアーシア・アルジエントが関わっていたのが分かっていたのですか!？」

真九「ああ、最初こそアーシアが駒王町に来るってだけだったから確信は持てなかったが今日アーシアに会って更に彼女が行く教会は建物こそ現存してるが二年前に俺が神父達を追い出した教会でガブリエルとも交渉してあそこは今や使われてなかったも

んだからすぐ確信を持てたよ」

カラワーナ「まさかあの教会を真九様が……」

そう言いながらカラワーナはコーヒーカップを手に取りコーヒーを飲んだ

顔はいたって冷静であったしかしそのコーヒーカップを持っていて両手は震えていた……

真九「カラワーナお前の横に座るけど良いか？」

カラワーナ「はっはい!!」

そうして真九はカラワーナの横に座りコーヒーカップを持っていて両手を自分の両手で包んだ

カラワーナ「!!」

真九「カラワーナスゲー震えてるじゃねーか……やっぱり俺のことが怖いのか？」

カラワーナ「いえ真九様のことは怖くありませんしかし桜魏と言う名は怖いです……」

真九「そつか……」

カラワーナ「!!?!」

真九はカラワーナに膝枕をした

真九「カラワーナ良く聞けよお前はなにも怖がらなくて良いんだよ」

真九が優しくカラワーナに言った

カラワーナ「真九様しかし私は貴方にどう接すれば良いのですか？私には分からないのです」

真九「そつかならカラワーナお前は俺にどう接したいんだ？」

カラワーナ「それは・・・真九として私が好きになつた人として／／／／／／／／」

真九「そつかならそうすれば良いじゃんカラワーナ自分に正直で良いんだよ今まで自分に嘘つかないといけなかつたかもしれないけどここではもうそんな無理する必要は無いんだよ」

カラワーナ「はい／／／」

カラワーナ「真九もう少しこのままで良いですか？／／／」

真九「ああ、いいよ」

カラワーナ「ありがとうございます／／／」

十分後

お会計を済ませて別れ際に

真九「その笑顔だったらもう大丈夫そうだな」

カラワーナ「はい♪」

真九「それじゃ頑張れよカラワーナ」

カラワーナ「はい!!」

カラワーナ「そう言えば最後に一つだけ良いですかレイナーレは今どうしているのですか……」

真九「一応無事だが自分が原因で大切な人を傷つけてしまったショックからまだ立ち直れていないな……」

カラワーナ「そうですか……ありがとうございます」

真九「おう！」

カラワーナ「それと最後に……」

カラワーナは真九を抱きしめた

カラワーナ「それでは行ってきます♪」

真九「行ってらっしゃい！」

こうして真九はカラワーナと別れたあとの帰り道

真九「ここ最近はある程度平和だ……この臭いは血？」

真九は臭いのする方へ行つたと人払いと結界が張つてある家を見つけた

真九「はあ……今平和が終わつた……」

聖女と真実と復讐者その3

一誠は今日最大のピンチを前にしている・・・

話は遡ること数時間前真九達が帰った後の話になる一誠は部室で待機していたそうするといつものように悪魔召喚が行われる自分が行くことになったそういつものように自転車で・・・

そこまでは良かったのだ契約者の家の前にも迷うことなく行けたら

だがしかし運命はその後一誠がいつものように契約を取り損ねて自転車で帰ることを許しはしなかった

一誠は契約者の家に入ると早々に身構えた何故なら血の

臭いがしたからだしかもその臭いの強さから結構な血が流れているのが予測できるほどに

一誠は一步一步慎重に歩みを進めながら臭いの強い場所に近づく

そして行き着いた先はどこも変わったところがないリビング

・・・男が一人血溜まりの中に倒れていなければ・・・

一誠は警戒心を更に高めながら倒れている男の元に駆け寄り首筋に指を当てる

う．．．
 ．．．脈は無いだが体はまだ温かい死んでからまださほど時間がたつてないのだろ

イツセー「殺した奴はまだ近くにいるかもしれない．．．」

一誠の考えは最悪なことに的中していたことが次の一言で分かった

??「大正解♪正解したので悪魔君には景品として光の剣をプレゼントしてやるぜー
 !!」

イツセー「っ!!」

一誠はとつさに左に回避行動を取り攻撃を避ける

そして今に至る

イツセー「テメー誰だ!?何でこんなことをした!?!」

フリード「俺の名はフリード・セルゼン良く覚えてな悪魔君貴様をこれから貴様を殺す男の名だ」

フリード「それとそこの奴を何故殺したかだったな?そんなの簡単だ悪魔の力を借りようとする奴なんざクズ以下だから殺した」

イツセー「テメーふざけやがって!!」

フリード「言ってるテメーみてえなザコがどんなに吠えても結果は変わらねーから
 な」

そう言い終わるとフリードが攻撃を仕掛けてくる

一誠はそれをなんとか避けるが避けた瞬間にフリードがもう左手に持っていた銃で一誠の肩を撃ち抜く

イツセー「グアッ!!」

一誠はなんとか立ってはいたが激痛が体を駆け巡っていた

フリード「異常にイテェだろ? そりやそうだこつちははぐれても悪魔祓いだからなテメーに致命傷与える武器を持ってないわけ無いだろ?」

イツセー(アイツ強い!! 俺も一応戦えるが格が違うだがどうにかしなきゃ殺られる!! だがどうすれば良い!?! せめて赤龍帝の籠手が使えれば……)

その時一誠の脳裏には二つの映像が浮かんだ一つは初めてオカ研に来たときにリアスから言われたことだ

(回想) リアス「神器を発動させるには自分中で最も強いと思うものを重い浮かべなさい」

そしてもう一つは先日のはぐれ悪魔バイザーとジューヴァとの戦闘の時のスネークの体術

イツセー(一か八かやるしかねえ!!)

フリード「これで終わりだザコがー!!」

フリードが剣を降り下ろす

一誠は目を閉じる

イツセー（俺が最も強いと思うものそれは・・・それは真九!!）

その刹那!!

「Boo st!!!」

その音声とともに一誠の片手には龍のような爪が特徴的な籠手が現れた

そして一誠はフリードの剣を避けるフリードは瞬時に左手の銃をかまえた

だがその瞬間一誠はフリードの構えた左手の手首を掴む

「E x p l o s i o n !!」

それと同時に籠手からも音声 flowed

イツセー「くらいやがれー!! C・Q・C!!」

叫びと共に一誠はフリードを背負い投げの要領で床に叩きつけたその瞬間床が大きく凹むそれはそうだ悪魔の力を赤龍帝の籠手で2倍にした力で叩きつけたの当然である

生身の人間がまともに受ければただではすまないだろう

だがフリードは違った

フリード「さっき俺はテメーにザコって言ったよな？前言撤回だテメーは強い」
フリード「その強さを認めてこっちも本気で相手をさせてもらうぜ!!!」

そう言つてフリードが攻撃の体勢をとろうとしたその時

???「キヤーーーーーー!!!!」

扉の前から叫び声が聞こえた

イツセーとフリードは同時に扉の方をみると

イツセー・フリード『!!?』

そこにはアーシアが立っていた……

つづく

聖女と真実と復讐者その4

《魔方陣が出現したしかしイツセー・アーシア・フリードは気づいていない》

アーシア「イツセーさんどおして……？」

フリード「アーシア来ると言っただろ!!!」

アーシア「フリード神父これは……」

フリード「これが俺達の仕事だよ……悪魔に見いられた人間を殺すつてのがな……」
フリードはどこか悲しそうに言った

フリード「アーシアお前こそその悪魔と知り合いだっただんな」

アーシア「イツセーさんが悪魔……？嘘……!!」

イツセー「すまないアーシア騙すつもりはなかったんだから……もう会わないようにと思って……」

フリード「……アーシアすぐ終わらせるだから他の部屋に行つてろお前も知り合いが殺される場所は見たかねーだろ？」

そう言つてフリードは再び戦闘体勢に入りそれと同時に一誠も構えるしかしアーシアはその二人の間に割つて入った

フリード「アーシアさんの真似だ？」

アーシア「フリード神父どおかお止めくださいこの方をお許しをどうかお見逃し下さい!!」

フリード「アーシア自分が何をしているのか分かっていいるのか？」

アーシア「例え悪魔だとしてもイツセーさんは良い人です!!」

フリード「あー・・・アーシアシリアスしてるとこ悪いがそいつ人じゃなく悪魔から正確には良い悪魔だぞ？」

イツセー「何故そこでツツコミを!？」

アーシア「例え悪魔だとしてもイツセーさんは良い悪魔です!!」

イツセー「アーシアも何で一々言い換えたの!？」

フリード「悪魔に良い奴なんかいるわけねーよ俺の家族は悪魔にも殺されんだからな!!」

イツセー「そしてまさかの全スルー!？」

イツセー「そして今さらつとスゲー重大なことカミングアウトしたよね!？」

アーシア「いいえイツセーさんは良い悪魔です現に今は攻撃のチャンスなのにフリード神父と私の会話に親切にツツコミをしてきてるじゃないですか!!!」

イツセー「えー!?!そこ基準!?!確か攻撃のチャンスをツツコミに費やしてるけども

!!

フリード「……一発だ」

イツセー「え？」

フリード「次の一発を耐えることができたら見逃してやる」

アーシア「フリード神父……」

イツセー「折れた!!まさかの折れた!!あそこまで恨んでるのに!!!」

フリード「さっさとやるぞ!!」

イツセー「おっおう！」

二人は構えたまま数分がたった……その時

「ゴーン・ゴーン・ゴーン」

時計鐘が鳴り響きそれを合図にフリードとイツセーは動き互いの体がすれ違い数歩進んだ先で止まる

そして倒れた……二人同時に

フリード「ハハハ……まさか相討ちとはな」

イツセー「まあ俺もギリギリだったかな」

リアス「それじゃあイツセーは返してもらおうわよ」

朱乃「フフフ良い勝負でしたわよ」

小猫「熱い勝負でした・・・」

木場「ナイスフアイトだったよ」

イツセー「皆いつから見てたんすか!？」

朱乃「その聖女さんが「イツセーさんどおして」って言った時からですわ」

イツセー「半分ぐらい聞いてるじやないですか!？」

フリード「木場生きてたのか・・・?」

木場「ああ、あの時他の皆が僕を逃がしてくれたんだその後死にかけのてた所をリアス部長が助けてくれたんだ・・・・・・・・・・」

フリード「そうか・・・・・・・・・・」

リアス「・・・・・・・・・・」

真九「しんみりしてるところ悪いが急いで撤退した方がいいぞ墮天使がこっちに向かってきやがってる」

リアス「!!!!真九!?貴方いつから!？」

真九「偶然のここ見つけてなまあタイムリングは朱乃先輩が言ったのと同じだよ」

真九「まあそれはどうでも良い急いで撤退しな」

リアス「ええ分かったわ!!行くわよイツセー」

イツセー「アーシア達は!？」

リアス「ごめんなさい彼女は眷属じゃないから無理なの」

イツセー「そっそんな!!」

アーシア「イツセーさん私達は大丈夫です!!」

真九「イツセー安心しろそのフリードって奴は信用に足る奴だそいつと一緒なら多分大丈夫だ」

イツセー「分かった真九が言うなら俺も信じる!!」

そう言つてイツセー達は転送された

真九「じゃあ俺もずらかるかそうそうそれとアーシア最後に一つお前良い先輩持ったな」

アーシア「え?」

真九「そいつが何故アーシアに結界を張らせに行つたとたと思う?そいつはアーシアに殺すところや死体を見せないようにするためにするためにするためだよ」

アーシア「フリード神父……」

フリード「ちつ余計なことを……」

真九「それじゃーねー♪」

こうして今日は幕を閉じた……

再会と激怒

フリードと戦いアーシアと最悪とも言える再会を果たした数時間後一誠は治療を受け帰った……

イツセー（俺の力はまだまだ弱い今回の相手が良い奴だったから良かったが相手がフリード以外だったら絶対に死んでた）

イツセー「もつと強くもつと先を指さねえと……」

その一言が一誠の部屋に静に響いた

時を同じくして真九は

真九「カラワーナに調べさせてたことと照らし合わせるともうすぐやな……」

真九（できる仕込みはした……後はアイツらがそれに引っ掛かるかどうか……）

真九「にしてもあのフリードって奴……」

真九「面白そうな奴やな♪」

次の日の朝一誠はジャージ姿でランニングをしていた

イツセー（真九は前に言っていた神器つてのはそれをその身に宿している者達のはそいつらの鍛え方次第で

変化すると)

その時

真九「おはようイツセーどうや調子は?？」

イツセー「真九どおしたんだ?」

真九「いや暇だった時にお前を見つけてから声かけたそれだけだ」

真九「ついでだからランニング一緒にやるわ」

そうしてランニングをした後に公園に到着した

真九「面白いやお前なんでランニングしてたんだ?」

イツセー「昨日の戦いで自分が弱いことが十分に分かったんだだから」

真九「強くなろうとね」

真九「確かにお前は弱いなそもそもその神器の特性も理解それほど理解してないだろ?」

イツセー「ああ、」

真九「まあ急ぐ必要はないよ」

そう話が終わった後に

アーシア「一誠さん? 真九さん?」

イツセー「アーシア!! どおしてここに!？」

真九「その前に飯食いに行こうぜ腹がへってはなんとやらって言うしな」
 そうして数時間後

真九「クソがクソがー！！！！」

真九「殺す絶対殺すあのカラス風情がふぎげやがってー！！！！」
 イッセー「おっ落ちて着け真九！！」

リアス「そつそうよイッセーの言う通り落ち着くのよ！！」

「……………何故こうなったのかと言えばアーシアと再会した後に一誠と真九はアーシアをいろいろな場所に連れてつたりアーシアの話の聞いたりして楽しんでたしかしドーナシークが現れてアーシアを連れ去ったしかしそれだけでは真九もここまでは怒らない問題は連去つた時にアーシアにした脅しとも言える交換条件だ簡単に言えばアーシアが戻らないのならフリードを殺すと言うものだったそしてドーナシークは真九達の目の前にボロボロのフリードを見せつけたそれが真九の怒りに触れたのだちなみにフリードはそのままそこにおいてかれたので真九と一誠がオカ研の部屋に運んだ」

真九「すまねえ……………リアスあのカラスどものいる場所に攻撃しかけるぞ」

リアス「何を言ってるの!?! 真九!! そんなことしたら墮天使と戦争になりかねないわよ!!」

真九「それなら問題ないアザゼルからは許可もらってるし」

そう言うのと真九は一枚の紙を取り出した

リアス「真九貴方本当に何者なの？」

真九「今はどうでも良いだろ？それより攻めこむぞ」

リアス「それなら私は朱乃と裏から行くわ」

真九「そうかあえて囷になるかなら相手側に俺の仲間の墮天使がいるからそいつと協力しな名はカラワーナって奴だあと極力相手は殺すなよ？」

リアス「分かったわ真九」

リアス「それとイツセープロモーションを許可するわ全力でやりなさい!!」

イツセー「ハイ!!」

リアス「それじゃあ先に行くわね」

そう言うのと魔方陣で転送されて行った

真九「お前は どうする？フリード」

フリード「・・・なあ真九俺の頼み聞いてくれるか？」

真九「内容次第だまあ言ってみてくれ」

フリード「俺をお前の眷属にしてくれ・・・」

木場「フリードそれで良いのかい？君は悪魔を嫌っているだろ？」

フリード「ああ、だが真九やリアス・グレモリーは別だここまでしつかり手当てして

くれたんだからな」

真九「なら決定だな!!」

そう言うのと真九は懐から兵士の駒を一つ取り出す

真九「これからよろしくな!!そして最初の任務はイツセー達と共に教会に攻めこんでくれ」

フリード「言われるまでもねーよ!!」

真九「俺は一度向かうところがあるからまた後で合流しよう」

イツセー「分かった」

真九「あとと言うことと言えば全員無理だけはすんなよーーーー」

子猫「真九先輩も人のこと言えないと思います・・・」

真九「全くその通りだな」

真九「それじゃあ改めてスタートしようぜ!!」

こうして一誠・木場・子猫・フリードは教会に向かった

オロチ「マスターあれを使うのですか?」

真九「ああ、本気で戦う」

そう言って真九は内ポケットに入れていた眼魂を取り出したそのアイコンのナン

バーは0のGEIST・・・

決意と騒霊降臨その1

真九は一誠達と別れた後に一度自宅に帰りレイナーレの部屋の前に来ていた!!

真九「レイナーレ一応伝えるだけ伝えておくわイツセーがドーナシックの所に向かったよまあこの後どうするかはお前次第だな・・・」

なにも返事が帰ってこないと言うか物音ひとつしないさつきまでいたのは確かだが
どんだん遠ざかってるレイナーレの気配・・・

真九「やつぱりか・・・」

真九が部屋のドアを開けるとそこには誰もおらず窓だけが開いていた

真九「これなら大丈夫だな・・・」

真九は通信魔法を使用して自分のフリード以外の眷属にこう言った

真九「今から教会に攻めこむぞ全員準備が整い次第向かってくれ!!」

レイナーレ side

真九の一言を聞いて私は窓から飛び出し急いで教会に向かった

レイナーレ（ドーナシックは今のイツセーときほど変わらないが頭がキレる急がない

と!!!!
(

その目にはもう迷いは無かった……

レイナーレ「もう大切な人を失うのは嫌!!」

レイナーレのその一言は暗闇に小さく響いた……

レイナーレ side out

イツセー side

俺たちは教会の前までやって来た

そして中に入ると丁寧にもお出迎えがあった

モブA「ここから先は一步も通さん!!」

モブB「貴様らはここで滅せられるのだハハハ!!」

モブC「死ねー！ー！！」

そう言つて三匹のモブが襲ってきたが

フリード「この先には行くし死ぬのはお前らだよ!!」

小猫「邪魔です……」

木場「君達を相手にしてる時間は無いんでね!!!」

見事に三匹のモブは殺られた

イツセー「一体何処に入り口が……」

小猫「ここです……」

そう言う和小猫ちゃんがあっさりと隠し通路を見つける

そして俺たちは先に進むと祭壇があったその祭壇の周辺には何十人ものぐれ悪魔祓いがあり祭壇の上には十字架に繋がれたアーシアとその横で余裕の表情を見せるドーナシークがいた

木場「結構な数敵がいるな……」

フリード「ここにいたやつら全員集めたんだろうぜ」

フリードはそう吐き捨てるように答えた

イツセー「ドーナシーク!!アーシアは返してもらおうぞ!!!」

ドーナシーク「できるものならやってみるが良い!!!殺れ!!!」

こうして俺達とドーナシーク・はぐれ悪魔祓いの戦闘の火蓋が切って落とされた!!

イツセーside out

その頃リアスは教会の裏で7人の墮天使と対峙していた

リアス「これは少し不利かもね」

墮天使A「諦めるんだな貴様ら二人に勝機はない!!」

朱乃「あらあらそれはどうでしょうかねー?」

リアス「そうね」

墮天使B「強がっても無駄だぞ!!!」

カラワーナ「その通りだな・・・」

ミツテルト「まあ予想外の事態が起こらなければの話っすけどね」

ミツテルト「例えば・・・」

カラワーナ・ミツテルト『私達二人が裏切るとか!!』

そう言うミツテルトは朱乃のカラワーナはリアスの隣に並んだ

墮天使A B C D E 「!!!」

墮天使E「カラワーナ!!ミツテルト貴様達何をしてるのかわかっているのか!?その行

為はアザゼル様に反旗を翻すと言うことだぞ!」

カラワーナ「私達はアザゼル様に反旗を翻したのではないアザゼル様とあの方の命令

によつてリアス・グレモリーと共闘している!!」

ミツテルト「ちなみにあたしは元々アザゼル様の命令で動いてたっすよ」

墮天使D「アザゼル様がそんなことを言うはずがない!!!よくもそんな嘘を吐けたな!!

お前達も殺してくれる!!!」

墮天使A「俺達はまだ数で勝っているこのまま空中戦に持ち込め「残念だがそれはさせん!!」え?」

墮天使の話の話を遮った一言の後に銃声が響き墮天使達の翼は撃ち抜かれ文字通り地に落ちた

墮天使達は突然の出来事に驚きを隠せない

いや墮天使だけじゃないリアス達も突然のことで驚いた

双方が驚いていると茂みの方から足音が聞こえてくる最初は闇に紛れて全く分からなかった近づくにつれてシルエツトが見えてくるそして茂みを抜けるとリアス達に一言あの言葉を放つ

スネーク「待たせたな!!」

今隻眼の蛇が新たなる伝説を刻み出す!!!

つづく

決意と騒霊降臨その2

今リアス・朱乃・カラワーナ・ミツテルトは信じられない事が目の前で起こっている
何故なら………

………段ボールを被った悪魔一人に墮天使5人がボコボコこされ
ているのである………

何故こうなったかと言うと戻ること数分前スネークが茂みから姿を表したすぐ後の
ことである

墮天使A「貴様!!!我々の翼をよくも!!」

墮天使B「殺してくれる!!!」

そう言つて墮天使5人は襲いかかったのだがしかし全て当たらなかつたそれどころか
全員地面に叩きつけられたのである

リアス（バイザーとジーヴァの時もそうだったけど本当に凄い腕前ね相当な戦闘を積
んできた事が良く分かるわ………）

墮天使D「クソ!!!」

墮天使C「なら囲んで一気に終わらせる!!!」

そう言いスネークを5人で囲んだが

スネーク「ほう・・・相手の動きを制限するか考えたな」

スネーク「だが俺にはまだ最高の秘密兵器が存在する!!」

そう言ったスネークは何処からともなくダンボールを取り出した

堕天使B「ハハハ!!秘密兵器と言うからどんな強力な物が出てくるから思えばダンボール!!」

堕天使A「そんなものに俺達が負けるとでも!」

堕天使達は笑っていたそれはそうだダンボールで倒されるなんて普通はあり得ないにからだりアス達も驚きを隠せていなかった

ミツテルト「アイツなにふざけてるっすか!」

カラワナー「あんなもので勝てるはずなどない!!」

もう一度言おうダンボールで倒されるなんて普通はあり得ない

だが目の前にいる男はそのダンボールで何人も敵を倒してきた男であるそう不可能に変える男なのである!!

スネーク「日本の諺にはたしかこんな言葉があったな」

スネーク「ダンボールを馬鹿にするものはダンボールに泣く」

ミツテルト「そんな諺聞いたことないっすよ!」

ミッテルトのツツコミなど気にせずスネークはダンボールを被ったまま敵に突撃する体当たり・スライディング倒れた敵を踏みつけるなど多彩な戦闘方法?で墮天使達を苦しめる

そして今に至る

ミッテルト「もしかしてダンボールは最強なんじゃ・・・」

カラワーナ「ミッテルトしつかりしろ!!あれが異常なだけだ!!普通はあり得ない!!」
そんな話をした直後に戦闘は終わった敵が全員気絶したのだダンボール攻撃によつて

リアス「……………」

スネーク「リアス・グレモリーこの後どうすれば良い?」

リアス「えっ?!ええそうね拘束して教会まで連れていきましようか」

こうして一つの戦闘が予想外の勝利方法で終わりを告げた

ちなみにこの後スネークに倒された墮天使達がスネークとの戦闘を話スネークに《ダンボール戦士(ソルジャー)》の二つ名がついた

場所は変わって教会一誠達は敵の数に苦戦していた

フリード「倒しても倒してもきりがねえ!!こいつらG か!!」

小猫「G並の攻撃力だったら良かったんですけどね」

木場「確かにこのままだとキツイね・・・」

イツセー「クソ!!助っ人でも来ねえ限り逆転なんて難しすぎるだろ!」

一誠がそう言った時である

奏「それならあたし達が来たから逆転可能だな!!」

イツセー「奏!!ああ、ナイスタイミングだぜ!!」

黒歌「お望み通りの助っ人にやん!!」

小猫「姉様と一緒になら・・・負けない!!!」

ユウキ「それじゃあ一気に終わらせるよ!!!」

ユウキ以外『おお!!!』

今逆転の狼煙が上がった!!!

つづく

決意と騷霊降臨その3

奏・ユウキ・黒歌の三人の助っ人によって戦況は一変した

モブ1「なんだ!? コイツら!! たった・・・たったの7人で圧倒するだど!?」

モブ2「ありえねえよ!! こっちは200人はいるんだぞ!! なんて押し負けてんだよ!!」

黒歌「そんなの踏んだ場数と覚悟の大きさの違いにや!!」

奏「イツセー!! 今からあたしが突破口を開くあの墮天使は任せたぞ!!」

イツセー「分かった!!」

そう言うと奏は自分の持つ槍の穂先を回転させ竜巻を発生させ周囲の空間を吹き飛ばす(LAST∞METEOR)を放ちドーナシークのいる祭壇の前までの道を開いた!!

木場「竜巻を発生させた!!」

小猫「デタラメです・・・」

ユウキ「ボクも少し本気を出そうかな!!」

そう言うとユウキは騎士以上の目にも見えぬスピードで敵を撃破していった

フリード「なんてスピードだ!! アイツに勝てる剣士はいるのか!」

木場「少なくとも僕じゃ彼女の足元にも及ばないだろうね・・・」

小猫「始まったみたいですよ・・・」

小猫がそう言うのと衝撃波がその場にいた全員に伝わってきた。

とうとうイツセーとドーナシークの戦いが始まったのである!!

イツセー side

俺がドーナシークの元に着くと同時に俺の拳とドーナシークの光の槍が激突した

イツセー「ドーナシークー!!!」

ドーナシーク「何をそんなに怒っているんだ?」

イツセー「ふざけんな!! お前はアジアだけじゃなく!! 仲間だったレイナーレをも殺

そうとしただろうが!! 何故だ!!」

ドーナシーク「何故だと? はっ!! あんな出来損ないの代わりなどいくらでもいるだろ

う?」

ドーナシークはそう言うのと光の槍をなん十本も作り出しに投げ飛ばしてきた

イツセー「グアアアア!!!」

ほとんどの槍を避けたが避けきれなかった3本がその身を貫きドーナシークが追撃

をその激痛は悪魔にとってはたまったものじゃない

ドーナシーク「やはりその程度のような……!!？」

イツセーside out

ドーナシークは目を疑ったそこに一誠が立っていたからだ

ドーナシーク「何故だ!? 何故立てている!? 貴様のような下級悪魔ごときたっていられるはずが!!」

イツセー「ああ、スゲー痛いよだがここで倒れるわけにわいかねーんだよ!!」

そう言った一誠は、ドーナシークを殴り飛ばした

イツセー「まだだ!!」

「Boost Boost Boost Boost Boost !!」

イツセー「これでだー!!!」

「Explosion!!」

一誠の渾身の一撃は、ドーナシークを教会の外までぶっ飛ばした

ドーナシーク「まだだ!! まだ俺は!!!」

しかしドーナシークは立ち上がるそして地下の祭壇部屋から残りの敵を倒した後

アーシアを抱いて出てきた一誠達に向かつて一言

ドーナシーク「俺は貴様らごときに負けてたまるかー!!!」

ドーナシークは、攻撃を仕掛けてくる

まるで一誠からの攻撃は回復したかのように

それどころかさつきよりも強力になっている

ドーナシーク「死ねー！ー！ー！下級悪魔がー！ー！」

その一言と共に、ドーナシークはポロポロの一誠にとどめを刺そうとした

しかし

真九「させるかー!!!」

何処からともなく真九が、バイクに乗って現れ更にはドーナシークをバイクでひき飛ばした

ドーナシーク「今度はあのときの!!」

ドーナシークはすぐさま立ち上がり真九を見て警戒した

真九「みんな遅れてすまんあとは俺が相手をする!!」

そう言うのと真九の腰にベルトが現れるそのベルトは、まるで1つ眼のお化けのような

見た目をしていた

そして右手には目玉のようなアイテムを持ちそのアイテムのボタンを1度押し込むんだ後にベルトに入れ閉じる

「アーイ!!」

「シツカリミナー!!シツカリミナー!!シツカリミナー!!シツカリミナー!!」

真九「変身!!」

真九はそう叫ぶとハンドルを引いて戻した

「開眼!!ガイスト!!」

「揺れるぞ!!覚悟!!グラグラゴースト!!」

その音声と共に真九はパーカー姿の異形に変身していた

真九「仮面ライダーガイスト見参!!」

つづく

決着!!そしてライダーとは!?

奏・ユウキ・黒歌・一誠以外の者は、驚きのあまり声がだせなかった

何せ真九が目の前で異形の姿に変わったからだ

体の全体の体色は灰色に赤のラインが所々にパーカーは黒をベース紫で顔は紫で目と思われる場所は黒で形は半月のような形

角が1本胸の中心に眼の形をしたマークがついていて片手にはトンファーのような武器を持っていた

小猫「仮面ライダー……」

小猫は真九が名乗った名前の一部を呟いた

ドーナシック「なんだ!?!なんだ!?!その姿は!?!そんな神器俺は見たことも聞いたことも無いぞ!?!」

真九「だろうねコイツは少し特殊な物だからな!」

そう言いながら真九は、右手に持っているトンファーでドーナシックを殴り飛ばした
ドーナシック「ガハツ!!くツ!!ならば!!」

殴り飛ばされたドーナシックは、すぐに翼を出して空中に移動し光の槍を構えた

真九「なるほどねー近接攻撃に特化した姿だと判断し空中に移動そして光の槍を展開して俺が飛ぶ瞬間を狙う感じか？」

真九「なかなか良い判断だ」

真九「だが……」

真九「無意味だ」

そう言うとき真九は、即座にトンファアの持ち手をスライドさせ銃に変化させ射った
ドーナシーク「なに!?グオオオオ!!」

ドーナシークは驚きと共に銃で翼を両翼とも撃ち抜かれ落とされた

真九「これで終わりだ……」

真九はそう言うとき銃を再びトンファアの姿に戻しベルトの眼のような部分にトンファアに描かれている眼のような模様を見つめ合わせるようにかざした

「大開眼!!ガンガンミナー!!ガンガンミナー!!」

トンファアからは、変身前に流れた音声と似た音声が流れた

そうすると真九は銃の形態の時のトリガーに指をかけ押し込むながらドーナシークに再びトンファアで殴りかかる

「オメガファースト!!」

その音声と共にドーナシークは殴り飛ばされ壁にめり込んだ

木場「たった一撃で・・・」

小猫「凄いです・・・」

フリード「規格外過ぎるだろ・・・」

三人は驚くことしかできなかった

そこにリアス達が現れた

リアス「これは!?!?・・・そして貴方は何者!?!」

真九「おー、リアス先輩来ましたか♪」

リアス「その声は!?!真九!?!」

スネーク「それはパワーワードスーツみたいなものか?」

真九「まあね詳しい説明は後ですよ」

「オヤスマミー」

真九が変身を解除する

真九「後のアイツの処理は任せるわ」

リアス「えっ!?!ええ!!分かったわ!!」

リアス「私達の管理してる町でここまでやった罪は重いわよ?死になさい」

ドーナシーク「俺の俺の計画は完璧だったはずなのに!!!」

そう言ってドーナシークは消し飛んだ

その直後

レイナーレ「イツセー!!」

レイナーレが飛んできた

イツセー「レイナーレどおしたんだよ!?!」

レイナーレ「どおしたじゃないわよ!!ドーナシークと戦うって真九から聞かされてす

ごく心配したのよ!!」

イツセー「ああ、レイナーレ心配かけてごめんな」

真九（二人の仲もこれで大丈夫そうだな）

それから数分が経過して

真九「それじゃあさっきの姿について説明するわ」

リアス「ええお願ひするわ」

真九「あの姿は仮面ライダーガイスト俺の持つてる神器とはまた違う力だ」

木場「神器とはまた別の力なのは分かったけどあのベルトと目玉のようなアイテムは

なんなのかな?」

真九「おー良い質問だねー♪まずあのベルトはゴーストドライバーと言つてガイスト
に変身するために必要なアイテムの1つだよ」

真九「そしてもう1つのこの目玉のようなアイテムこれはアイコンと言うアイテムだ

よ」

小猫「アイコン?」

真九「うん、基本片仮名読みだけど漢字で書くときと眼球の方の眼に魂で眼魂だよ」

朱乃「そのアイコンとはどのような能力を持っているのです?」

真九「アイコンってのは元々はこのブランクと呼ばれてる何も書かれていない真つ白な状態なんだ」

そう言つて真九は、懐からさっきのアイコンとは違い真つ白に近いアイコンを取り出して見せた

真九「この状態ではなんの効果もないただの飾り程度の代物だ」

フリード「つてことはそこからなにかしらの力を加えるか何かしなきゃいけないのか?」

真九「ああ、その通りだが、力を加えるんじゃない基本は魂を入れるんだ」

リアス「!?魂を入れる!」

真九「その通りまあ例外の1つとして擬似的な魂を入れてアイコンを使えるようにすることもできるさつき使つてたガイストアイコンも俺の魂を元にした擬似魂を入れてあるんだぜ」

木場「1つつてことはまだ他にも例外が存在するのかい?」

真九「ああ、その通りだもう一つの例外は心が宿った物だ」

小猫「心ですか？」

真九「ああ、人の何かを守りたいとかそういう心に、アイコンが共鳴してその人の魂の代わりに心が入るって感じだなこらの場合は、心と言ってもそれが伝わる感じだからアイコンに自分の心が入ってもその人には全く影響は無いね」

リアス「ちなみに魂って言うのはどんな人の魂が入ってたりするの？」

真九「俺は今のアイコン以外ないけど俺の元になった戦士は英雄の魂に力を借りていたねいくつか例をあげれば織田信長・エジソン・卑弥呼・三蔵法師とかがいたな」

朱乃「本当に歴史的に有名な人達ですわね」

真九「他に質問とかあるか？」

小猫「ドーナシークの前で答えた仮面ライダーと言うのは？」

真九「そう来ましたか・・・まあ仮面ライダーって言うのはこの世界や俺の元々いた世界とはまた違う世界で人々の自由と平和そして笑顔と未来を守るヒーロー達の名前だ最初に仮面ライダーが現れてからこの世界の時間で考えても40年間ぐらいは人々のために戦っている戦士達だね」

リアス「40年間!?!」

木場「戦士達ってことは仮面ライダーは一人じゃないってこと?」

真九「ああ新たな脅威が人々を襲おうとした時等にそれに対抗するために新たなライダーが年間2人は現れるよ?」

リアス「その話を聞くだけで毎年違う脅威が訪れてる感じに聞こえてるんだけども・・・」

真九「うんその通りやね1年に1回新たな敵とライダー現れてそれから役一年後ぐらには決着がついてまた新たな敵が現れて新たなライダーも現れて・・・つて感じやね」

フリード「なんと言うか凄まじい世界だな・・・」

真九「ちなみに仮面ライダーは始まりの仮面ライダー1号から仮面ライダーBLACK KRXまでの15人の仮面ライダーが昭和ライダーと言われていて共通点は15人全員改造人間つてとこやね」

リアス「本当に凄まじいわね」

真九「まだここでも優しい方だぞ?」

リアス「え?」

木場「まだ凄いのがあるのかい!?!」

小猫「もう何言われても驚きません」

フリード「右に同じく」

スネーク「俺もだ」

真九「それはどうかな？」

真九「RX より後の仮面ライダーは平成ライダーといわれているけど改造人間よりも常識はずれなやつらの集まりだぞ？」

真九「例えばある仮面ライダーは神を倒したしまたある仮面ライダーは時間巻き戻せる他にも他の平成ライダーに変身できる仮面ライダーやら最後には神様になった仮面ライダーもいるくらいだよ？」

小猫「前言撤回します・・・その人達本当に人間なんですか？」

真九「うん平成ライダーは全員改造人間じゃないよ」

フリード「普通の人間が時戻したり神倒したり挙げ句の果てには神になるって・・・」
スネーク「にわかには信じられんな・・・」

その場にいた者の多くが驚いていたちなみに墮天使3名は衝撃な話しすぎて声が出せないでいた

真九「まあこんな感じやね」

リアス「ええ、説明ありがとう最後にブランクアイコンを触らせてもらえないかしら？」

真九「良いよ一応3つ持ち歩いてるからそれぞれ触つてみると良いよ」

そう言つて真九は3つのアイコンをそれぞれリアス・木場・小猫に渡した3人はそれぞれそれを見た後に子猫はユウキに木場はスネークにリアスは奏に渡した

その時!!不思議なことが起こった!!

なんとユウキ・スネーク・奏がブランクアイコンを手にしたとたんに光輝きブランクアイコンが変化した!!

真九「!!!マジかよ!?!」

ユウキの持つているアイコンは紫色に

スネークの持つているアイコンは迷彩柄に

奏の持つているアイコンはオレンジ色になった

真九「新たな力は仲間達の力か!!!」

その後は何事もなく全員帰宅しカラワーナも真九の家にミッテルトはアザゼルに今回のことを報告に帰つてアーシアは、レイナレと一緒に一誠の家に帰ったのであった
こうして始まりの戦いは幕を下ろした

旧校舎のディアボロス 完

番外編 1

騷霊 VS 赤き強者 前編

ドーナシックとの事件が終息して数日あの日アーシアはリアスの眷族悪魔に転生カラワーナも真九の眷族として転生した駒は二人とも僧侶だ

真九「うーんやはりここはこうするべきか……」

そして真九は、今オカルト研究部の部室で一人何かの設計図を見ながらブツブツと呟いていた

リアス「あら？真九もう来ていたの？」

そうしていると部室にリアスが入って来た

真九「ええ少しやることがあったので……だがここの回路を左に繋げると変形の際に支障を来して最悪回路が壊れるんだよなー……」

真九は、設計図から目を話すことなくぶつきらばうな挨拶の後またブツブツと呟き始めた

リアス「さつきから気になってたのだけれど何を考えているの？」

真九「この前俺のブランクだったゴーストアイコンがそれぞれスネーク・ユウキ・カ

ナデの3つのゴーストアイコンに変わったのは覚えてますよね？」

リアス「ええ、よく覚えているわ」

真九「そのアイコンの能力を100%いやそれ以上引き出すためにはそのゴーストアイコンの人物達にまつわる武器や使用していた武器を使用することが必要不可欠なんです例えばロビン・フッドには弓形の武器宮本武蔵には二刀流の刀形の武器とか」

真九「そしてそれを可能にする拡張アイテムが俺の変身するガイストの原型になった仮面ライダーには存在したんです」

真九「地生にその拡張アイテムの名前は、ゴーストガジェット（以後GG）と云うんです」

リアス「その口調からして貴方には、それが無いの？」

真九「その通りですから今1から作っているんですそれこそ設計図から」

リアス「設計図から!?!どれくらいかかるのよ!?!」

真九「設計図さえできれば後は自動的にパーツを集めて組み立ててくれるのでその間で時間ばかりませんよ現に1つは完成してますし」

リアス「!?!もう1つは完成しているの!?!まだあれから一週間もたっていないのに!?!」

真九「ええ、．．．．．よし!!これで一応設計図完成!!」

真九「設計図書き終わったので俺の作ったGG 第一号をお見せしましょう!!」

真九「その名も!! (ライオンパラソル) です」

そう言うのと机の上にライオンのような機械が飛び乗ってきた

リアス「あら、可愛いライオンねそれが武器に変化するとは思えないのだけれど?」

真九「まあ今はアニマルモードと言う生物の見た目をした姿ですから」

そう言いながら真九は指をならす

するとライオンパラソルは真九の手の上にジャンプして乗りあつという間に傘の姿に変化した

リアス「!?一瞬で傘に変化した!? さっきの名前からしてそれは日傘かしら?」

真九「ええ普通の雨傘としても使えますがコイツは太陽の光を吸収そして凝縮して打ち出すことができるのでそれにちなんでパラソルにしました」

リアス「光を吸収・凝縮して打ち出すなんて可愛い見た目なのに悪魔には相当痛くて危険なライオンね・・・」

真九「よく言うじやありませんか可愛いものにはトゲがあるって」

リアス「それは綺麗な物なんじや・・・」

真九「まあどっちだって良いじやないですか? それより部長も早いですね何かまさか事件でもあつたんですか?」

リアス「そのまさかよ・・・」

リアスがそう言った後に残りの部員全員が部室に入って来た

真九「おーす」

イツセー「真九はやっ!!（それにしても部長のおっぱいはいつ見ても素晴らしい!!）」

小猫「イツセー先輩今やらしいこと考えてましたね?」

真九「そいつのそう言うところは今に始まったことじゃねーよそれにまだあれは良い方だよ」

小猫「前はあれより悪かったって……イツセー先輩サイテーです……」

イツセー「小猫ちゃん!」

真九「そう言えば部長さっきの話ですけどなにがあつたんですか?」

リアス「そうねみんなの集まったし調度良いわね」

リアス「最近ある古い神社の近くで悪魔でも墮天使でもましてや天使ですらない異形の怪物と謎の裂目そこ周辺に突如現れた謎の植物があるのよ」

それを聞いた瞬間真九が眉をひそめる

リアス「真九その顔は何か知っているの?」

真九「ああたつたーっだけと言うかそれしか思い付かないんだが思い当たるものがあるんだがまだその話だけじゃ確証できないから話を続けてくれ」

リアス「ええ、じゃあつづけるわね今回はその神社の周辺と境内の調査よ」

ユウキ「ハイハイ質問!!」

リアス「何かしら？」

ユウキ「悪魔なのに神社入って大丈夫なの？」

リアス「普通は大丈夫じゃないわよだけど今回行く神社はもう何年も前に最後の神主が亡くなってから廃墟になっているのよ」

イツセー「この前の教会と同じ感じですね？」

リアス「ええ、その通りよ」

スネーク「今回についての写真とかは無いのか？」

スネークがリアスに質問した（スネークは真九の家に部屋はあるがここ最近は何故か旧校舎が気に入り旧校舎に住み着いているためここにいる）

リアス「ええあるわよ」

そう言うリアスは3枚の写真を机に置いた

一枚目には、暗闇でよく見えないが灰色の生物が3匹ほどが写っていた

二枚目には、紫と赤色の見たことのない木の実がなった蔓のような植物

三枚目には、大木の中心に開いている空間の裂目とその奥の森何より目を引くのは、その空間の裂目には服などについてるジッパーのようなものがついていてまるで、誰かの手によって開けられたように見える

真九「!!! (間違いねえインベストにクラックそしてヘルヘイムの森と植物じゃねーか!!! どおして!?)」

リアス「真九これは見たことがあるのかしら?」

真九「ああ、見たことがあるだが今はそれどころじゃねえ!! 全員急いでその神社に行くぞ!! これが100%あの森とそこの植物と生物達なら一刻を争う自体だ!! それこそ手遅れになれば世界全体が大変なことになるぞ!!」

奏「おっおい真九!?! 一旦落ち着け!!」

真九「.....すまん」

リアス「落ち着いたところであれがなんなのか説明してくれるかしら」

真九「説明はするが移動しながらで良いか?」

リアス「ええ大丈夫よあそこは転移が使えないから徒歩だから」

真九「そうかならさっそく移動しながら話すでしょうヘルヘイムの森について.....」

???
side

俺は突如目を覚ました

???「俺が何かに引き寄せられなのか?」

俺は考えた自分がここで目を覚ました理由を

俺の姿はあの時と変化はなく20歳で赤と黒のコートを着ている

謎の男「まさか蛇が……」

俺のそう呟いたその時

???「半分正解半分不正解ってどこだな」

どこか陽気な感じの話し声が俺の後ろから聞こえた

謎の男「半分不正解?それはどう言うことだ?」

俺は振り向きながら蛇に訪ねる

蛇と呼ばれている者「そのままの意味だよ俺が確かに引き寄せただが俺はあるやつに頼まれただけだ」

蛇はそう返してきた

謎の男「ソイツは誰だ?」

俺は聞き返すすると

蛇と呼ばれている者「詳しくは話せんが昔からの腐れ縁って奴だな」

謎の男「……まあ良い……」

蛇と呼ばれている者「まあ一つ言えることは答えの片鱗はあの少年が持っているってことだな」

そう言いながら蛇は特殊なクラックを出現させ外の空間と思わせる世界を写した

謎の男「あの小僧が?・・・!!ツチ!!」

俺が特殊なクラックの中を覗いている隙に蛇は姿を消したしかし

謎の男「まあ良い残りはあの小僧に聞けば良い!!」

俺はクラックを出現させその場を去った

???
side out

リアス side

神社に付いた私たちは、今なお真九から話してもらった空間の裂目の真実と自分達が置かれている状況を理解してしまい、息を飲んでいた

真九の話をまとめるとこうだ

あの空間の裂目はクラックと呼ばれ多分自然発生したものらしい

そしてそのクラックの先にはヘルヘイムの森に繋がってはいるが私たちの世界のヘルヘイムとは全くの別物と言うこと

そしてそのヘルヘイムには、ありとあらゆる生物達を新たな進化の境地へ誘う木の実が存在が非常に危険で、そのまま食べてしまうとあの写真に写っていた灰色のの異形インベストと同じような生き物に進化してしまいそれどころか殆どの生物は、その口にし

た木の実に、精神まで侵食されて時価を失うことそして、ヘルヘイムはやがて最悪の自体になると地球を丸々多い尽くし多くの生き物がインベストになるか死ぬしかし稀にヘルヘイムの身体への侵食に耐えきり自我を持ったままインベスの境地に立つ者もいるらしくそう言った生物は（オーバードロード）と呼ばれていることインベスとの違いは、自我と知能が健在で更には、インベス以上の身体の進化そして、何よりオーバードロード（神を越える）と言う名の通り現在の超越者と言われる私の兄で魔王のサーゼクス・ルシファー様やソーナの姉で同じく魔王のセフォル・レヴィアタン様どころか最悪どの神話体系を敵に回しても勝ち残れるほどに強いらしい

リアス「本当に異常な進化ね……」

私はそれしか言えなかった

そして、神社の前に到着した頃には全員ただただそんな存在が目の前に現れることの無いように願うしかできなかった……だがその願いは叶うことは無かった

しかし、この時の私達はそんなことも知らずに廃墟となった神社の境内へと入った……

いいえ、そうなることはきつと本能的に分かっていたことだけ私達が目を背けていただけなのだ……

リアス side out

真九 side

俺は皆に説明をした後境内に入ったここで俺は全員に更なる忠告を呼び掛ける

真九「全員良く聞けヘルヘイムの果実は普通の果実とは決定的に違う点があるそれは

!!! ヤバー」

俺が説明の時に気づいたのはイツセー・ユウキ・朱乃の3人が既にヘルヘイムの木の
実を口にしようとしているしている場面だ

俺は咄嗟にベルトを出してそこからトンファーを取り出してイツセーとユウキの果
実を撃ち抜き朱乃先輩の方はライオンパラソルが対応してくれた

イツセー「あれ？俺は一体何を……？」

ユウキ「確か僕はあるの木の実を見たとき……」

朱乃「私もあの木の実を……」

3人「!!!」

3人とも自分達がやろうとしていたことに気付き驚いていたユウキにいたっては俺
に泣いてすがり付くほどだった

リアス「さっきのは一体!？」

真九「あれは俺が今説明しようとしたことに繋がるんだがあの木の実は人や他の生物の精神に直接的に食欲を誘うんだ」

その場にいた全員「!!!」

木場「なるほど例え危険だと分かっているても食欲がそれを凌駕する全く恐ろしい果実だね……」

木場は顔を青くしながら言った

真九「……まだやったことないけど……」

俺はスタンドジュエリー・マスターを使って1つの宝石を作る

真九「試すか……」

俺はそう呟いて1つのヘルヘイムの果実を木からもぎ取った

真九以外の全員「!!!」

するとヘルヘイムの木の実はブランク状態のゴーストアイコンに変化した

真九「よし!!成功だな♪」

リアス「真九その宝石は!?!」

真九「これは、俺のスタンドの一体ジュエリー・マスターが作り出した特殊な宝石の1つの効果は、ヘルヘイムの果実限定だが、木からもぎ取ったり木の実を手にした瞬間ヘルヘイムの果実を、ブランク状態のゴーストアイコンに変化させるってやつだ」

リアス「確かにそれならこの森の果実を口に入れることは無いわね……その宝石はいくつ作れるの？」

真九「今のところはここにいる全員分は作れるから今すぐ作りますね!!」

俺は再びジュエリー・マスターを呼び出して全員分の宝石を確保した

奏「これでひと安心だな!!」

真九「ああ、だがもう一つ気を付けとけインベスの攻撃で体に傷をつけられたらその傷口には、インベスの体に付着していたヘルヘイムの植物の種が体に侵入して傷口から植物が生えてくるぞそれこそ地獄の痛みと共にその後は今のところ死ぬしかないよ」

スネーク「危険極まりない場所だな……」

そんな話をしてしていると俺達は神社の御神木の前まで来ていた

リアス「あら？おかしいわねここの御神木は、神主が亡くなると同時に枯れてしまっただけ」

真九「これは!!いやまさか!!」

俺がそう言ったその時御神木にクラックが開きその中から一人の20歳ほどの男が出てきた

真九「まつまさか!!」

謎の男「おいそこの小僧俺と勝負しろ!!」

その男は、俺に勝負をするよう要求してきた

俺は、その男を知っているその強さを知っている

あの男は、人間でたった二人存在したオーバードの一人であり強さを追い求めその力で間違っていたとは言え強き者が弱き者を踏みにする世界を変えようとした仮面ライダー

どんな強者にも怯まず立ち向かった戦士

死してもなおその名はたった一度も錆びることがなき男爵

そのライダーの名は、ビートライダーバロン

オーバードとしての名は、ロードバロン

俺の目の前にいるのは強大すぎる相手だが戦いたい!!

俺の魂はそう言っている

真九「俺は小僧じゃねえ名前は真九だ!!そしてその勝負喜んで受けさせてもらうぜ!!

駆紋戒斗!!」

つづく

騒霊 V S 赤き強者 後編

真九はベルトを召喚しアイコンをセットした

「アーイ」

「シツカリミナー・シツカリミナー・シツカリミナー」

真九「変身!!」

「開眼!! ガイスト!」

「揺れるぞ! 覚悟! グラグラゴースト!」

真九は仮面ライダーガイストに変身した

戒斗「何故俺の名を知っているのかは後で聞くだが今はお前の強さを見せてみる!!」

そう言うのと戒斗は刃物のような物が付いた黒いベルトとバナナが描かれた錠前を取り出しベルトを腰に装着し錠前のロックをはずした

「バナナ!!」

錠前から音声の流れたそしてその錠前をベルト中央のくぼみにはめこみ鍵を掛けた

「ロックオン」

また錠前から音が流れその後ベルトからファンファーレのような音声がその場に響

き渡る

戒斗「変身!!」

「カモン!!」

戒斗はその一言と共にベルトに付いている刃物を錠前に向けてたおしたすると錠前がわれる

「バナナアームズ!!」

「ナイト・オブ・スピアー」

イツセー「バナナ!?バナナ!?バナナ!?」

小猫「バナナですね」

黒歌「バナナにや」

奏「バナナだな」

ユウキ「バナナだね」

スネーク「あれは食べるのか?」

戒斗と真九以外の全員が宙に浮いた鋼鉄のバナナを見上げ

イツセー・小猫・黒歌・奏・ユウキはお決まりとも言える反応を見せスネークは前代未聞の反応を見せた

戒斗「バナナではない!!バロンだ!!そして食えん!!」

戒斗の十八番が炸裂する

真九「仮面ライダーガイスト!!騒がせてもらうぜ!!」

真九はそう言うのとガンガントンフアーを取り出しソードモードに変形させる

こうして今騒霊と紅き強者の対決の火蓋が切手落とされた

リアス side

私の目の前で起こっている戦いは、凄まじいものだった

どちらかがほんの少しの隙を、見ればすかさずもう片方が攻撃を仕掛けそれを防ぐ
そんな攻防の連続だった

真九が強いことは、知っていたけどまさかこれほどとは思わなかったしかし、それ以上
に驚いたのはあの駆紋戒斗と言う男あんな重いくバランスが悪そうな鎧を身に付けて
いるのにそれをもろともせず真九と渡り合っているいいえ・・・真九を押し

しかし私は何となく分かってしまった二人ともまだ本気のほの字も出してないこ
とが・・・

私の頬を冷や汗が流れ落ちる

確信した目の前にいるのは私の眷族では全く戦いにならないそれどころか魔王でさ

え彼らと戦って勝つことができるのか怪しいそれほど別次元の強さを彼ら二人は持っている・・・

リアス（ねえ、貴方達は本当に何者なの？）

私は心の中で呟いた当然それに答えを返す者はいない

リアス side out

二人が戦闘を始めて数十分が経過したしかし戦闘は平行線の状態がつづくばかり

戒斗「貴様は何故強さを求めた？」

真九「世界の全てを見るためだ」

戒斗「世界の全てを？」

真九「ああ、世界にはそれぞれの思想・考え・目線その他にもありとあらゆる物があるそしてそれを全て見るためには世界の真の頂上へ立つしか方法は無いだから力を求める」

戒斗「それが貴様の強さなのか？」

真九「さあな・・・だがその目的のためなら目の前にどんなに壁が立ちほだからうとそれを全て越えるただそれだけだ」

戒斗「ならばこの俺も越えてみる!!真九!!!」

「レモンエナジー」

そう言うのと戒斗は赤いベルトを取り出し黒いベルトと交換したそしてレモンの描かれた錠前のロックをはずしくぼみにはめこみレバーを押し込む

「ソーダー」

レモンエナジーアームズ!!」

「ファイトパワー!!ファイトパワー!!ファイファイファイファイファイファイファイファイファイト!!」

黒のベルト時とはまた違う音声が響き渡り弓を持ったバロンが現れる

真九「ああ!!越えてやるよ!!」

そう言うのと真九はオレンジ色のアイコンを取りだしベルトにセットした

「アーイ」

「シツカリミナー・シツカリミナー・シツカリミナー」

「開眼!!カナデ!!」

「裂槍!!激槍!!超無双!!」

ベルトから新たなパーカーゴーストが現れ真九はそれを纏った

フードにはガングニールのシンフォギアと同じヘッドフォンがついておりカラーリングは白・オレンジ・黒の3色膝まである長い丈が特徴的そして顔には槍が描かれてい

る

真九「来い!!ライオンパラソル!!」

真九がそう言うのとライオンパラソルが真九の手元に来る

そしてガンガントンファー・ソードモードの先にライオンパラソルを変形させ取り付ける

真九「ガンガントンファー・ランスモード!!」

そう言うのと戒斗と向かい合い止まった

スネーク「次の一撃で勝敗が決まるぞ……」

スネークは眩く

戒斗と真九が向かい合いどれくらいの間が過ぎただろう木の葉に着いていた水の滴が落ちたことで二人は動き出す

「ロックオン!!」

「レモンエナジー!!」

戒斗はベルトのレモンエナジーを弓にはめこみ弓を引いて打ち出す

「大開眼!!カナデ!!オメガドライブ!!」

その音声と共に真九のガンガントンファーランスモードがエネルギーに包まれそれを放つ

二つの力はぶつかり合い大爆発が起き真九と戒斗はその爆発の衝撃でぶつ飛び木に叩きつけられ両者同時に変身が解除される戦いは引き分けに終わった

真九「まさか引き分けに終わるとわな・・・」

戒斗「だが貴様の強さはしつかり見せて貰った」

真九「そうか・・・」

真九「そういう俺と戦いに来ただけなのか？」

戒斗「いいや、俺が貴様の前に現れたのはお前と戦うこと以外にもう一つある」

真九「そのもう一つとは？」

戒斗「貴様を見極め俺が認める強さを持つ奴だった場合は貴様の眷族になってやろう

かと思っただんだ・・・」

真九「は？え？」

戒斗「どうした？」

真九「どうしたもこうしたもあんたは人の下に着くような人間じゃねーだろ？」

戒斗「確かにだが今は少し違うな俺は真に強いと認めた奴がこれからどんな世界を見るのか見てみたいと思っただけだ」

真九「そうか（彼女と同じ選択をしたのか・・・）」

真九「ならこれからもよろしく頼む」

そう言うのと真九は兵士の駒を4つ戒斗に渡した

戒斗「兵士あらゆる駒に変化できる駒か・・・確かに俺にはあつてるかもしれない」
その一言と共に駒に変化が起こる1つの駒は槍を携えた駒に1つの駒はハンマーを
携えた駒に1つの駒は弓を携えた駒に1つの駒は大剣を携えた駒に変異し戒斗の体内
に入つていった

真九「変異の駒・・・」

真九は呟いた

戒斗「さあ見せてもらうぞ貴様のこれからを」

つづく

怒血暴流と使い魔探し 前編

今真九達は、凄まじいものを目にしている

魔力を帯びた球が飛び交う正に戦場

しかし、残念ながら戦場ではなかった

場所は夜の体育館種目はトツジボールいや『怒血暴流』このバトルには正に『ゲームであつても、遊びではない』や『戦わなければ生き残れない』という言葉を体現したような状態である……

何故こうなったのかと言えば全ての始まりは遡ること数時間前の放課後のオカルト研究部でのことだった……

真九 side

戒斗が、眷属に加わってから3日ほどたった

あれからは、特に大きな事件は無く変わったことと言えばリアス先輩が、昨日ぐらいから心ここにあらずという感じなことぐらいだ

(ちなみに戒斗は、旧校舎の一室で暮らしている理由は、戒斗いわく人が少ない方が気楽

で良いからだそうだ)

真九「よっしゃ!!これでガジェットの設計図は、完成!!家に帰ったら早速読み込ませて開発させよう!!」

アーシア「真九さん二つ目のガジェットはどんな生き物の形をベースにしたんですか？」

真九「今回ののはバッタの形をベースに設計をしたよまあ後は見てのお楽しみやね♪」
アーシア「はい!!楽しみにしてます♪」

黒歌「それにしても真九は良くそんな設計図を書こうと思うにやねー大変じゃないのかにや?」

真九「まあ確かに大変だよだけど、自分の使うアイテムだ自分が一番信用できて更に自分の力を100%以上引き出せるアイテムの方が良いだろうだから自分で設計をして機械に組み立ててもらおうんだよ」

朱乃「あらあら、そこまで考えて設計をしてるのですね凄いですわ!!」

真九「そうか?そこまで凄いことだとは思わんのだが・・・」

スネーク「いや、そうとう凄い事だぞ?設計だけならともかく自分に合った装備を作るには、まず自分を知らなければならぬじゃないかなければ最高の物を作ることにはできないからな」

真九「へーそう言うものなのか……」

イツセー「まあ真九は、昔から手先も結構器用だったし設計図なんて結構簡単に描けるんだろえけどな」

真九「そこまで簡単じゃないけどね？」

俺たちがそんな話をしてしていると部室のドアが開き生徒会長が入ってきた

真九「生徒会長どうしてここに？まさか……イツセーがとうとう犯罪にてを染めたんですか!!!」

イツセー「何故!?何故そうなった!？」

反発するイツセーの肩に奏と小猫の手が置かれた

奏「大人しく捕まりなせしたら少しくらい罪が軽くなるかも知れないぞ？」

小猫「安心してください……週に一度おやつくらい持っていきますから」

イツセー「えー!?なんで!?なんで!？」

生徒会長「真九貴方なら気づいてるんじゃないですか？」

真九「そりや当然でことで話を戻してソーナ先輩今日はどうしたんですか？」

リアス「そうね今日はどうしたの？ソーナ」

ソーナ「今回は私の新しい眷属の紹介をかねて貴方と話をしに来たのよりアス」

その後俺たちは、兵士の駒四つで転生した同年の匙元次郎を紹介されたそして

真九・イツセー「どうしてこうなった」

リアス先輩とソーナ先輩のテニスバトルが行われていた

この原因は月に一度のチャンスしかない使い魔探しを今回どっちの眷属が行くかで、ソーナ先輩とリアス先輩がもめてテニス勝負に勃発したのだ

イツセー「真九・・・あれ明らかに魔力込めてるよな？」

真九「ああ、思いつきり込めてるな・・・」

イツセー「そして素晴らしいおっぱいだな!!」

真九「うん死ぬね♪」

イツセー「えー!?!」

現状悪魔やその関係者以外の一般生徒もテニス勝負を観覧しているが、そんなのお構い無くりアス先輩とソーナ先輩はテニスボールに思いつきり魔力を込めている

真九（まあ一般生徒は全員魔球だと思いつているようだから大丈夫だろうある意味魔球つてのは間違いないけどな・・・）

俺がそんなことを思っていると突如俺の顔面にボールが飛んできて命中そして数メートル吹っ飛ばされ壁に打ち付けられた・・・

真九「よし良く分かった・・・リアス・ソーナ貴様ら二人一度に相手をしてやる勿論テニスだ」

真九 side out

一誠 side

オーマイガー\ (^o^)/

俺、兵藤一誠が現状を言葉に表すならこの一言以外に思い付かない何故なら、リアス部長と生徒会長のテニス勝負で魔力に耐えきれなかったリアス部長のガツトがちぎれボールが見事に真九の顔面に命中更には数メートル先の金網まで吹っ飛ばされたのだ。しかしそれだけだったらまだ良かったよ……吹っ飛ばされた奴が真九つてのが問題なんだ

真九「よし良く分かった……リアス・ソーナ貴様ら二人一度に相手をしてやる勿論テニスだ」

オワタ\ (^o^)/

真九の怖さを知っている生徒は全員こう思っただろう

ユウキ・奏「リアス先輩・ソーナ先輩……南無三……」

小猫「イツセー先輩……ユウキ先輩と奏先輩が物騒なことを言っているんですが……」

木場「と言うかさつきから一部の生徒が顔を青くしたりしてるんだけど……」

イツセー「そういや二人は知らないのか」

小猫・木場「？」

イツセー「二人は、都市伝説の1つでプロ・アマ・部活・男女関係なくありとあらゆるスポーツをしている人たちが圧倒的力でねじ伏せる少年の都市伝説の聞いたことあるだろ？」

木場「確か絶対恐者と言われてる都市伝説だよね？」

小猫「あるときは、たった一人でバスケの名門校で実力者全員を一度に相手にして、一点も取られること無くそれどころかまともにゴールにすら近づかせず、更には全て3ポイントシュートで決めて圧勝したと言うのを聞いたことがあります」

イツセー「小猫ちゃんらしからぬ長文発言!？」

木場「だけど、イツセー君それと今回のこととはどう関係が……まさか!？」

イツセー「そのまさかだよその都市伝説の張本人こそが真九なんだから……」

朱乃「あらあら……大変なことになりましたわね……」

朱乃先輩も顔は笑っているが冷や汗が流れてきている

イツセー「部長と生徒会長は今から圧倒的力の差を目にすることになるな……」

俺はそう一言呟いた

一誠 side out

とうとう2体1のテニスバトルが始まった

真九「サーブは俺がもらいますね」

リアス「ええ」

真九はボールを空にあげるそれを捕らえるために地を蹴った次の瞬間

「バシッ!!」

リアス・ソーナ「え？」

既にボールは彼女達の横を抜けていた

真九「どうしたんですか？次いきみますよ？」

リアス（え？ナニよ!?さっきの一撃反応すら出来なかったわよ!?）

リアスは心の内で絶句していた

また真九はボールを空に高くあげる今回はさっきより更に高くそして真九が一言

真九「インパクト……シヨット……!!!」

「バキーン!!!」

ガットにボールが当たった瞬間某大乱闘のバットのホームランのごとき音が響

き……相手のコートにめり込んだ……

小猫「規格外にも程があります……」

小猫が呟く

しかし勝負はつづくいやもはやこれは勝負と言うよりは虐殺と言っても良いほどの一方的なものだった

この日その場にいた全員が心に誓い更に暗黙のルールと化したものは『なにがなんでも真九を怒らせるな』ではあった……

そして勝負がつかなかったのでドッジボールが行われることになったそして今現在の『怒血暴流』に至る

真九「なんと言うか凄まじい戦いだな……」

アーシア「ドッジボールって怖いスポーツなんですわね!!?」

イツセー「いやそもそもこれはドッジボールから逸脱しすぎてるから!!!」

そんな話をしてしていると匙の放った球が流れ球となり真九の顔面に命中した

真九「……貴様ら最後の言葉ぐらいは聞いてやるよ?」

そして悪夢再び……

数十分後

リアス「結局決まらなかったわね……」

ソーナ「ええ……」

真九「うん、そこはすまん……詫びとして俺の方で全員行けるように手配する

わ

そう言って真九は携帯を出して電話を掛けた

真九「もしもし？サトウージ？イヤー久しぶりやねー少し頼みがあるんやけど大丈夫？あつそう？実はかくかくシカジカなんよえ!!本当？おー!!ありがとう!!ンじゃねー」

真九は電話を切つてから一言

真九「リアス先輩とソーナ先輩俺の眷属と二人の眷属全員で行けるように手配しときましたよ」

ソーナ「流石は真九と言ったところかしらね？」

真九「まあねー（^ー^）v」

リアス「その様子だとソーナは真九が何者なのか知ってるの？」

ソーナ「その内分かりますよ♪」

真九「そうだなソーナ先輩の言う通りもうじき分かりますよりリアス先輩」
リアス「・・・まあいいわ今日は疲れたし深くは追求しないでおくわ」

真九「そうかなら明日の夜に行くからそれじゃあまたな」
そう言って真九はユウキ・奏・黒歌・カラワーナと共に帰って行った

つづく

怒血暴流と使い魔探し 中編

前日の激闘？が終わりオカルト研究部に集まったグレモリー・シトリー・真九の眷属達

真九「こう一挙に揃うとスゲーな♪」

イツセー「そうだなここのまで美女が集まると凄まじいな!!!」

木場「イツセー君は平常運転だね」

真九「こんなのが平常だなんて考えたくも無いけどな……」

レイナーレ「まあ、これ以外のイツセーを考えようとしても出てこないけどね♪」

真九・ユウキ・奏「確かに」

匙「それにしても奏さんやユウキさんまで悪魔だったなんてな」

ユウキ「まあ悪魔になったのは最近だしね♪」

真九「だが、俺・ユウキ・奏は悪魔になる前から魔王とかからお前達じゃ討伐が難しいはぐれ悪魔の討伐を受けてたからこの3眷属のなかじゃ一桁に入るぐらいには強いよ」

リアス「本当に凄い人達が集まったわね……」

真九「それじゃあそろそろ行きましようか」

ソーナ「そうですね」

そう言うのと真九は巨大な魔方陣を展開して移動した

移動した先は森

イツセー「ここがそうなんですか？部長」

リアス「ええ、ここが使い魔の森よ」

フリード「真九案内役がいるはずなんだよな？どこにも見当たらないんだが」

スネーク「それどころか足音一つしないな」

スネークがそう呟いた後

???「ゲットダゼエーイ!!!」

スネーク「なに!?（気配どころか足音まで聞こえなかったぞ!!コイツ何者だ!?）」

真九「おつ来たか久しぶりだな♪サトウージ」

サトウージ「真九にユウキと奏の嬢ちゃん久しぶりだな!!!」

ユウキ「久しぶり♪」

奏「今日はよろしく頼むぜサトウージの旦那!!」

サトウージ「おう!!任せとけ!!」

サトウージ「リアス嬢にソーナ嬢今回使い魔と契約しに来たのはその3人だな？」

リアス「ええ、そうよ」

ソーナ「ええ、その通りです」

サトウージ「真九の場合はお前含めた眷属全員だな？」

真九「ああ、そうだ」

イツセー「まあまあ盛り上っているとこ悪いんだけど真九この人は？」

サトウージ「俺はマダラタウンのサトウージダゼイ!!!」

アーシア「あつアーシア・アルジエントと申しますよろしくお願いします!!」

リアス「この人は使い魔マスターなのよ」

戒斗「ほう、使い魔マスターかおもしろい!!!」

サトウージ「おう!! 兄ちゃん見る限り相当な強者だね!!! そっちの眼帯つけてる兄ちゃ

んも相当な場数を踏んでると見た」

戒斗「ほう、一目見ただけでそこまで見抜くと言うこと貴様も相当な強者だろう？」

スネーク「まず間違い無いだろうな。観察力は戦場では強力にして必要不可欠な武器

だからな」

サトウージ「こりや参ったぜ俺の一言だけでそこまで見抜けるなんな!!!」

サトウージ「さあ、本題だ使い魔はどんな奴がご所望だ？ 格好いい奴？ 空を飛ぶ奴そ

れとも毒持ちか？」

戒斗「フツ!!俺は既に決まっている強い使い魔その一点だけだ!!!」

サトウージ「なるほど、ならそれは自分で見極めねえといけねえな。最近はずっと現れる時空の歪みを通って見たことどころか名前さえ分からねえ奴等が何匹もここに来てるからな!!!」

戒斗「言われなくとも最初からそのつもりだ」

サトウージ「じゃあそろそろ見に行くぜい!!」

サトウージと真九達が移動して最初に到着したのは湖

サトウージ「この湖にはウンディーネと言う湖の精霊がすんでるんだぜ!!」

スネーク「ウンディーネか、聞いたことがあるぞ確かこの世の者とは思えないほどの美しさを持つと言われていた筈だが」

イツセー・匙「ウオーー見るのが楽しみだぜ!!」

真九「お前らある意味同類かもな・・・」

真九「まあ確かにそこまで言われているのなら見るのは本当に楽しみだな!」

ユウキ「だねー♪」

サトウージ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

戒斗「現れるみたいだぞ?」

戒斗がそう言って見ている方向を見るとその場所が光輝いておりそこから後ろを向

いた状態でウンディーネが現れた……

この時後ろ姿だけだったら良かったら良かっただんなに良かっただろうと全員が思うことになろうとはサトウージ以外は誰も思いもしなかった

真九「おー振り向くぞ!!」

真九の一言が終わると振り向きその顔を見せた

イツセー「スネークさんあれは……」

スネーク「ああ、あれは本当にこの世の者とは思えない顔だなある意味」

戒斗「そもそもあれは、本当に女性なのか？」

フリード「漢と書いて男と読む方人だと言われないと納得できないな……」

サトウージ「残念ながら女性だぜえ……今のウンディーネの世の中は力こそパワーな世界なんだぜえ」

ユウキ「水の精霊なのに肉体派……」

奏「何故水魔法を使おうと思わなかったんだ……」

カラワーナ「ウンディーネの世界には奇跡も魔法も無かったんだろうきつと……そう……きつと……」

黒歌「事実は小説よりも奇なりとは良く行ったものにや……」

真九「不思議ではあっても全く面白くないがな……」

アーシア「でつでも清らかな目をしていきますならきつと清らかな女性な……は
ず……多分……」

レイナーレ「アーシア無理はしない方が良いわよ特にこれは……」

ウンディーネの顔は言つてしまえば何処かの世紀末でヒヤッハー達を相手に無双する北斗神拳の継承者のような顔なのだ……

サトウージ「次……行こうか……」

全員「そうだな（ですね）（ね）（ですわね）」

その後に行つた場所でアーシアがスプライトドラゴンと言う雷撃を放つドラゴンを
使い魔にしたが（名前はラッセー）それ以降進展が無かつた

フリード「なかなか良いのが見つからねーな」

イツセー「それになかなか出会わないしな」

サトウージ「おかしい……」

イツセー「サトウージさん？」

真九「やつぱりそうなのか？サトウージ……」

サトウージ「ああ、今の時期は言うなれば使い魔の活動が活発な季節なのに出会える
数がここまで極端に少ないのは異常だ……」

スネーク「しかもさつきから回りに気を配っていることから周辺を生き物が通つた形成

がほとんど無い……」

ソーナ「それはつまり……」

真九「ああ、こちら辺に相当な力を持った奴が存在するってことだそれも一匹だけじゃねーな……」

イツセー「それってヤバイんじゃない……」

真九「ああ、ヤバイだろうなだが同時にそれほど強い奴を使い魔に出来る可能性もあるってことだ」

真九「まあ、念のために皆はぐれないよう注意しとかないとな」

黒歌「真九……悪い知らせにや戒斗が既に行方不明にや……」

真九「オーマイガー……」

真九が嘆いたその時

「ドゴーーーーー!!!」

何かが発発するような音が聞こえ真九達がその音のした方角を見ると煙が上がって
いた

サトウジ「嫌な予感がするぜい……」

真九「とにかく行ってみよ!!!」

真九がそう言って走りだし全員がそれに続いて煙の上がる方角へ走って行った

煙が上がっていた場所までつくところでは巨大なロボと赤いドラゴンのような生物が戦っていた

サトウージ「あの赤いドラゴンはなんなんだぜ!? 明らかに五大龍王を越えた強さなのにあんな奴見たことも聞いたことも無いぜ!!」

真九「おいおいおいおいマジかよ!!! よりによってグラードンが時空の歪みを越えてきたのかよ!」

リアス「貴方はあのドラゴンを知っているの?」

真九「ああ、アイツはグラードンって言うこの世界とは全く別の世界に生きている生物ポケモンの一匹そのなかでもグラードンのはつきり言ってヤバイポケモンの一匹だな」

ソーナ「どう言うことですか?」

真九「グラードンってのは元々住んでいた世界では伝説のポケモンの一匹でその力は凄まじく海を干上がらせて大地を広げたポケモンだ……」

リアス「なによそれ!? 海を干上がらせる程の攻撃を持つって言うの!」

真九「いや、それも少しはあるんだろうが違うアイツは天候を操れるんだよ。いや、正確には天候を晴れに固定させれるんだ……」

真九「もつと詳しく言えばグラードンがいるだけでそこは異常なまでに晴れる」

リアス「いるだけで!？」

真九「ああ、アイツの天候を晴れに固定させれる力は技とかじゃ無く一種の体質だからな・・・」

小猫「体質で天候を固定させれるなんて規格外もいいところですよ・・・」

ソーナ「全くですね」

朱乃「それではあの緑と黒のロボットは？」

真九「あれは戒斗だよ」

イツセー「え!?あれも鎧なのか!？」

真九「そうだあれはスイカアームズだよ」

リアス「あれと対等に戦えるなんて・・・」

真九「おっと話している間に決着が見えてきたぞ」

真九がそういった頃には戒斗は槍のような武器をグラードンの数ミリ前で止めていた

そしてグラードンも敗けを認めたのか抵抗する様子はない

戒斗「貴様のその強さ見せて貰った貴様俺の使い魔になれ」

その言葉にグラードンも含め全員が驚いた

しかしグラードンはその後首を縦にふった

戒斗「そうかならよろしく頼むぞ」

その後無事契約は完了した

フリード「俺にはどんな使い魔が来るのか……」

フリードは一人て呟いた

しかしそれが聞こえた者は誰もいない

それと共にそんなフリードを遠くから見つめる存在が要ることも誰一人として気づかなかつた

黒に胸の部分が黄色の洋服に頭には2本の角何処かミステリアスな雰囲気を持った少女彼女はフリードを遠くから見つめながら呟いた

??「あの白髪の人面白そう……」

つづく

怒血暴流と使い魔探し 後編

戒斗の使い魔が決まって数十分が経過した

真九「よし!!!俺らの眷属は幾つかのグループに別れて探そうしないとらちがあかん!!!」

フリード「だが、どうやってグループ分けをするんだ?」

真九「それなら安心しな既に決まっている」

そう言つて真九が見せたグループ分けは

A チーム 真九・黒歌

B チーム 戒斗・フリード・スネーク

C チーム 奏・ユウキ・カラワーナ

ユウキ「分かったけど、なんでこんな感じなの?」

真九「パワーバランスを、考えてこんな感じになった」

リアス「確かに、この分け方なら良いバランスね」

奏「まあ、そう言うことならあたしはなにも言わないよ（真九と一緒になれなかったな……）」

黒歌「それじゃあ、メンバー全員が使い魔捕まえるか時間が来たらまたこの場所に、集合にや!!」

こうして真九達はそれぞれ使い魔探しに行った

真九 side

俺と黒歌はサトユージにおすすめしてもらった溪流エリアに来ている

真九「黒歌動きにくいんだが・・・」

黒歌「気にしない♪気にしない♪」

真九「いや、気にする云々じゃなくてだな・・・はあまあ良いやそれにしてもここは、本当に良い場所だな水も空気も綺麗だし自然は豊かだしここなら良い出会いがありそうだな♪」

俺がそう言っているとその出会いは向こうからやって来た

???? 「~~~~~!!!!」

突如咆哮がその場に響き渡る

真九・黒歌「!!!?」

俺と黒歌は驚きながらも、その咆哮を放った主がいると思われる方を向いた

するとそこには、真つ黒なボディーにコウモリとドラゴンを合わせたような顔とモモ

ンガのような足と足の間の空を飛ぶための膜先がまるで針のように鋭く長い尻尾
そしてそのスピードは迅速と呼ばれるに相応しい

真九「来たぜ・・・キタキタキタキタキタキター!!!」

黒歌「真九!?!」

真九「黒歌下がってな!!! アイツは俺が使い魔にする!!!」

そう言つて俺は右手を前に突き出すような構えとつた

真九「久々の出番だぜ!! オロチ!!」

オロチ「本当に久々の出番ですね」

真九「一気に勝負をつける!!! 『禁手』使うぞ!!!」

オロチ「分かりました!!! *balance break!!!*」

オロチの掛け声と共に俺は、全身を蒼い鎧が覆つたそしてその特徴は顔・胸・両手・両

肩そして背中の中の砲台2門がそれぞれ蛇の顔をしていた

真九「八頭神龍の真鎧（トユルアーマードオロチ）!!!」

ナルガクルガ「~~~~~!!!」

ナルガクルガが攻撃のために突進して来る

真九「ふっ!! この一撃で勝負を終わらせる!!!」

真九「アクアランチャー!!!」

俺はその叫びと共に背中の砲台からどこぞの超電磁砲さながらの水の砲撃を放つ
そしてその一撃はナルガクルガに真つ直ぐ飛んでいき見事命中ナルガクルガは吹き
飛ばされた

黒歌「初めて見たときも思ったけど、その砲撃本当に半端ない威力にや・・・」

真九「そりゃ禁手になってんだからね♪」

俺はそう言いながら吹き飛ばしたナルガクルガの方に向かった

真九「お前俺の使い魔にならねえか？」

ナルガクルガ「・・・私にどんな利点があると言うのだ？」

突如ナルガクルガが話し出した

真九「!?お前話せたのかよ? まあそれよりお前が得られる利点ねえ・・・お前は何かあると思う?」

ナルガクルガ「私に聞くな!! そもそも私が知るわけないだろ!」

真九「だって利点なんて思い付くとしたらいろんな場所見れるとかぐらいだもん・・・」

ナルガクルガ「・・・フフフフ」

真九「？」

ナルガクルガ「アハハハハハ」

真九「!?面白いところあったか？」

ナルガクルガ「イヤー、ごめんごめんまさかそんなに一生懸命考えると、思っ
てなく」

真九「まさかからかってたの!？」

ナルガクルガ「そんなに怒るなそれと使い魔になって良いぞ私はお前が気に入っただ
からお前と一緒に居させてもらう良いだろ？」

真九「ああ!! 勿論!!」

その後俺とナルガクルガはすぐに契約した

真九「そう言えばナルガクルガって名前あるの? 一々ナルガクルガじゃ長いしさ」

ナルガクルガ「ならば『ルナ』と呼んでくれ」

真九「そうか、ならこれからよろしくなルナ♪」

ルナ「こちらこそよろしく頼むぞ真九」

黒歌「これで真九は使い魔決定にやね♪」

真九「だが、黒歌の使い魔はまだだな・・・」

黒歌「そうなのになんかいいかな・・・サポートがしつかりしてる感じの使い
魔・・・」

黒歌がそう呟いていると突如茂みから紫と赤の2匹の猫のような生物が黒歌・俺・ル
ナの前に現れた

猫？紫「サポートの出来る使い魔なら!!」

猫？赤「僕たちがびったりにや!!」

黒歌「なにや!?!この2頭身の猫は!!?」

真九「コイツらはアイルーだなルナと同じ世界からやって来たんだろう」

黒歌「この子達はサポートが出来るのかにや?」

真九「基本サポートの他にも、前線での戦闘も出来る優秀な生き物だよ賢いし回復・攻撃・その他にも色々出来るから結構頼もしいんじゃないかな?」

アイルー紫「その通りにや!!ちなみに僕の名前はアメトにや!!」

アイルー赤「僕の名前はルーにや!!よろしくにや♪」

黒歌「私は黒歌よろしくにや♪それと2匹とも私の使い魔になってくれるかにや?」

アメト・ルー「喜んで!!」

こうして黒歌の使い魔も決まった

真九「それじゃあ、戻るかルナ2人と2匹乗せて飛べるか?」

ルナ「そんなの余裕よ♪」

真九「それじゃあ頼むぞ!!」

こうして俺達は集合場所へ向かった

真九 side out

真九「どうやら俺らが最初らしいな」

黒歌「そうみたいにやね」

真九と黒歌が話していると

イツセー「おー真九そいつがお前の使い魔か？ かつこいいな!!」

小猫「姉様の使い魔は猫？」

アメト「はじめましてにや僕はアイルーのアメトにやよろしくにや!!」

ルー「同じくアイルーのルーにや!! よろしくにや!!」

小猫「喋った!？」

ルナ「ほう、これが真九の仲間達か？ なかなか面白そうだな」

木場「その子も喋るんだね」

ユウキ「オーイ!! 皆ー!!!」

突然ユウキの声が聞こえ真九たちのいる場所が急に影になる

真九達が見上げるとそこには巨大な生物に乗ったユウキがいた

そしてユウキが乗っているその生物が降りてくる

その体は薄い青と白の毛皮で覆われており顔は狼に近く翼が生えていてその姿は美

しいの一言である

真九「ユウキが使い魔にしたのは王獣か本物は初めて見るがまさに王と言う名が相応しい美しさだな」

ユウキ「やったね!!! 鈴君!! 誉められたよ!!!」

鈴「~~~~♪」

鈴が嬉しそうに鳴いた

サトユージ「真九その王獣ってのはどんな生物がなんだぜえ?」

真九「王獣ってのはこの世界とは別の世界で生きる生物だよ俺もそこまで詳しいことは分からないだがこれだけは分かるよ普通王獣は人に懐つくことは無いと言われているんだ」

ユウキ「そうなの? 確かに僕が見つけたとき凄く威嚇してたけどすぐに仲良くなれたよ?」

真九「もしかしたらユウキはいろんな奴とすぐに仲良くなれるのかもな」

奏「確かにそれありそうだな」

カラワーナ「現に私達の使い魔とも直ぐに仲良くなつたからな」

真九「おー!! 奏とカラワーナ二人ともスゲーのが使い魔になつたな!!」

???? 「この度奏の使い魔になったベルゼブモンだよろしく」

真九「よろしくな!!」

黒歌「カラワーナのその使い魔はハーピーかにや?」

真九「いやそいつは、ハーピーじゃねえよ黒歌そいつの名前はイエンツィーアラガミって呼ばれるオラクル細胞って言う単細胞の集合体だ」

グレモリー「これが単細胞の集合体なんてなんと言うか信じられないわね」

真九「まあそうだろなちなみにイエンツィーはチョウワンって言うアラガミを周囲のオラクル細胞を集合させて作ることが出来るよ」

カラワーナ「確かに突然3体もあんなタフな奴等が、出てくるとは思わなかった」

真九「てかよく使い魔きできたな」

カラワーナ「ああ、確かにそうとう強かったが光の矢でなんとか追い詰めることができたよ」

イエンツィーがどこか得意気にチョウワンをだした

真九「なるほどイエンツィーはこの世界に来てから新たな進化をしてるな!」

黒歌「なんで分かるのかにや!!?」

真九「イエンツィーは回りのオラクル細胞を集めてチョウワンを作るがここにはオラクル細胞がチョウワン以外存在しない」

奏「それならチョウワンを十分に作り出せない!!」

真九「そうそうだから多分森の植物とか食った影響で進化して魔力を扱えるようになったんだろ現にさっきだしたチヨウワンから魔力を感じるし」

ユウキ「でもそんなに直ぐ進化するのかな生物って？」

真九「普通はしないよだけどアラガミの進化のスピードは異常なんだ食べたものの特性をそのままコピーしたような進化をするからね」

奏「それって例えばミサイルを食べれば体にミサイルが着くってことか？」

真九「その通りと言うか奏が例えで言ったようなアラガミ存在するよ？」

リアス「考えたくも無いわね・・・」

サトユージ「そういうやベルゼブモンってのはどんな生物なんだ？」

真九「そうだなベルゼブモンはデジモンって言うコンピューターの中にある世界デジタルワールドに生きる電子生命体なんだ」

リアス「それだけ聞くと、コンピューターの中から出られないと思うのだけど？」

真九「それがな、デジタルワールドと人間の世界は、結構近くに存在する異世界なものだからデジタルワールドと人間の世界が、一時的に繋がってそこからデジモンが来たり人間が、デジタルワールドに迷い混んだりするんだ」

リアス「そして今回は、なんの偶然か一時的に別世界にあるデジタルワールドとこの使い魔の森が、一時的に時空の歪みによって繋がって迷い混んだってことかしら？」

真九「その通りです先輩」

アーシア「それにしてもフリードさんたち遅いですね」

真九「確かに、ちと遅いな戒斗とスネークがいるしフリードも結構強いからまず何かに襲われて倒されたってことはないだろうけど・・・」

スネーク「待たせたな!!」

真九「おう!!待ってたぜ!!」

???「私はフリードの使い魔になったなゼットンだよろしく」

少女はそう言った

真九「・・・・・・・・・・・・・・・・what?」

真九「は?え?は?ちよつと待てその見た目からして君はあのゼットンだよね?」

ゼットン「うん気がついたらこの姿に変身出来るようになってたがその通り私は宇宙

恐竜ゼットンだよ」

真九「フリードお前スゲー奴使い魔にしたな・・・」

戒斗「ゼットンってのはそんなに強い奴なのか?」

真九「まあな別の世界でヒーロー達は苦しめた怪獣だ初めてゼットンが現れた時なんてその世界のヒーロー倒したからな?」

戒斗「確かに強いな」

ゼットン「エッヘン♪」

奏「ヒーロー倒した怪物ってどんだけ強いんだよ!？」

真九「まず殆どの攻撃から身を守る防御技ゼットンシエルターでしょそして1兆度の
火球この2つが主な戦力やな」

リアス「あんまり敵にならなくて良かったと心の底から思ったわ」

真九「スネークの使い魔はその狼か？」

スネーク「ああ、良い目をしていたからなコイツはきつと将来凄い奴になるぞ!!」

真九「先に言っておく既にバトルウルフって時点で凄いことになってるから!!」

ユウキ「バトルウルフ？」

真九「ああ、やはり別世界で絶滅したとも言われていた狼だ」

奏「それだけじゃ無いんだろ？」

真九「ああ、そのスピードは木場よりは普通に早いと思うよしかも今こそ普通の大き
さだが、成長するとグラードン以上になると考えた方が良いよ？」

リアス「あれでもそうとう大きいのにあれ以上に大きくなつて更にスピードは騎士以
上って……」

小猫「先輩達の使い魔規格外すぎです……」

真九「確かにそうだなだが、気にするな!!」

イツセー「いやいや無理だから!!」

朱乃「あらあら、そろそろ時間ですよ?」

リアス「それじゃあ帰りましょうか」

こうして真九達は帰って行ったちなみに余談だがイツセーと匙は、使い魔と契約できなかつた

つづく

戦闘校舎のフェニックス

復活!!最高のコンビ

駒王町のとある空き地・・・日は沈み月明かりが淡く照らすのみそんな空き地に二人の人物が倒れていた。一人は金髪に青いローブを来た小学生と思われる少年

一人は黒髪で制服を着ている高校生と思われる青年

二人は持ち物を持っていかなかったただ一つ赤き本を除いて……………

少年「うーん……………」

少年は目を覚ます

少年「ここは、いつたいどこなのだ？確か私は魔界で最近起こった魔界の王を決める魔物の子の戦いに参加した魔物達が行方不明になっている事件を聞いてゼオンとウマゴンの3人で調べていて……………!!」

少年は思い出す自分の兄と友人の3人で事件を追っていた時に突如謎の裂け目に吸い込まれたことを

少年「ゼオンとウマゴンは!!??」

少年は咄嗟に自分の周辺を見渡ししかし兄と友の姿は無かった……………だがその代わ

り最高のパートナーがそこに倒れていた

少年「清磨!!しつかりするのだ!!」

少年最高の清磨の存在に気づき咄嗟に名前を呼び体を揺すった

清磨「ここは……何処だ?」

少年「清磨!!起きたか!!良かった!!」

清磨「ガツシユ!?なんでお前がここに!?!」

ガツシユ「分からねぬあることの調査をしておつたら謎の裂け目に吸い込まれてしまい

気がついたらここにおつたのだ……」

清磨はガツシユの話を聞いて1つの答えを導きだしガツシユに聞き出した

清磨「ガツシユお前の追っていた事件つてのは、もしかして100人の魔物の子の戦いに参加した魔物達が、行方不明になってる事件じゃ無いのか?」

ガツシユ「その通りだ!!何故清磨はわかったのだ?まさか!?!」

清磨「そのまさかだ俺達の方でも、100人の魔物の子の戦いで魔物と、パートナーを組んでいた人達が行方不明になっているんだ」

ガツシユ「なら今の私達の状況から私達はその事件に巻き込まれてここに来たと言うことで良いのだな?」

清磨「ああ、しかもこれを行っている奴は俺達のことを知り尽くしているかもしれない

ん・・・・・・・・」

ガツシユ「!?それは本当か!?清磨!!」

清磨「確証は無いが、別々の場所にいた俺達が二人で同じ場所に飛ばされて、更にこの赤い魔本まであるとくればほぼ間違いないだろう・・・・」

清磨の言葉が終わるとガツシユは1つの疑問が生まれる

ガツシユ「だが清磨何故今回の事件の犯人はこんな事をしたのだ?」

清磨「どういう事だ?」

ガツシユ「考えてもみるの难道し私や清磨等の100人の魔物の子どもと、そのパートナーだった者を殺すことが狙いなら一々同じ場所に、二人連れて来てましてや魔本まで渡すなどリスクが上がる一方と思わぬか?」

清磨「!!」

ガツシユ「もし、私達100人の魔物の子をもう一度戦わせたいのならある程度同じ場所に集めておいた方が良い・・・・」

清磨「確かに・・・・それにこの魔本を俺の手元に置く余裕があるのなら気絶していた俺達二人を殺すことなんて簡単なはずだ!!」

ガツシユ「相手の目的が分からぬ・・・・」

清磨「全くだ・・・・」

??? 「それは私が、説明させていただきます!!」

二人が不可解さに頭を抱えていると後ろから突如声が聞こえてきた

ガツシユ・清磨「!!?」

ガツシユと清磨は突然のことに急いで距離を取り魔本を開いて直ぐに戦闘に入れるようにした

??? 「待つて!! 待つて!! ストップ!! 危害は加えないし敵じゃ無いから!!」

男は二人の行動に驚き咄嗟に敵意が無いことを示した

清磨「一応信じてやろう」

清磨は少しだけ警戒を解いた

??? 「ありがとう。そして先ずは、すまない!!!」

ガツシユ・清磨「!？」

二人は驚いた突然現れた男は二人に頭を下げたからだ

ガツシユ「おぬしますは顔をあげるのだ!! いきなり謝られても私達は何が何だか分からぬぞ」

??? 「そうだったね。ならまず自己紹介させて貰うよ僕は、ありとあらゆる世界を司る神名前は、『ルード』だよろしく♪」

清磨「まさか生きている間に神と対面するなんて思っても見なかったな・・・」

ルード「まあ確かに神は普通人の前に滅多に姿を表さないからね。それじゃあ本題だよ君達も薄々気づいてるとは思ってるけど僕が君達を、この世界に飛ばしたんだ。理由は世界を滅ぼす脅威に対抗するため」

ガツシュ「どういうことなのだ？」

ルード「実はありとあらゆる異世界の闇が1つの場所に集結しようとしているんだ

!!」

ガツシュ・清磨「!!!」

!!!?」

つづく

合流と遭遇

清麿「異世界の闇が、1つの場所へ集結しようとしている？言っていることは何となく分かるが、もう少し詳しく話してくれないか？」

ルード「そうだねなら何処から話したら良いか・・・先ずは光と闇の関係についてから話す必要があるね。」

ガツシュ「光と闇の関係？」

ルード「うん、今の多くの者たちの考えとしては光と闇って言うのは『相反する存在』『交わることの無い物』『打ち消し会う運命』こんな感じの考えが多いんじゃないかな？」

清麿「確かにそうだな」

ガツシュ「ルードお主の良い方だとまるで光と闇の関係は元々そうではなかったように私には聞こえるのだが？」

ルード「その通り？元々光と闇は相反するどころか最高に相性が良かったんだ」

ガツシュ「清麿」!!!」

清麿「なら、何故今は打ち消し打ち消される関係になってしまったんだ？」

ルード「それも今から話すよ。あれは何億年も昔の話だその頃光は、人に希望や夢を

与え前に進む強さを、闇は、あらゆる絶望や困難の壁を乗り越える力を与え、人の心を強くする存在だった。そしてその二つの力が合わさり真の優しさが生まれていったんだ」

ルード「だけどある時闇とは別に、生物に偏った闇を撒き散らす存在と同じく偏った光を撒き散らす存在が現れたんだ」

清磨「偏った光と闇？」

ガツシュ「それはどういう物なのだ？」

ルード「そうだね偏った光って言うのは簡単な例を上げれば『絶対正義』これが一番分かりやすいんじゃないかな？」

ルード「偏った闇って言うのは・・・元々の闇は、闇を乗り越えることでその闇が優しさを厳しさ体の強さなど人によってそれぞれ違った形で強さに表れる力なんだけど、偏った闇の場合は、それを手に入れたらそのまま力に変化するんだ。しかし全て武力という同じ方向にしか強さは変化しない。更には、まだ心が弱い生物だとそれに溺れてしまふということも起こってしまうんだ。分かりやすく言えば元々の闇は『試合などで自分達が負けたチームにたいしてのリベンジ意欲』偏った闇は『怨んでいる相手への復讐心』こんな感じかな」

清磨「なるほど」

ルード「話を戻すね。その偏った光と闇が現れてから世界は、変化したんだそれまで

手を取り合つて生きてきた生物たちが争いを始めたんだ」

ルード「特に人間や獣人などの知能が非常に高い生物は同時に普通の動物と比べ物にならないほど心が、豊かな生き物だったんだけどそれと同時に脆くもあつたんだよ」

清磨「よく練つた策は1つ抜けるだけで成功しないこともあるが、ある程度雑に練つた策は1つが抜けても支障がなかったり何かで代用できたりするのと同じ感じ

か？」

ルード「その通りだよ」

ガツシユ「と言うことは多くの人間が戦争をしたりするのは……」

ルード「ガツシユ君が思っている通り偏つた光と闇の影響を人が、色濃く受けてしまった言わば後遺症のような物だよ……」

ルード「そして、その偏つた光と闇はある時突如1つに合わさり邪悪でしかない混沌が生まれてしまったんだ……」

清磨「邪悪でしかない混沌と言うのは？」

ルード「元々の混沌は言わば面白い混沌も入っていたんだよ例えば『動画でのメタな発言』やら『パラパラの音楽流しながら阿波おどり踊つたり』笑つてすませれる物も多く含まれていたんだしかし邪悪でしかない混沌は『世界の崩壊』のような笑えないどころか人の精神を壊すような混沌のオンパレードだったんだよ」

ガツシユ「その邪悪な混沌はどうなってしまったのだ!？」

ルード「私も含めた多くの神々や天使・悪魔更には強き光の心を持った人々が力を集結させ、何とか封印しました。ですが全てを封印しきるまでには至らず邪悪な混沌の欠片があらゆる場所に飛んでいってしまいました。それも空間や時間を越えて」

ルード「しかし欠片だったので空間や時間を越えても力が弱りすぎていた事が原因で全くといえるほど世界に干渉することはできませんでした。」

清磨「だが、年月を重ねるごとに少しづつだが干渉できるようになったんじゃないのか?」

ルード「その通りだよ清磨君!欠片は生物の生命エネルギーを吸収し蓄えてどんどん力を着けてきたそして、ある時欠片だった存在たちは、突如共鳴し欠片の全てが力の多くを一度に開放することで一時的に全ての世界を繋げたんだ……」

清磨「なんだと!?!そのあとどうなったんだ!?!」

ルード「欠片たちは一度合体して一時的に1つとなった全異世界にある理を書き加えたんだ。」

ガツシユ「ある理と言うのは?」

ルード「『闇と光は相対する存在』という理だよ」

清磨「!?!それが今の世界での光と闇の関係の理由なのか!?!」

ルード「その通りだよ。我々は、何度もその理を書き換えようとしたのだが相当強力な力が加わっているのか殆んど書き換えることができていないのが現状だ。」

ガツシユ「昔はもつと酷かったのか？」

ルード「ああ、その通りだよ魔女狩りなんていい例だよ」

ルード「まあ今は多くの神々の力や異世界に現れたいろいろな戦士たちの活躍等のお陰で相当書き加えられた理も力を弱めているけどね」

真九「なるほど・・・俺を転生させたのもそれが大きく関係してるのか？」

ガツシユ・清磨「!!!」

ルード「二人ともそんなに警戒しなくても大丈夫だよ彼は協力者だし君達が、お世話になる家の住人でもあるよ」

真九「桜魏真九だ清磨・ガツシユあなた達二人のことは、俺が元々いた世界で、拝見したことがあるよ。よろしく」

清磨「よろしく。それと俺達を知っていると云うのは？」

真九「俺の元いた世界は、簡単に言えばありとあらゆる異世界での出来事を小説や漫画などの形で記録させる世界なんですよ。まあそれに気づいている人なんて、殆んど居ませんけど。」

ルード「話を再開させてもらおうよ。君のことだから殆んど最初から話を聞いていたん

だろ？真九」

真九「YES」

ルード「それじゃあ話が早い今あらゆる異世界の闇が1つの場所へ集まろうとしてい
ると言つたよね？」

清磨「ああ、だがその場所とは何処なんだ？」

ルード「そこは一度邪悪な混沌の欠片が共鳴して起こつた一時的世界が繋がった時に
私達神々は、ある妖怪と共に全ての世界の架け橋となる場所を作つたんだ」

清磨「架け橋となる場所？」

ルード「ああ、全ての世界に繋がった場所にして最後の希望の地だよ」

真九「その場所の名は？（まあ大体予想はできているが・・・）」

ルード「その地の名は・・・」

ルード「幻想郷」

う
う
く

幻想郷とは?この世界とは?

真九「幻想郷ねえ……」

真九は、神ルードの話を聞き終わり清麿と、ガツシユを家に案内している途中ルードから聞いた話に出てきた、楽園の名前をふと呟いた。

清麿「真九は、幻想郷について何か知っているのか?」

真九「ああ、人・妖怪・神その他にも、人々から忘れられた者達の最後の楽園と言われているってことと博霊大結界と言われる結界で覆われていて、普通は入るどころか、見つけることも難しいってことあとは、博霊の巫女って言う存在が、幻想郷のバランスやらを守っているってことが俺の知ってる情報だな。」

ガツシユ「流星に幻想郷の位置などは、わからぬのか?」

真九「残念ながら結界の力か、全くそれらしい力を見つけないんだ。」

清麿「そうか。なら他の質問なんだがこの世界は、どんな世界なんだ?」

真九「どんな世界という?」

清麿「この世界には、人間以外の高い知能を持った生物又は、何か特殊な力があるんじゃないのかと言うことだ。」

真九「何故そう思ったんだ？」

清磨「理由は、俺とガツシユがこの世界に招かれたと言うのが、一つの理由だ。」
ガツシユ「清磨それは、どう言うことなのだ!？」

清磨「考えてもみる、俺とガツシユは、次の王を決める1000人の魔物の子の戦いで、最後の残り勝者となった魔物とそのパートナーだ。あのルードって神は、それを知った上でこの世界に、俺達を招いたんだぞ？それでなくてもザケルやその他の呪文は、普通の世界では、超常現象の類いだ。なのにルードは俺達をここに招いたってことは、この世界にも俺達の力とは又違う能力があるってことじゃ無いか？」

ガツシユ「なるほど!!」

真九「だが、それじゃあまだ不十分じゃないか？この世界に敵とまともに対抗できる手段が無いから、あえてこの世界に、二人を招いたって言う事も有り得るだろ？」

清磨「確かにそうだな。だが、さっきの話を聞いていたら分かったんだが、敵にも意志や思考があるんじゃないのか？そうじゃないと、同じ場所に集まったり、世界の理をピンポイントで書き替えたりは、できないだろ？」

真九「まあな。」

清磨「なら、もし俺が敵だったら、先ずは脅威となりやすい世界を先に排除する。」

真九「まあ、確かに俺もそうするな。」

清麿「と言うことは、おのずとこの世界にはその敵にとつて脅威になる何かがあるって事だ。」

真九「おー!!当たり前だよ。」

ガツシユ「と言うことはこの世界には、特殊な力を持った存在がおるのか!？」

真九「その通りだ。今から順に説明するよ。」

真九はこの世界には人間以外に天使・墮天使・悪魔・神などの高い知能を持った存在がいることや、戦争の事、神器と呼ばれる力の存在などを説明した。

清麿「まこの世界の裏では、そんな超常な日常があるのか・・・」

真九「ちなみに、俺の家は、先祖代々こんな世界の人間・悪魔・天使・墮天使・神全てを裏で支配している家系で、俺が現在の当主だったりする。」

ガツシユ「清麿!!今真九がさらっと凄い大切なことを言つたぞ!!」

清麿「ああ、まさかそんな大切なことをあつさり言うなんて・・・」

真九「二人が、信用に足る人物だからって言うのと、これから行動を共にするんだからなるべく情報は必要だろ?」

清麿「確かにそうだが・・・」

真九「家に到着したぜ!!すまないが今日は家に泊まってくれ。明日二人のすむ場所を提供するから。」

清麿「そうか、何から何まですまないな。」

真九「気にするな。それじゃあ改めてよろしくな!!」

ガツシユ「うむ!!こちらこそよろしくなのだ!!」

この後黒歌とカラワーナや、家に来ていたユウキ・奏・フリードに、二人を紹介した。余談だが黒歌から、龍都と雪野の二人が久し振りに童心に帰りたくなつたなどと言つて、行き先き日数不明の旅行に言つたと知らされ頭を抱え、更には、サーゼクスに清麿の転入云々の手続きを頼んだ後に、一誠から送られてきたメールで疲れきつた精神に止めを刺され、次に起きたときには、黒歌・奏・ユウキに、添い寝されていたとのこと。

つづく

恋沙汰と焼き鳥男

真九 side

昨日のダメージ（精神的な）はまだ少し残っていたが、朝は、何とか起きれた。だが一誠は見つけたらその場で一撃かます!!

真九「しかし、起きたは良いが、この状態どうしよう……」

俺は俺のベットで寝ている3人の女子に目を向ける。

右側に奏が俺の腕をガツチリとホールドして眠っている

左側は黒歌がやはり俺の腕を全力でホールドして熟睡中

ここまですら、どこまで良かったか……問題はユウキだ。ユウキは俺の上に乗り俺を抱き枕がわりに眠っている。

真九「これをどう脱出しろと？」

俺は、考えながらひとまず起こしていた体を、もう一度倒した。

真九「そういや、俺の家に奏とユウキが、泊まりに来てる時は、この状態でよく寝てたな。懐かしいな……それに3人も覚えてんだな。」

俺は懐かしさとどこからか流れてくる嬉しきでいつの間にか微笑んで3人の頭を撫でていた。

真九 side out

奏「・・・真九か・・・おはよう・・・」

真九が3人を撫でてから数分後奏が目を覚ました

真九「おはようと言うか、早くそのホールドを解除してくれ。動けん」

奏「そんなこと言ってる♪実は嬉しいんじゃねーのか？」

真九「うつつうるさい!!確かにお前達と一緒にいて楽しいし嬉しいけど・・・」

奏「へく?嬉しいこと言ってくれるねくもしかして私の事好きだったり?」

真九「//////!!!」

真九は突然の質問に意表をつかれ顔を赤くしてうつむいた

奏「・・・え?マジ?」

真九は、首を縦にふる

奏「イヤーまさか両思いだったとはねー♪・・・」

奏(これは、まさかの地雷踏んじまった!!しかもあの赤面・・・あーなんて言え

ば良いんだ!!!)

真九（どうしよう!!! スゲー気まずい!!! なにか言わないといけないけど、言葉が思い付かない!!!）

奏と真九が微妙な空気を生んでいると

ユウキ「ヘーやっぱり奏も真九のこと好きだったんだ〜」

奏「ユウキ!?!」

真九「おおお前いつから!?!」

ユウキ「うーん、奏が起きたぐらいから?」

真九・奏「完全に最初からじゃねーか!?!」

ユウキ「まあ細かいことは後々♪」

ユウキ「僕も真九のこと好きだよ♪」

真九「はっ!?! えっ!?! えっ!?!」

ユウキ「だから、僕は真九に恋してるってこと・・・2

回も言わせないですよ・・・僕だって照れるんだからね・・・」

真九「すすすまん少し状況整理するから少し待っててくれ」

それから数分後

真九「一応整理できた。にしても・・・分かった筈なんだけどな・・・二人が俺に好意を持ってたのは・・・」

ユウキ「え？分かったの？」

真九「まあな、俺と他の男子とで態度に、ほんの少し違いがあったからなもしかしたらと……」

奏「お前本当に鋭いな。ていうか鋭すぎだ」

ユウキ「まあ、鈍感よりは良いけどね♪」

ユウキ「それで、真九は僕のこと好きなの？」

真九「うっうん／＼／＼／＼／＼／＼／」

ユウキ「それじゃあ、決まりだね♪」

黒歌「真九が、どんどんハーレムに近づいていくにや……」

真九「お前も起きてたのかよ……」

黒歌「そりやあんな甘い空気作られたら、嫌でも起きるにや!!」

真九「それじゃあこれからもよろしくな♪奏、ユウキ、黒歌」

奏「当たり前だ！」

ユウキ「こちらこそよろしくしね！」

黒歌「よろしくにゃ！」

この後真九達は、清麿達と朝食を食べて学校へ登校した。清麿の転校生紹介も終わりその日の授業は一応問題なく進んだ。放課後は清麿に生徒会長等を紹介していた。ち

なみに授業などの時は、ガツシユは、オカ研の部室で待機するようになった。

真九「これは!？」

清磨「どうした真九？」

真九「清磨!! オカ研の部室に急いで向かうぞ!! ちとヤバイかもしれない!!」

清磨「!! 分かった急ごう!!」

真九と清磨はオカ研の部室に急いで向かった

真九「結界が張られている!?! ちっ!! 清磨下がってくれぶっ壊す!!」

真九「memoriesドラゴン!!」

真九はスタンドでドアを壊し突入する。そこには、一人のチャライホストのような格好の男が、少し驚いた表情で、こっちを見て立っていた。

これが焼き鳥男とのファーストコンタクトであった。

つづく

修業だー！！

おつす俺だ真九だ今は、修業中だ主にリアスとその眷属が。

何故こうなったかと言うと昨日のことだ・・・回想スタート！！

く回想く

真九 side

俺と清磨は、ドアを破って突入した後一誠から状況を説明してもらった。簡単にまとめると、リアス先輩には、親が勝手に決めた婚約者がいてリアス先輩は、その婚約を拒否していた。

そりやそうだ好きでもない奴と結婚なんて俺ならヘドが出るね!!きつとリアス先輩の父親の方が持ちかけてんだろう。あの人も懲りないな。前にその事で、俺の両親からこつびどく説教されたのにまだ懲りてなかったのかよ・・・おつと話がそれたな。婚約者はライザー・フェニックスドアを破って、突入した時に、少し驚いた表情をしていた、チャライホストのような見た目をした男のことである。

ウワー無いわーこれが、婚約者とかなえる通り越してしまうわーあれだ、無理矢理好きでもなお男にキスされた後、その男の目の前で口を泥水で洗ったヒロインの気持ち

うまでもない。

ちなみにライザーの顔は、梅干しのごとく真っ赤になっている。顔で、茶が沸かせそうだな。いやフェニックスだから沸かせるのか。

ライザー「こうなったらレーティングゲームで勝負だ。お前もリアスの眷属として参加してもらおう!!」

真九「あれ? 言って無かったつけ? 俺もお前やリアス先輩と同じ王だよ?」

ライザー「なんだと? こんな奴が!? 本当なのか!」

グレイフィア「はいその通りです。彼は王で間違いありません。」

ライザー「そうかなら面白い!! リアスを俺の物にした後お前とその眷属を完膚なきまで潰してくれる。」

戒斗「口数だけは、一丁前なんだな」

ライザー「ふっそんな事を、いつまでも言っていていられるか? 俺は、レーティングゲームを何度も経験している。そして見るこれが俺の眷属だ!!」

そう言っつてライザーは自分の眷属を呼び出した。

真九「全部女性かよ……」

奏「うわっ趣味悪!!」

ガツシュ「おままさかりアスもそこに入れる気か?」

ライザー「だとしたらどうした？」

ガツシュ「お主!!よかろうそのレーティングゲームとやらに、私と清麿もリアスのチームとして参加させてもらおう!!」

清麿「ああ、貴様のような奴を許すわけにはいかねえ!!」

ライザー「ふっ良いだろう貴様らごとき何人集まろうと痛くも痒くもない!!」

リアス「そんな大口いつまで叩けるかしら？」

ライザー「事実だろ？まあこのままじゃ面白味の欠片もない10日間時間をやろう。その間精々頑張るこつたな。」

そう言つてライザーは帰つていった。

リアス「皆、ライザーが10日間有余を与えたことを後悔させましよう!!!その為にも明日から修業に行くわよ!!」

真九「オツケーらな俺らは基本教える方に回るとしますか。それとグレイファイアこつち来て。」

そう言つて俺はグレイファイアをオカ研の部室から連れ出した。

真九「はー・・・なんと云うかりアス先輩のお父さんまだあんなことやつてんのかよ?」

グレイファイア「・・・ええまあ・・・」

真九「グレイフィアさん？前から言ってるけどそんな固くならなくて良いから。もう少し肩の力抜こうよ？」

グレイフィア「そう言われましても・・・」

真九「まあ、無理にそうする必要は特に無いですけど、できればそうしてくれると助かります。」

グレイフィア「努力はしましょう。」

真九「そうしてくれると助かる。それで話は戻るけど、リアス先輩のお父さんに言っ
て貰えますか？「今回は、家の親が二人とも行き先日数全てが不明の旅行に行つてま
すから、まだ伝わら無いでしょうが時間の問題なので覚悟しといた方が良いでしょう。」つ
てね。」

グレイフィア「分かりました。それと一つよろしいでしょうか？」

真九「なに？」

グレイフィア「先程今回のレーティングゲームに参加されると言いました少年と青年
彼等は、何者ですか？彼等から出てくる雰囲気は、普通の人のそれではありません。い
くつもの大きな戦いを乗り越えてきた者の雰囲気です。それこそサーゼクス様達と同
じか、それ以上の感じがします。」

真九「確かにそうだね。彼等の二人は、異世界の住人だよ。少年の方は、ガツシユベ

ル青年の方は、清磨と言うだよ。そしてここからが本題だが、ガツシユベル君の方は魔界の王様要するにこことはちがう世界の魔王なんだよ。」

俺はそう言つて清磨とガツシユについて説明した。

グレイファイア「そうでしたか。ですがそのような方が何故異世界から？」

真九「そうだな、これも話しとく必要があるな・・・だがこれは、サーゼクスを中心に魔王達にだけ教えておいてくれ。この情報は、それだけ扱いが危険なものだ。」

グレイファイア「かしこまりました」

それから俺はグレイファイアに世界の危機等について説明をした後にオカ研の部屋に戻った。

グレイファイア「それでは、私は失礼します。」

そう言つてグレイファイアは帰つて行った。

真九 side out

く回想終了く

そして今日は、リアスの家が所持している山で修業する為に、移動その後それぞれに指導者を着けて修業をしているのが現状である。

真九 「クククさあライザー貴様はリアス先輩達に勝てるかな？」

つづく

新たな力と覚醒の兆しその1

修業の内容について説明をしておこう。

まずは、イツセーだ。彼は原作よりは体力や筋力は、付いているので、そこを鍛えながら更に、赤龍帝の籠手を使いこなして貰いあわよくば、禁手化（バランスブレイカー）にするために、戒斗（ロードバロン状態）と、模擬戦をしてもらっている。

戒斗「どうした？もう限界か？貴様の強さは、その程度か？」

イツセー「いえ!!まだやれます!!」

戒斗「なら、見せてみる!!貴様の強さを!!」

こんな感じです。

次に、木場だ彼は、ユウキと模擬戦闘をしてもらっている。同じ騎士の駒であり、同じ剣士でもあるそして、何よりもユウキは、前世では《絶剣》と言う二つ名を持った剣士でもあったので、木場はユウキから学ぶものが多いと思いいこの組み合わせにした。ちなみに、フリードもこの二人と、模擬戦をしてもらっている。

ユウキ「凄いね!!私とここまでで戦えたのはアスナや、キリトいらいだよ!!」

木場「それは良かった。だけど、まだ本気出してませんよね？」

ユウキ「あれ？気づいてた？」

木場「ええ、うすうす。」

ユウキ「そっか、なら!!少し本気を出そうかな!!ついてこれる？」

木場「ついていって見せます!!」

おースゲー剣士バトルや。てか、フリードが蚊帳の外やんけ。

次に、小猫ちゃんだ。彼女は、黒歌とスネークが講師としてついてもらっている。小猫ちゃんは、戦闘を見るに、パワーと防御をはたふだが技術が、圧倒的に足りてないの
で、そこをどう埋めるか考えたところ、CQCの産みの親が一人であり、使い手のスネークと仙術を徐々に慣れさせる為に、黒歌もそちに回ってもらった。

小猫「こうですか？」

スネーク「良いセンスだ!!」

黒歌「流石私の妹にや♪」

スネーク「黒歌お前も、うかうかしてられないぞ!」

黒歌「うっ!!わっ分かってるにや!!」

スネーク「この後は、CQCの武器との同時使用について教えるその後は、ダンボールについての授業だ!!」

うん予測通り黒歌もCQC学べてるね!!だが、ダンボールについての授業は、必要な

のか？

気を取り直して次は、朱乃先輩だ。朱乃先輩とは、ガツシユ&清磨に指導してもらっている。理由は、分かると思うが一応説明まずガツシユと言えば、雷技の使い手更に言えば、元の世界では魔界の王それだけの強さを持っているガツシユと戦えば、朱乃先輩も色々学べると思ったと言うのが1つもう1つは清磨のアンサートーカーは、あらゆる状況に、答えを出せる能力だし、それが無くとも清磨は、観察力が高いので朱乃先輩に色々アドバイスもできると思いましたこの組み合わせです。

清磨「ガツシユ!!セツトだ!!」

ガツシユ「うむ!!」

清磨「ザケル!!」

朱乃「あらあら、相当な威力ですこと最初から全力ですのね?」

清磨「朱乃さん残念だがこれは第1の呪文要するに一番最初からあつた呪文だ!」

朱乃「!!」

朱乃「こちらは、全力でやらないと不味いですわね!!」

清磨「ラシルド!!」

朱乃「あらあら守れてはいますが、もうすぐ壊れてしまいそうですわね」

清磨「それは、どうかな?ガツシユ!!ザグルゼム!!」

朱乃「!!盾が修復されて強度が増してる!!?」

清磨「もう一度行くぞガツシユ!!ザグルゼム!!」

朱乃「攻撃が跳ね返された!!」

うん凄まじいバトルだ

よし!!次だ!!次は、アーシアだ。アーシアは、僧侶なので、魔力についてカラワーナが、講師を勤めてもらっている。

カラワーナ「できたか?アーシア」

アーシア「はい!!こうでしょうか?」

カラワーナ「アーシアは、なかなか筋が良いな。よし!!次の段階だ!!」

ここは結構優しい方だなてかさっきまでのが色々ヤバかっただけか?

次は、リアス先輩だ。先輩の担当は俺だ。今回はリアス先輩の滅びの魔力をもっと強化することを専念する。

真九「先輩!!もつと魔力を一転に集中させて!!そして形を作って!!」

リアス「こっこうかし?」

真九「集中と形を作ることではできているが、脆すぎるこれじゃ使い物にならない。そうだ!!滅びの魔力を銃の形にしてくれ!!」

リアス「こんな感じかしら?」

真九「オツケーそして、銃から滅びの魔力を射出すイメージをしながら、その銃の引き金を引いて!!」

リアス「わっ分かったわ!!」

真九「そしたらこの水に打ち込んでくれ」

オロチ「久々の登場ですね私・・・」

真九「ははは、ごめんごめん。」

俺のところは、こんな感じてある。

奏は、カラワーナと模擬戦する予定だったが、今カラワーナが、アーシアの講師をしているので、休んでいる。

奏 side

奏は暇だったので、森を散歩していた。

奏「あー速くあたしの出番は、こないかねーこっちは暴れたくてしょうがないの!!」

奏は一人森の中で独り言をいった

???「ほお? こんなところに人間がなんのようゲラ?」

奏「誰だ!?!」

そう言つて奏は、声のする方を向いたすると、そこには白を中心とした翼竜のような

姿の生物だった。だが、生物にしては、見た目が機械に近すぎた。

奏「ロボットか？」

???「いや、そいいつは爆竜トップゲイラーだ。機械のような見た目をしているがれつきとした生物だよ」

奏「あんたは？」

壬琴「俺は、中代壬琴だそういうお前は？」

奏「あたしは、天羽奏だよろしく」

壬琴「そうか、なら何故ここに来たんだ？」

奏「なーに仲間と模擬戦をやる予定だったけどそれが少し後になったから暇潰しに散歩してただけだよ。」

奏「そつちこどうしてこんなところにいるんだよ？見たところ普通の人間じゃ無さそうだし。」

そこから二人はそれぞれいろんな話を話した（又、作者が面倒くさがつて略称したとも言う。）

壬琴「なるほど、ここが俺がいた世界と全く違う世界と言うことは、良く分かった。」
奏「困ったときはお互い様だろ？」

トップゲイラー「それにしても、壬琴も大概だが、お前の人生も相当ゲラ。」

壬琴「全くだ、だが久々にときめいた。奏お前にならこれが使えるかも知れねえな。」
そう言つて壬琴は奏に自分の着けていたプレスレットを渡す。

奏「これはなんなんだ？」

壬琴「コイツは、ダイノマインダーアバレキラーに変身するためのアイテムだ。」

奏「おいおいそんなもんあたしに渡して良いのか？」

壬琴「ああ、今の俺はある男にある力を渡したのが理由なのか昔と違って力も霊としても力が衰えていて変身すら出来ないからな。まあ戦闘のアドバイスぐらいはするさ。」

奏「そうか、ならこれからよろしく頼む二人とも!!」

つづく

新たな力と覚醒の兆しその2

奏は、ダイノマインダーを受け取ったの後、壬琴とトツプゲイラーと共に真九の元へ向かった。

真九「なるほど分かった。しかしまさか奏がダイノマインダーを受け継ぐとはねー。」

奏「今試しに変身して見るか!!」

真九「あーそれは駄目。」

奏「どうしてだ？」

壬琴「そう言えば、説明してなかったな。ダイノマインダーは、ダイノガッツが暴走を起こすと町一つ消し飛ばす程の重大事に繋がるんだ。」

トツプゲイラー「俺が死んだ理由もその爆発が原因ゲラ。」

奏「おいおい!!それりや危険すぎるだろ!？」

真九「まあ、暴走を防ぐ術は、既に頭にある。奏お前の槍とダイノマインダー俺に預けてくれるか？」

奏「それは良いけど、どうしてだ？」

真九「それはな、奏のこの槍に、暴走したダイノガッツや余剰なダイノガッツが、自

動的にこの槍に送られるようにして、そのエネルギーを槍で利用できるように改良するんだよ。」

壬琴「なるほど、暴走を押さえた上更にそのエネルギーを安全に利用するのか考えたな。」

真九「ふっそりやそうだ。目の前に大量のエネルギーがあるのに、それを余剰だ危険だと捨てたらつまらない！しかもそんな考えは、誰でもできる。だが、それを安全かつ今出せる最大限で利用できれば、それは明日への新たな可能性にも繋がるしな!!」

奏「流石真九だ!!それじゃあ頼んだ!!」

真九「おう!!最長でも明日までは待つてな!!それとすまねえが、俺の代わりにリアス先輩の特訓見といてくれ。詳しくは、リアス先輩に聞けば分かると思うから。」

真九は、そう言うのと別荘に入っっていった。

奏「それじゃああたしは、リアス先輩の所に行きますか。二人は、どうするんだ?」

壬琴「俺は、別荘の中でゆっくりしておくよ。」

トツプゲイラー「俺は、その黒い奴と話をしておくゲラ」

ルナ「黒い奴とはなんだ!!私にも、ルナと言うれつきとした名前がある!!」

トツプゲイラー「ふっ一応覚えておいてやるゲラ」

奏「二人とも喧嘩とかはするなよ。お前ら二人が喧嘩すると、冗談じゃすまないから

な。それじゃああたしは、行くとするよ。」

奏は、リアスの元に向かいリアスの滅びの魔力のコントロールについて教えた。

真九 side

真九は、奏にリアスの特訓を任せした後、別荘の部屋の1つで約3時間にわたり改良をおこなっていた。

真九「この回路の下でこれを………よっしゃ!!これで完成だな!!」

真九(そういや、俺はなんでダイノマインダーの構造の詳しいことまで知ってたんだ?ここまで分かると、まるでいろんな知識が詰まった本棚があるみたいだな……)

真九「まあ、今度ルードに聞けば良いや。」

真九はそう言って、部屋を出た。

真九 side out

ユウキ「あつ!!真九調度良かったよ。今夕食作るところだから、手伝って。」

真九「ハイよ。それで、何作るの?」

ユウキ「カレーにしようと思ってるんだ。どうかな?」

真九「良いと思うぞ？それとサラダも作っておくか。」

ユウキ「分かった!!それじゃあさっそく取りかかろう!!」

こうしてカレーとサラダができ(勿論ライスあり)夕食になった。

スネーク「うますぎる!!」

イツセー「流石真九とユウキだな!!」

奏「本当なんでこんなに料理が上手いんだよ?」

真九「何故って言われてもねえ?」

ユウキ「僕たちは普通に作ってるだけだよ?」

フリード「普通にこれかよ・・・」

アーシア「お二人とも凄いです!!」

リアス「女性として負けた気がするわ・・・」

朱乃「あらあらピンチですわね・・・」

小猫「・・・おかわりです!!」

真九「はやっ!!」

ユウキ「まだまだあるよ♪」

真九「そう言えばリアス先輩に聞きたいことがあるんですけど。」

リアス「何かした?」

真九「ここまで魔方阵で飛んできたのでこつてどこなんです？」

リアス「説明してなかったわね。ここは、九州よ。」

真九「結構遠くまで来ましたねてか、なんでここなんです？」

リアス「ここは、ある噂から人があまり来ないのよ。」

真九「その理由とは？」

リアス「話では、戦後から出てきた話らしいんだけど、この山には、岩・鋼・氷の魔神とその三体の王と言われている巨人がいるって話よ。」

イツセー「へーそんな話があるんすか。」

真九「……」

ユウキ「真九どうしたの？」

真九「いや少し考え事をしてただけだ。それより明日はその4体を探しに行こうと思うんだが。」

イツセー「お前がそんなことを言い出すってことは、何か心当たりでもあるのか？」

真九「ああ、心当たりがあるどころかこれ確定だと思ってる。まあ、詳しい話は明日するよ。」

その後真九達は楽しい時間をすごし就寝に着いたら。

しかしそのころ暗躍する二人の悪がいることを真九達は、まだ知らない………

??? 「兄貴もうすぐだな!!!」

兄貴と呼ばれた男「ああ、もうすぐ魔神達を俺らの物にできる!!!フッフッフハハハハ

ハ!!グエ!!ゲホッ!!ゲホッ!!」

??? 「無理な声出すから………」

つづく

新たな力と覚醒の兆しその3

二日目真九達は、朝食を取った後にリビングに集まり昨日の事について真九が、説明を始めた。

真九「この山にいると言われている岩・鋼・氷の魔神とその王の巨人についてだが、多分戒斗が使い魔にしたグラードンと同じポケモンだよ。」

リアス「それは、本当なの!？」

真九「ああ、その話と全く同じ存在がいるからな。」

アーシア「そのポケモン達の名前はあるのですか？」

真九「あるよ。レジロック・レジスチル・レジアイスそして、その三体の王がレジギガス。」

ユウキ「その四体ってどういうポケモンなの？」

真九「どういうポケモンか・・・そもそも長い眠りについていてるポケモンだったから、全くといって良いほど分からないが、1つこれだけは言える。」

イツセー「1つだけ言えること・・・？」

真九「ああ、それはその4体のポケモンは争いが生み出した存在と言うことだ・・・」

スネーク「争い……」

奏「それは、どういうことなんだ？」

真九「それは、《ガタガタガタガタ》!？」

リアス「地震!？」

戒斗「いや、何か違う!!」

ルナ「真九大変だ!!」

真九「どうしたルナ？」

ルナ「3つある山の洞窟の1つから、氷の塊のような奴が現れた!!」

真九「なに!?嫌な予感がする!!ルナそこへ俺達を、案内してくれ!!」

ルナ「分かった!!」

真九達は、ルナを追って山の洞窟に行った。

そこでは、レジアイスの他にレジロック・レジスチルもおり、二人組の悪魔と戦闘を
していた。

リアス「あれは!!はぐれ悪魔の兄弟ギャラーとビーンズよ!!使い魔等を乱獲と、その
乱獲した使い魔の違法取引で指名手配されているはぐれ悪魔よ。」

奏「アイツらのターゲットは、明らかにレジアイス達だな。」

真九「いや、多分、レジアイス達はエサとして使う気だろう。」

イツセー「つてことは、目的はレジギガス？」

真九「だろうな。」

木場「だけど、彼等にはレジギガスはおろか、今相手をしているレジアイス達も倒せないんじゃない？」

スネーク「普通はな、だがアイツらの足元を見る。あそこ周辺の数ヶ所だけ地面を掘った後がある。罨を仕掛けているのだろう。」

戒斗「罨を使うとは、正に弱者だな。」

真九達が、話していると突如地響きが鳴り出し洞窟の奥から巨大な影が姿を現し出した。

真九「!!あれはレジギガス!!出てきちゃったか!!」

イツセー「真九どうするんだ!？」

真九「ここは、あの二人と戦闘するしか無いだろ?」

奏「なら、ここはあたしのスタンドを、囿にするか?」

真九「ああ、たの!？」

真九は、驚いたアールシアが突如レジギガス達のもとへ走っていったことそして、アールシアの腕の中には4つのモンスターボールがあったことに。

アーシア side

真九が一誠達と話している時アーシアは、ある物に目を奪われていた。

それは、4つのボールのような物であった。

その内の三つは、赤と白のシンプルな見た目のボールだったが、4つ目のボールだけは違っていた。

見た目は、紫色に二つの赤い目のような物がついていて、その目の間には、「M」のマークが刻まれていた。

アーシアには、これがなんなのか分からなかったしかしボールに手を触れた瞬間そのボールの使い方が頭の中に、流れ込んできた!!

そして、次の瞬間にはそのボールを両手に持つてレジギガス達の元へ、走つてた言っていた。

アーシア side out

真九「あれは!? モンスターボールとマスターボール!! 何故あんなものが!」

真九は、驚いていた。それは当然と言えば当然である。予想外のことが立て続けに起こったのだから。

しかし、アーシアがレジギガスの前に立ったとき更に驚くことが起こった!!

レジギガスが膝まずいたのである!!

そして、それと同時にレジアイス・レジスチル・レジロツクがアーシアの回りに集まってきたのだ!!

真九「まさかレジギガス達が、アーシアを主と認めたのか!?!」

真九が更に驚いているなか、アーシアはレジアイス・レジスチル・レジロツクをマスターボールで、捕まえパートナーにし、最後にレジギガスをマスターボールで捕まえパートナーにした。

そして、アーシアはその4つを投げレジギガス達をもう一度出した。

アイス「レージーアアアアアアアア!!」

ロツク「レジロツク!!」

スチル「レジスチール」

ギガス「レジギガアアアアアアアアアア!!!!」

レジギガス達は、雄叫び?をあげながら、現れた!!

その姿は、さながら姫を守る騎士のような風格であったと後に真九は語った。

アーシア「こっここからは、私達のステージです!!」

つ
つ
く

新たな力と覚醒の兆しその4

アーシアが反撃宣言をした後に、レジアイス・レジロック・レジスチルがアーシアとレジギガスの前に出た。

レジアイス「レジーアーイースー!!!」

レジアイスはそう言うと共に冷気をギャラーに向かって発した。

真九「ほー『こここえるかぜ』か!」

リアス「『こここえるかぜ』?」

真九「ああ、へこおりの属性に属する技で当たればダメージと同時に100%の確率で相手のスピードも1段階下げる技だ!!」

木場「敵だったら、騎士の僕とは相性悪いね」

スネーク「だが、味方としては非常に心強い!!少しのスピードの違いが勝負の勝敗を決めることもあるからな!!」

レジロック「レジローツク!!」

続いてレジロックが、自分の周囲に岩を浮遊させそれをビーンズにぶつけた

真九「次は、『げんしのちから』か。」

奏「どういう効果なんだ？」

真九「あの技は、へいわの属性に属する技で、ダメージと共に10%の確率ではあるが、自分の攻撃力・防御力・スピード・特殊攻撃力・特殊防御力全てを1段階上げる技だ！」

戒斗「特殊攻撃力と特殊防御力と言うのはなんだ？」

真九「簡単に言えばレーザー攻撃見たいな物理攻撃以外の技の威力を左右する攻撃力とそのダメージを左右する防御力だな。」

リアス「と言うことは、特殊攻撃力が高いと魔力等による攻撃が上がって、特殊防御力が高いと魔力等による攻撃のダメージを軽減できるのね？」

真九「そう言うことです。おっと次の攻撃来ますよ。」

レジスチル「レジスチール!!」

真九がそう言うのと同時にレジスチルが雄叫びを力強く叫んだするとそれと、同時に地面が大きく揺れ始めた!!

リアス「このタイミングで地震!?まさか!」

真九「ああ!!そのまさかだ!!レジスチルが技の1つ自信を使ったんだ!!」

ユウキ「えー!?ポケモンって平然と自然現象起こせるの!」

真九「まあ、間違っちゃいないな。」

真九は今までに存在するポケモンの技をふりかえった。

『ひでり』や『あまごい』『ふぶき』に『だくりゆう』

改めて考えると、さも当然のように自然現象を発生させる技が多い本当にポケモンは、土地狂っている。

そんな事を考えていると、レジアイス・レジロック・レジスチルは、次々と技を放ち、ギャラーとビーンズのいた場所が、土煙におおわれた。

一誠「やったか!？」

真九「やめろ!! イツセーそれはフラグだ!!」

真九は一誠の発言を止めようとしたが、無駄だった。

ギャラーとビーンズは、なんとか持ちこたえたのかその場に膝をつきながらも、立っていた。

ギャラー「くっ!! なんて攻撃力だ!! あと一発でも攻撃が多けりや死ぬところだったぜ……」

ギャラーは、そう言いながら胸ポケットからあるものを取り出す。

リアス「あれは!! まさかフェニックスの涙!？」

黒歌「ヤバイにや!! あれは、使わせたら相手は完全回復にや!!」

ユウキ「え!? それじゃあ急いで止めないと!!」

そう言って、戒斗と、真九以外が立ち上がろうとした。
しかし

真九「いや、問題ない。止めなくても大丈夫だ。」

リアス「え!? それは、どう言うこと!?!」

真九「まあ見てれば分かるさ。」

真九は、そう言いながら不適な笑みを浮かべた。

戒斗「この程度で倒されるならあのレジと言う奴は、その程度だと言うことだ。それに、まだレジギガスが攻撃してないだろ?」

戒斗は、そう言葉で全員が納得した。

正に魔王の説得力である。

そうしていると、ギャラーとビーンズは、フェニックスの涙を使用し、完全回復をして立ち上がる。

レジギガス「ギガガガガギツガー!!!」

それとほぼ同時にレジギガスが、咆哮を轟かせ前に出てきた。

ギャラー「今頃出てきても遅いんだよこのデカブツがー!!!」

ビーンズ「テメーなんて、あつ言う間に倒してやるぜ!!!」

そう言って二人は飛びかかった。

しかし、あつという間にレジギガスの両手で掴まれてしまった。

リアス「本当にあつという間だったわね（捕まるのが）」

真九「ああ、あつという間だったな（捕まるのが）」

リアス達は、そのあつという間の捕まりぶりに啞然としていると、レジギガスは二人を掴んだ状態で、その手にどんどん力を加えて行つた。

真九「おーでたでたレジギガス特有の技『にぎりつぶす』」

リアス「予想はつくけどその物騒な名前の技は、どんな技なの？」

真九『『にぎりつぶす』は、ヘノーマルと呼ばれる属性に属する技で、レジギガスしか使えない技だ。そして、この技の特徴は、相手の体力が残っていれば残っているほど威力が上がる技だ。』

ユウキ「なるほど!!さっきフェニックスの涙の使用を止めなかったのはこのためだったってこと？」

真九「そう言うこと」

リアス「なんと言うかえげつない技ね。」

ギャラー「……………」

ビーンズ「……………」

真九「あいつら二人とも気絶してるな。」

リアス「お兄様に頼んで彼等は連行してもらいましょうか。」

こうして、この戦いに幕が下ろされた。

それから残りの日数の修行期間は、ほとんどの者は、修行の内容に大きな変化は無かったが、アーシアはレジ系達との連携を基盤とした戦闘の練習が追加された。

そして、レーティングゲーム前日に駒王町帰り、その日は明日の為の休日となった。

アーシアside

一誠「グアアーグッアアー!!!」

私は、レイナーレさんとイツセーさんと、家に帰り私は、自分の部屋にたどり着くと疲れてそのまま寝てしまい、イツセーさんの声と思われる大声で目を覚ましました。窓の外を見ると、もう太陽は、沈み夜になっていました。私は、さっきの声でイツセーさんが心配になり、イツセーさん部屋へ行こうと部屋を出ました。

レイナーレ「アーシアってこと、やっぱイツセーのあの声を聞いて?」

アーシア「はい。心配になって」

レイナーレ「なら一緒に行きましょう?」

アーシア「はい。そうしましょう。」

私は、レイナーレさんと、イツセーさんの部屋の前へ来ました。耳をドアへ近づけると、さつきよりは明らかに小さな声ですが、イツセーさんが苦しそうに叫ぶ声が聞こえて来たので、私とレイナーレさんは、咄嗟にドアを開けました。

レイナーレ「っ!!?これは!?!」

アーシア「イツセーさん!!」

一誠「!?レイナーレにアーシア……この事は、部長には、絶対に言わないでくれ……」

アーシア side out

レーティングゲーム当日になった。

多くの者が見ているこのレーティングゲーム真九は、リアス達に向かってこう一言。

真九「まっガンバレ」

リアス達「軽い!!」

つづく

一誠の覚悟

真九 side

とうとうレーティングゲームが、開始された。

まあ、アイツらは強くなつたし清磨とガツシユそして、レジギガス達もついてくるま
ず負ける心配はないだろう。

だが、レーティングゲームが始まる前からどうもイツセー・アーシア・レイナーレの
様子がおかしいのは、どうも気になる。今も、レイナーレの顔には、不安の色が見えて
いる。

奏「なあ、真九イツセーの様子おかしくなかつたか？」

真九「ああ、それは俺も思った。多分アーシアとレイナーレは、何か知っている感じ
だしな。」

イツセー……お前は、一体何をしようとしてるんだ？

真九 side out

レーティングゲームがスタートし、一誠達は作戦で体育館を囮に敵ごと体育館を壊し、現在は体育館を破壊した直後に現れた敵方の女王と対峙していた。

一誠「小猫ちゃんは、先に行っててくれ。コイツは、俺が何とかする!!」

一誠は、そう言うのと敵の女王へと攻撃しよう構えた。

しかし、突如2つの雷撃がライザーの女王に命中し、一誠は自分が戦う必要がないことを覚った。

それと同時に3つの影があらわれた。

朱乃「ここは、私達に任せてください!!」

ガツシュ「うむ!!そのとおりだ。ここは、私達に任せて先に行くのだ!!」

一誠「分かった!!行こう小猫のちゃん。」

小猫「はい・・・ここは、お願いします。」

一誠と小猫は、そう言うのと運動場の方へと向かって行き、それを3人は、確認するとライザーの女王へと視線を戻した。

清磨「悪いが、最初から全力だ!!」

清磨「セット!!ザケル!!」

ガツシュの攻撃とともに戦闘が開始された。

真九 side

俺にとつては、ライザーの女王ユーベルナvs朱乃先輩と清磨&ガツシュこの勝負の勝敗は、火を見るより明らかだ。

朱乃先輩だけだったなら、レーティングゲームの経験とフェニックスの涙の回復で勝れたかもしれない。

しかし、相手は3人。清磨は、直接戦闘を行わないにしろ、彼の頭脳は並の神器より強力。

それに加え、清磨とガツシュの2人は、100人の魔物の子供達による壮絶な戦いを最後まで勝ち残ったコンビである。

踏んだ場数だけならば、ユーベルナの方が多かろうが、清磨とガツシュの場合は、経験の濃さが段違いなのである。

そして、それに第1の技だけでも強力なザケルをはじめとして、攻撃は勿論防御にサポート等、技の種類も多くその分清磨の戦略も生きる。

しかし、2人の最大の武器は、その絆であろう。

彼らは、魔物との戦いの中で互いに信頼し支えあつたからこそ最後まで勝ち残れたのだ。

彼らの力は、それを確かな形として表している物だと俺は思う。

『ライザー様の女王戦闘不能』

そんなことを思っていると、決着はついたようだ。

少し前に校庭で殆どのライザーの眷属は、やられたのであとは、ライザーを倒すだけ。

真九「ライザーの所には、一誠が向かったていたが。どうなっているか・・・あれは!?!」

俺達は、予想もしていなかった映像を目の前にして、啞然としていた。

ユウキ「あの果実って・・・」

戒斗「ヘルヘイムの木の実だ」

奏「あのブーステッドギアから、出てきている植物もまさか・・・」

真九「ああ、ヘルヘイムの植物だ。」

一誠お前は、そこまでの覚悟を・・・

真九 side out

何度攻撃を受けても回復するライザー・フェニックス。一誠とリアスと小猫と木場の4人で、1度は追い詰めたが、隠し持っていたフェニックスの涙により完全回復を果たした。こちらには、アーシアがいるが、回復をする隙がなく、その場にいる一誠たちも限界を迎えており、立っているのもやっとなほどであった。

一誠にいたっては、皆に隠している（アレ）の浸食により左腕だけとはいえ、激痛をともない普通の人間では、死んでいてもおかしくないような状況であった。

しかし、一誠は確かに立っている。

一誠「まだ、勝負はこれからだ!!」

ライザー「フツ!!まだ勝てる気でいるとは、おめでたい奴だ!!貴様から潰してくれろ!!」

ライザーは、そう叫ぶと一誠に向かって炎を放ち一誠は、炎に呑み込まれた。

『一誠（くん）（先輩）（さん）!!』

その場にいた全員が一誠へと声をかけた。

結果としては、一誠は無事であったしかし、服は所々燃え、攻撃をガードしたのであらう両腕は、一目で重症と分かるほどの大火傷をおっていた。

リアス「一誠!!もう良いわ!!下がりにさい!!」

一誠「すみません部長それは、聞けない命令です」

リアス「どうして!?!お願い下がってちょうだい!!」

一誠「部長。俺、悔しかつたんです。アーシアがさらわれた時自分が情けなかつたんです……その後の助けに行った時も俺、小猫ちゃんや木場や、真九がいたから勝てただけで俺は、強力な力を持っていながら、それを使いこなせてない自分に腹が立ちま

した。」

アーシア「一誠さん……」

一誠「その日から俺は、自分に誓ったんです。大切な人を守る自分に変身しようって。」

木場「一誠くん……」

一誠「だから、ここで引き下がる訳には、行かないんです!!ここで俺が引き下がったら、あの日の誓いが、嘘になっちまいますから!!」

そう言い一誠は、そのボロボロの体で、ライザーへと向かって行った。

一誠「それに……」

一誠「こんな奴のせいで、リアス部長や皆の悲しむ顔を見たくない!!」

ライザー「こざかしい!!」

ライザーは、向かってきた一誠を容赦なく炎を纏った拳で殴り飛ばした。しかし、それでも一誠は、立ち上がった。

一誠「皆に笑顔でいて欲しいから!!」

小猫「一誠先輩……」

一誠「だから、見ていてください!!」

一誠「俺の変身を!!」

リアス「一誠・・・分かったわ!!私はいいえ!!私達は、貴方を!!リアスグレモリーの兵士を信じるわ!!」

一誠は、リアスの言葉を聞き終わると、懐からヘルヘイムの果実を取り出し、左腕のブーステッドギアに押し当てた。すると、一誠の腕からは、緑色の光と共に無数のヘルヘイムの森の植物が生えはじめた。

小猫「一誠先輩!!」

リアス「大丈夫よ。一誠は、私の兵士で、今代の赤龍帝だもの」

一誠(!!なんて痛さだ!!さっきのまでの痛みなんて、比じゃない!!意識どころか、魂まで持っていかれちまいそうだ・・・だが!!死ぬわけには、いかねーんだよ!!)

一誠「ウオオオオオオオオオ!!!俺に力を貸しやがれ!!ブーステッドギアーーーー!!!」

『Welsh Dragon Balance Over Breaker!!!』

一誠の叫びに答えるように、ブーステッドギアから、音声が響き赤く光輝きだした。

そして、ヘルヘイムの植物と緑色の光を飲み込みながら赤き輝きは、一誠を包みこんだ。

そして、光が消えた現れた姿は、赤き鎧を纏った一誠の姿であった。

一誠「ラストバトルだ!!ライザー!!!」

222

赤龍皇帝の鎧

その姿は、歴代のどの姿とも違い鎧と言うより龍人等の生物に近かった。

背中には立派な翼が付いていて、胸には機械的なドラゴンの顔が突きだし尻尾まで生え、両腕には巨大な爪を武装していた。左腕に至っては、ヘルヘイムの植物に侵食された影響なのか腕の巨大な爪が右腕の巨大な爪より1本多い4本になっておりその姿と存在感は、それを見る者全てに驚愕をもたらした。

ライザー「なんだ!? なんなんだ!? その姿は!?!」

ライザーは、目の前で起こったその異状とも言える姿について質問する以外の選択肢がなかった。

一誠「オーバーロード……ブーステッドギア・オーバーロードメイプル!! お前を倒す為に進化したこの姿の名だ!!」

一誠は、高らかに勝利宣言をしその巨大な両爪で攻撃を開始した。一撃一撃が、ライザーを確実削り削られる度にライザーは、回復する。

そして、ライザーは自分の炎で一誠へ攻撃を仕掛けるが、どんなに攻撃を当てようとも鎧の胸の竜の顔に喰らわれるか、当たっても鎧の強固さによりほとんどダメージを与

えることはできていない様子だった。

何度やっても傷1つ着くことの無きその鎧は、鎧と言うより皇帝が待ち受ける城と城壁その物であるとライザーは、錯覚した。

ライザー「良いだろう・・・ならば!!この一撃でその城ごと吹き飛ばしてくれるわ!!!」

ライザーは、そう言うとき空へ飛び上がり自分の頭上に巨大な火の玉いや、小規模の太陽を作り出した。

ライザー「俺の魔力を限界まで溜め込んだ一撃だ!!DNAの一片すら残らず燃え尽きる!!!」

その一言と共にライザーは、太陽を支えていた右手を降り下ろし一誠目掛けて自分の渾身の一撃を放った。

そしてそれが一誠へ直撃すると同時に強力な衝撃波と突風が起こり一誠の後ろにいたりアス達吹き飛ばされ一誠がいた場所を中心に校舎の半分以上が吹き飛んでいた。ライザーは、その光景に満足そうな笑みを浮かべていたが、なかなか戦闘不能の放送が流れない事に気づき、一誠の立っていた場所を全員が息をのみ凝視した。

最初は、爆風によって舞い上がった煙によって見えなかったその場所が、少しずつ煙が晴れ見えてきた。そして、それと同時にそこに立っている人物の影も少しずつ見え

がほとんど煙が消えた頃には、ライザーの一撃の影響か、鎧の各所から湯気のように煙をあげてはいるが、それ以外に大きな変化は無いほぼ無傷の状態の一誠が堂々と立っていた。

リアス達「イツセー（さん）（君）!!」

ライザー「ナニイ!!」

リアス達は、喜びと驚きの混じり合った声で、一誠の名を呼び、ライザーは自分の全力を食らってほぼ無傷の状態の姿に同様を隠せずにいた。

そして、一誠はライザーの前へ目にも止まらぬ早さで移動し、そのスピードのままライザーを殴り飛ばした。

動揺していたライザーは、その攻撃への反応が遅れなすすべなく吹き飛ばされた。しかし、ライザーは反応できたとしても、ほとんど動くことができなかつたであろう。それほどのスピードが今の一誠には有り、更にライザーも先程の一撃の反動が残っていたのだ。

一誠「これで終りだ!!『ドラゴンコロナ』」

その言葉と共に右の右手から炎が放たれ、その炎にライザーは、なす術なく呑み込まれた。

後にライザーは、この時の事をこう語った。

ライザー「最後の攻撃を受ける直前、炎を放った兵藤一誠の腕が、狼の顔に見えた。」
と

『ライザー様戦闘不能よって勝者リアスグレモリー』

リアス達の勝利を告げられると共に、真九達は動き出した。

つづく

第2ゲームスタート

真九 side

一誠の死をも恐れない覚悟とそれによる覚醒によつてリアス達は、レーティングゲームに見事勝利

そして現在俺達は、自分達のレーティングゲームまで時間があつたので、リアス達の元へ来ていた。

真九「まあいろいろ言いたいことはあるが、まずは勝利おめでとう！」

リアス「ええ!! ありがとう。でもあなた達やガツシユと清麿がいなかったら、もつと厳しい戦いになつてたのは、明白だったわ。もしかしたら、負けていたかもしれない。特にイツセーがいなかったら、ライザーに勝つことは、ほぼ不可能だったと思うわ。」

真九「そうか。そういうや、イツセーは？」

リアス「彼なら、レーティングゲームが終わつてこの部屋へ転送されてすぐに寝てしまったわ。」

そう言つてリアスは、後ろにあるドアを見た。

多分イツセーは、隣の部屋で寝ているのだろう。

真九「まあそりやそうだわな。あれだけの变化相当な体力を消耗するはずだし、レイナーレの話だと、昨夜からヘルヘイムの植物の侵食による激痛を味わってたらしいからな。」

戒斗「侵食されていたのが、神器だと言つても神器事態が本人の体と密接に繋がっているのが理由だろう。」

リアス「そうね。神器は、持っている者の言わばもう1つの命と言つても良いほどの物。それを無理矢理体から抜いたりすれば、抜かれた者は死んでしまうほど繋がりが深い。だからこそその激痛は計り知れない。だけどそれと同時に思いを力に変える事のできる神器だからこそ、ヘルヘイムの植物や木の実を取り込み進化することができ、今回のイレギュラーな禁手が起こったとも言えるわ。」

普通の人間ならば、そんな危険すぎるリスクを冒して手に出来るかも分からないメリットを求めようとは、思わない。そういう点では、兵藤一誠と言う男はある意味異常であり、それと共にそれほどまでにリアス・グレモリーの事を大切に思っているのだから。

真九「本当一誠には、色々と昔から驚かされるわ。んで話は変わるが、あの明らかに落ち込んでいるレジギガス達は、何？」

そう言うって俺は、部屋の隅に体育座りをして暗い雰囲気を纏っているレジギガス達とそれを前にあたふたしているアーシアに目を向けた。

リアス「あー・・・彼らは、さっきのレーティングゲーム作者が活躍させるはずだったのだけど、結果的に活躍するシーンが思い付かなくて活躍することが出来なかった事で凹んでるのよ」

これについては、マジですまん by 作者

真九「ウワー凄くメタイ・・・」

俺は、そう言いながらレジギガス達の前へ向かった。

真九「レジギガス・レジアイス・レジロック・レジスチル確かにお前達は、目を見張る活躍は、出来なかったかもしれない。だが、お前たちが初期地点を防衛してくれていたお陰で、皆安心して相手と戦うことができたんだ。だから凹むことは、無い。むしろ仲間を見えない場所から支えていたんだ。胸を張って誇ってすらいい。」

俺がレジギガス達にそう言うのと、レジギガス達は、顔を上げて立ち上がった。

そして、レジギガスは、俺を両手で突然掴みカクテルのように振りだした。

真九「ギャー!!アーシア助けてー!!」

アーシア「助けたいのは、やまやま何ですけど凄く嬉しそうなので、もう少しそうさせて上げてください。」

真九「うん嬉しくてやってるのは、俺でもわかるんだよ？ けどね？ さっきから肋骨
辺りからミシミシと鳴っちゃいけない音が聞こえるんだよね？ しかもこの上下運動で
身体が更に悲鳴をあげてるんだよ。だからお願いだから止めてくれないかな？」

アーシア「大丈夫です!! 私のとワイライト・ヒーリングで回復できます!!」

真九「まあ、こう言う結果になるんじゃないかって思ってた……この運命は、
変えられない運命だったか……」

ちなみにこの威力控えめにぎりつぶすとカクテルシェイクのコンボは10分以上続
き、俺はボロボロになったが、その代償に新たな力を手に入れる事ができた。

……うん凄く辛かった……

真九 side out

真九「んじゃそろそろ、俺達も準備しに行きますか。」

奏「おー!! やつと暴られる!! こっちは、早く暴れたくてしょうがなかったんだ!!」

スネーク「フツリアス達の戦闘特に、一誠の戦闘に刺激されたか。まあ、それは俺も
同じだな。」

戒斗「俺は、常に強者としての実力を現す! ただそれだけだ!」

フリード「血の気が多い方達だ事。」

カラワーナ「そう言うお前も一誠の戦闘を見て以降目がギラついているがな。」

黒歌「白音も頑張ったからお姉ちゃんも全力で頑張っちゃう

ユウキ「それじゃあまた後でね〜」

そう言い奏達が、部屋から出て行き。最後に真九が部屋から出ようとした時、真九は足を止めリアスの方へ向き直った。

真九「分かっているとと思うが、一誠が起きたらちゃんとお礼を言っておけよ。」

リアス「ええ、そんなこと言われなくても分かっているわ。貴方こそライザーに負けるなんて結果残さないようにしなさい。まあ、貴方や貴方の仲間に限ってそんなこと無いと思うけれど。」

真九「フツ言ってるくれるな。そこまで言われちゃ無様な姿を見せるわけにやいかんな。」

ガツシュ「おぬし達の戦い期待しておるぞ!!」

真九「おう!!サンキュー!!」

真九「あつそれと最後に1つだけ。一誠の様子に、皆気をつけておいてくれないかなんせ、赤龍帝の亜種禁手なだけでも前代未聞なのに、本来合わさるはずの無い力が合わさって起こった亜種禁手だ。何が起こってもおかしくないからな。」

リアス「ええ分かったわ。」

真九「おう!!頼んだぞ。んじやまたあとで。」

そう言つて真九は、部屋を出た。

くそれから20分後く

グレイファイア「これより、第2回戦のライザー・フェニックス様と、真九様のレーティングゲームを開始します。」

真九「それじゃあ行きますか!!」

つづく